七ケ浜町文化財調査報告書第７集

左道（さみち）遺跡

宮城県宮城郡
七ケ浜町教育委員会

七ケ浜町文化財調査報告書第７集

左道（さみち）遺跡

宮城県宮城郡

七ケ浜町教育委員会

序

緑と太陽のふるさとづくりを進めている七ヶ浜町には、国指定史跡の大木囲貝塚をはじめ先人の残した数多くの遺跡があります。こうした文化財を守り活用を図りながら、後世に伝えていくことは現代に生きる私たちの責務であり、将来の文化創造のために極めて重要なことであると思います。

本書は、昭和石油（現在昭和シェル石油）新仙台油槽所の建設計画に伴い、その用地に係る左道遺跡の事前発掘調査に関する報告書であります。この左道遺跡は従来から縄文時代早期末より前期にかけての貝塚として周知されておりましたが、今回の調査によって単に貝塚のみに止まらず、奈良・平安時代の集落であったことが解明され、当町七ヶ浜の歴史を考えるうえで、貴重な資料の一つとして大きな成果をもたらすことができました。

ここに本書を刊行するにあたりまして、直接調査の指揮にあたられ多大な御苦労をおかけした調査団の先生方をはじめとして、ご指導とご支援をいただきました県文化財保護課やご協力を賜りました関係各位に対し、感謝と敬意を表してやみません。

本書が遺跡に対するご理解の一助となり、しいては明日の地域文化向上のために少しでも貢献することを念じてやみません。

平成3年3月31日

七ヶ浜町教育委員会

教育長　佐々木　一　男

例　　言

1．本書は、宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字左道地内に所在する、左道遺跡の発掘調査に関する報告書である。

2．発掘調査は昭和52年度から54年度までの３年間に、第５次にわたり実施され、これまで現地説明会資料及び略報が出されているが、本書はこれらに優先するものである。

3．宮城県教育委員会発行の遺跡分布地図及び遺跡台帳では「左道貝塚」（遺跡番号20029）と記載されているが、調査の結果奈良・平安時代の集落跡との重複遺跡であることが確認されたので、本書では改めて「左道遺跡」と総括して呼称することとした。

4．本書の編集と執筆は、第１次から第４次までの調査を担当した高橋富雄、加藤孝、並びに宮城県教育庁文化財保護課の指導を受け、川村正が担当した。

5．本書における出土資料の鑑定や分析等について、次の方々や機関からご教示ご指導を賜った。

後藤勝彦　　藤沼邦彦　　白鳥良一　　阿部　恵

東北歴史資料館

6．本書の作成にあたり、出土した遺物の整理には次の方々のご協力をいただいた。

白井　一夫　佐々木祐一　小沢　健一　山内　　耕　村上　　昭

斎藤　秀寿　主浜　光朗　木島　勝也　渡辺　静枝　佐藤　康子

星　　洋子　岸柳あきら　芳賀　英実　渡辺　行子　吉嶋　広子

遠藤紀代子　三浦のり子　熊谷　信一

7．本書の土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原、1973）を使用した。

8．本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の２万５千分の１の地形図を複製使用した。

9．本文中に記載した氏名及び役職等の肩書は調査時のものとし、また敬称などを省略させていただいた。

10．本書で取扱った遺物は、七ヶ浜町教育委員会で保管しているものに限った。一部の遺物は、東北学院大学に分散・保管されているため、この分については追って報告する。

目　　次

序
例　言
Ⅰ．遺跡の位置と環境……1
　1．地理的環境……1
　2．歴史的環境……2
Ⅱ．調査に至るまでの経緯……3
Ⅲ．調査の実施と概要……4
　1．第1次・第2次調査……4
　2．第3次・第4次調査……5
　3．第5次調査……6
Ⅳ．発見遺構と遺物……9
　1．基本層序……9
　2．縄文時代の遺構と遺物……10
　　(1)　貝塚及び包含層……10
　　(2)　竪穴式住居跡……10
　　(3)　出土遺物……16
　3．奈良・平安時代の遺構と遺物……41
　　(1)　竪穴式住居跡……41
　　(2)　出土遺物……86
Ⅴ．まとめ……95

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．地理的環境

左道遺跡の所在する七ヶ浜町は、仙台湾のほぼ中央部にあり北側の松島湾と塩釜湾を画するように突出した半島状の町である。面積は13.24㎢と県内では最小面積の町であるが、人口は約1万9千人ほどあり、その密集度は高くなっている。加えて町の中央部では大規模な団地の造成が進められており、隣接地の塩釜市や多賀城市などからの転入者も増え、僅かずつではあるが人口増加の傾向にある。

町の産業は、海洋に面していることもあって近海漁業、とりわけ海苔の養殖がさかんで、近年の技術革新に伴い町の基幹産業となっている。他方、農業は耕作面積や従事者の減少化など、不振不利の状況にある。また、新仙台港の背後という地の利もあって、工業用地の造成や整備が図られており、新しい産業の中核となるよう期待がもたれている。

町の地形は、松島丘陵の南側突出部にあたり沖積作用がおよばず多島地形や溺れ谷地形を残す、いわゆる「松島」に含まれる。このため町の全域が県立自然公園松島に包括されているほか、仙台湾に面した東側の海岸線一帯は特別名勝松島の指定区域となっており、松島の南部景観を構成する要地となっている。町の中央部は岩石台地丘陵であり、亦楽地区の頂点が標高約64mと最も高く、次いで君ヶ岡の59m、多聞山の56mとなり、周囲に小起伏状丘陵地が広がっている。これに楔状に断層作用がもたらした三角洲性の低地や溺れ谷が食い込んでいて、これらの低地域は水田耕地などに利用されている。

町の地質は中生界第3畳系利府層の粘板岩と泥板岩を基盤とし、その上に新第3紀の凝灰質砂岩及び凝灰岩等の互層から成る網尻層とによって形成されている。すなわち町の中央部では西側に砂岩、東側に凝灰質砂岩が分布しており、北側には集塊岩凝灰角礫岩、南側には浜の部分に砂や礫がそれぞれ分布している。沖積堆積物としての泥、砂、礫は、前述の三角州性低地部分と重なり、中央に向かってくい込み楔状に分布している。

気候は海に囲まれていることもあって、内陸部に比べて著しい寒暖の差があまりなく、比較的おだやかな海洋性気候を示している。風向は夏季に南東が卓越し、冬季は逆に西北西となり、年間を通じては北西―西北西が卓越している。

左道遺跡はこうした町の中央部から北西の方向にあり、南北に延びた標高約30mの舌状岩石台地丘陵に所在している。北側の要害浦、西南側の下方浦（現在は埋め立てられ陸地）に挟まれており、南北にはしる貞山運河に突出した形で立地している。

遺跡のあるこの丘陵付近は、第3紀鮮新世の滝の口層が基盤岩と成っている。この地層は浅海性の地層で、青灰色の泥岩、第3紀中新統の砂岩系堆積物（軟岩）から成る凝灰質砂岩、それと凝灰角礫岩（軟岩）と玄武岩質安山岩（硬岩）の互層で、仙台周辺の三滝層や塩釜集塊岩そして高館層などで代表される角礫凝灰岩とから成っている。これらの基盤を被覆しているのが洪積世のローム層で、暗茶褐色から茶褐色を呈し、幾分砂質土を含み上面部は表土化している。層厚は40～70cmと薄く、下部地層に準じて堆積している。

遺跡周辺の地目は原野であるが、一部は畑作耕地として使用されている。遺跡の所在する丘陵を含め七ヶ浜町内の各丘陵地帯は、花淵浜の鼻節神社境内にモミ林が現存していることなどから、モミやイヌブナ林を極相とする地帯に含まれると考えられるが、現在は遺跡周辺の丘陵地に同様の林は全く見られず、この林が破壊され二次的に成立したと思われるコナラやアカマツ、スギの植樹などで覆われている。

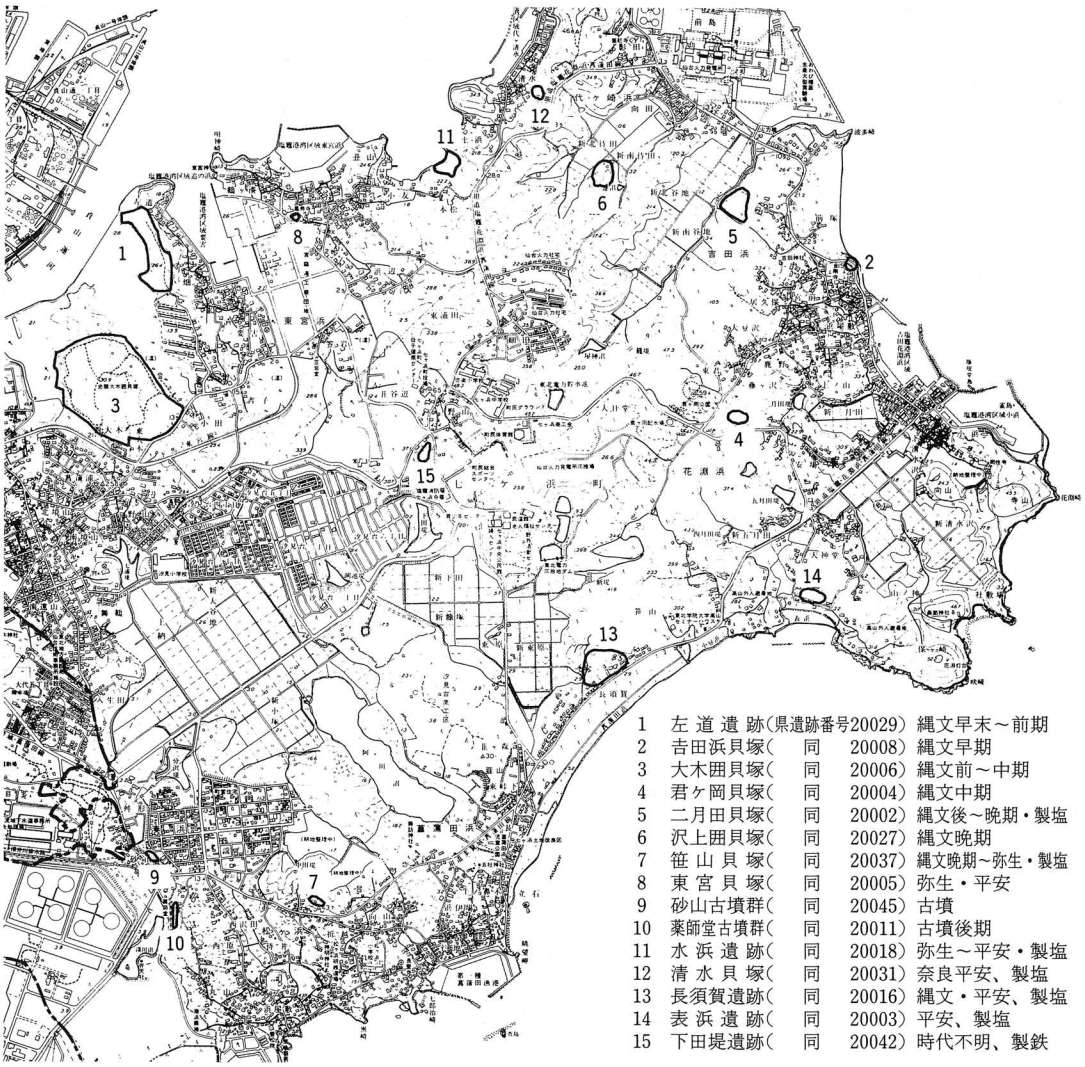
2．歴史的環境

松島湾や島嶼部及びこれらを包括する仙台湾岸は、東京湾岸の貝塚群と共に我国有数の貝塚密集地帯として知られている所である。松島湾の南岸を構成する七ヶ浜町にあっても、縄文時代の貝塚から平安時代のものまで多数の貝塚が形成されており、町内で確認されている遺跡全体の中で貝塚の占める割合は約半数にものぼり、貝塚密集度の高い地域となっている。

貝塚に限ってみるならば、町内最古のものは吉田浜貝塚で昭和38年の発掘調査(註1)では、縄文早期の土器や石器類が検出されている。左道貝塚はこれに続く早期末から前期初頭の貝塚として知られ、昭和47年貝層部の一部が調査されている。前期後半から中期のものとしては、町内唯一の史跡である大木囲貝塚(註2)をはじめ、君ヶ岡貝塚や藤ヶ沢貝塚など比較的大型の貝塚が形成されている。後期から晩期までは鳳寿寺（東宮）貝塚(註3)・二月田貝塚や土浜貝塚・沢上囲貝塚などがあり、各々発掘調査が実施されている。また、縄文晩期の貝塚からは、突底の製塩土器が出土しはじめている。

七ヶ浜町内では、こうした貝塚は中央丘陵部から各海浜に突出する張り出した地形の上面に形成されているが、張り出し地形とによって挟まれる海浜部分には、奈良・平安時代の製塩遺跡が点在しており、貝塚と共に七ヶ浜町内の遺跡環境の性格を形作る、要因の一つとなっている。

註1　後藤勝彦「宮城県宮城郡吉田浜貝塚」日本考古学年報17
2　後藤勝彦「左道貝塚」日本考古学年報24
3　七ヶ浜町教育委員会「大木囲貝塚発掘調査報告書」48～53年



1　左道遺跡（県遺跡番号20029）縄文早末～前期
2　吉田浜貝塚（　同　20008）縄文早期
3　大木囲貝塚（　同　20006）縄文前～中期
4　君ヶ岡貝塚（　同　20004）縄文中期
5　二月田貝塚（　同　20002）縄文後～晩期・製塩
6　沢上囲貝塚（　同　20027）縄文晩期
7　笹山貝塚（　同　20037）縄文晩期~弥生・製塩
8　東宮貝塚（　同　20005）弥生・平安
9　砂山古墳群（　同　20045）古墳
10　薬師堂古墳群（　同　20011）古墳後期
11　水浜遺跡（　同　20018）弥生～平安・製塩
12　清水貝塚（　同　20031）奈良平安、製塩
13　長須賀遺跡（　同　20016）縄文・平安、製塩
14　表浜遺跡（　同　20003）平安、製塩
15　下田堤遺跡（　同　20042）時代不明、製鉄

II．調査に至るまでの経緯

1973年（昭和47年）中東諸国間において起きた第４次紛争が、単に当事国のみならず世界各国に多大な影響を及ぼす結果となったことは、未だ記憶に新しいことである。石油産出国の大部分を占めるアラブ諸国のとった石油戦略により、国際経済へ深刻な石油ショックとして波及したためである。とりわけ石油の輸入依存度が極めて高いうえに、そのほとんどをアラブ産油諸国から買い付けている我国にあっては、直接経済問題となって跳ね返り、戦後の高度成長経済に決定的な歯止めとなったばかりか、一般市民生活へも少なからず影響を及ぼした。そして各情報を通じて石油エネルギーの節約が呼びかけられ、省エネルギー・省資源という考え方が市民の意識の中に浸透しはじめたのも、このころであった。

こうした社会情勢下にあって昭和石油株式会社では、宮城県下をはじめ福島や岩手、山形の各県に、円滑な石油の供給と備蓄化を図るため、新仙台油槽所の建設計画を打ち出していた。同社はその適地として七ヶ浜町の東宮浜字左道地内に用地を選定し、昭和53年度開業を目標に用地買収など

の準備にあたっていた。しかしこの計画用地内には「左道貝塚」が周知の遺跡として含まれていたため、昭和石油から遺跡の取り扱いや対処の方法等について、町教育委員会あて協議の要請が出されてきた。これを受けた町教育委員会は、宮城県教育庁文化財保護課と連絡をとり、指導を受けながら計画の縮小などの変更を求めたが、既に用地買収などの準備が完了していたこともあり、昭和石油にあっては計画を推進せざるを得ぬ状況にあり、油槽所の建設に先行して遺跡の記録保存を行うべく、事前発掘調査を実施することとなったのである。遺跡の発掘調査を実施するにあたって、昭和石油と町教育委員会との間で、調査の期間や方法等協議の場がもたれたが、さしあたっての問題は直接調査現場にたずさわって指揮をとる調査員の選定であった。町教育委員会としては、史跡大木囲貝塚の調査事務所に専門の職員1名を配置していたのだが大木囲貝塚の環境整備事業と調査にあたっていたため、左道遺跡の調査と並行することは困難であるばかりか、事務的対応にも無理が生じかねぬという状態にあった。こうしたことから改めて発掘調査の依頼を県教育委員会に求め、県としても調査の実施に当たるべく検討したが、東北新幹線の建設に係る遺跡や県内各所の緊急調査を多数かかえていた県も、調査に入るまでの時間的余裕がないという状況であった。そこで大学の研究機関へ調査の依頼を打診したところ、東北大学の高橋富雄教授と東北学院大学の加藤孝教授がこれを受け、両氏を中心とする調査団が結成されて左道遺跡の発掘調査が実施されることになったのである。

Ⅲ．調査の実施と概要

1．第1次・第2次調査

調査の要項

調査期間　（第1次）昭和52年8月1日～9月20日
　　（第2次）昭和52年12月22日～12月29日

調査面積　約700㎡

調 査 員　高橋　富雄（東北大学教授）
　　加藤　　孝（東北学院大学教授）
　　坂田　　泉（東北大学助教授）
　　丹治　英一（多賀城市立第二中学校教頭）

調査協力者　斉藤　栄吉（泉市文化財保護委員長）
　　野崎　　準（日本金属学会博物館学芸員）

調査補助員　東北大学工学部建築意匠科
　　東北学院大学考古学実習生
　　東北学院大学博物館学実習生

調査の概要

左道遺跡は地元住民の間でも貝殻の散布地として知られていたが、丹治英一氏は七ヶ浜中学校に勤務していたおり、町内の各遺跡を踏査しその成果を昭和44年10月「七ヶ浜の遺跡」としてまとめ、その中でも同遺跡を早期末から前期初頭の貝塚と紹介し、県の遺跡台帳にも記載され周知されることとなった。昭和46年には後藤勝彦氏の指導のもとに県立塩釜女子高等学校の社会部により、貝塚の主体部の一部が調査されている。調査団はこれらの成果を踏まえ、貝塚主体部を主な発掘調査の対象として約700㎡にわたりトレンチを設定し、第1次と第2次調査を実施した。しかし調査の終了時点において、調査地点や調査面積は貝層部のみにしぼられていたことから、貝層に伴う住居跡の有無等遺跡の範囲確認調査を行ったうえ、さらに調査を継続してはどうかと調査団に対する県教育委員会の指導助言がなされた。これはやむをえず遺跡の破壊を前提として、記録保存化を図る場合の調査に対する基本的な考え方と方法の相違によるものであったと思われ、遺跡の時期的考察や性格付けが行われればそれでよしとする学術的な見解と、建設計画地内の遺跡の範囲を確認のうえ、全面調査を実施すべきであるという見解の違いがあったようであり、調査団の認識の甘さがあったと思われる。こうした事から調査団と町教育委員会、そして県教育委員会も含め今後の調査の在り方や進め方について協議の場がもたれ、県教委でも多忙を極めていたスケジュールの調整を図り、第3次調査が実施されることとなった。

2．第3次・第4次調査

調査の要項

調査期間　（第3次）昭和53年2月17日～3月31日
　　（第4次）昭和53年4月25日～7月21日

調査面積　約3000㎡

調査員　高橋　富雄（東北大学教授）
　　加藤　　孝（東北学院大学教授）
　　丹治　英一（多賀城市立第二中学校教頭）
　　高橋　多吉（県文化財保護課調査第一係長）
　　丹羽　　茂（同上技師）
　　高橋　守克（　〃　）
　　阿部　博志（　〃　）
　　阿部　　恵（　〃　）
　　遊佐　五郎（　〃　）
　　千葉　宗久（　〃　）
　　佐藤　好一（　〃　）
　　一条　孝夫（　〃　）
　　真山　　悟（　〃　）
　　熊谷　幹男（　〃　）
　　川村　　正（七ヶ浜町教育委員会嘱託）

地元協力者

板橋　芳雄・星治右衛門・鈴木　雅彦・赤間　長和・佐藤　壮一・小野　清司・渡辺　長敏・相沢　政次・佐藤千代治・千葉　　満・合田　和典・鈴木惣右衛門・佐藤　辰男・遠藤　　博・赤間今作・瀬戸さかえ・飯野　正子・米沢しずか・赤間恵美子・加藤　正子・伊藤のぶよ・野田　雅子・長田あや子・鈴木　泰子・高橋てる子・韮山　チエ・慶長　一子・小川　松子・堀　とめよ・星　まさの・佐藤　悦子・鈴木まつ子・佐藤　貞枝・大浜喜代子・坂下　豊子・星　　とみ・佐藤みはる

調査の内容

第3次と第4次調査では県文化財保護課の全面的な指導と支援を受けて、これまでの貝層部分からさらに現況の地形からみて一応の区切りになると推察される地域まで調査の対象面積を広げ、遺構の確認と分布範囲の確定に主眼をおき、調査が進められた。この結果、縄文時代の貝層そのものは、早期から前期の貝塚という時期的な性格要因もあって、比較的小規模なものであり他に広がりのないことが確認された。しかし、貝層主体部の東側斜面において縄文土器の包含層が確認されたほか、奈良・平安時代の住居跡の存在が判明し、これらは南北に延びる丘陵から西南方に張り出した小突出地に構築されており、こうした小突出地は他にもみられることから、さらに他地域への遺構の広がりが推察された。

3．第5次調査

調査の要項

調査期間　（伐採試掘調査）昭和54年4月

（第5次）昭和54年5月10日～昭和55年3月31日

調査面積　約12,000㎡

調査員　阿部　　恵（県文化財保護課調査係技師）

千葉　宗久（同上技師）

渡辺　泰伸（仙台育英学園高校教諭）

川村　　正（七ヶ浜町教育委員会文化財保護係主事）

補助員

藤田　俊雄・石本　　敬・庄司　博雄・高橋　　学・那須　裕二・工藤まり子・佐藤　雅子・井上　敦子・梅原　秀子・芳賀　英実・村田　晃一・本田　雄一・相沢　清利・中嶋　市子・富田　美幸・瀬川恵理子・赤沢　靖章・茂木　好光・高橋　良典・白鳥　由美・熊谷　育子・渡辺　裕美・赤石沢　亮・石川　博夫・溝口　博康

（以上東北学院大学考古学研究部員）

小沢　健一・佐藤　正弘・斉藤　秀寿・佐々木祐一・臼井　一夫・佐々木啓一・谷平　光信・千葉　　亨・田中　瑞穂・丹治　幹枝・大茄子川康司

（以上東北学院大学生）

調査協力者

樋渡　利美・中村　昭彦・只野　宗一・結城　武聡・長谷部亮一・山田　義昭・山川　仁雄・

14 15 16 17 18 19 20 21
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
△(F−40)
貝層
包含層
A区
B区
C区
H区
D区
G区
F区
E区
0
50
100m

武田　重雄・赤間　和浩・相沢　　師・鈴木　英樹

（以上仙台育英学園高校郷土史クラブ員）

地元協力者

赤間　栄作・渡辺　長敏・小野　　勉・坂下　　進・小野寺清治・板橋　芳雄・佐藤　きわ・熊谷ユリ子・韮山　チエ・坂下　豊子・鈴木やよい・高橋てる子・高橋まゆみ・赤間とみ子・佐藤　康子・佐藤さき子・渡辺　静枝・星　千恵子・岸柳あきら・西村美津江・星　　典子・星　　洋子・佐藤富美子

調査の内容

第４次調査の実施段階において、従来早期から前期の貝塚とされていたこの遺跡が、奈良・平安時代の住居跡を含む重複遺跡であることが判明したことから、調査の対象面積を更に広げる必要が生じた。このため第５次調査に先立って建設計画用地内の全面立木伐採と下草除去を行い、５カ所の地点を選定し試掘調査を実施した。その結果は各箇所において土師器や須恵器の破片が認められ、計画区域全面にわたり調査を実施することとなった。調査に際しては対象の面積が広大なことから、人力による掘り込み作業では膨大な時間と経費を要するため、表土剝離の段階まではブルトーザーとユンボを使用して建設予定地全域に調査を進めた。この結果各小突出地で住居跡が発見され、小突出地に挟まれた低地部が遺物包含層となっていることが確認された。

Ⅳ．発見遺構と遺物

１．基本層序

調査区内の堆積層は、丘陵地であるため馬の背部は耕作地として利用された際に削平され、斜面の下方になるにしたがい再堆積層が厚くなっている。部分的に攪乱されている地域を除きほぼ一定した堆積状態を示し、基本的に４層に分けられる。

・第１層

暗褐色（10ＹＲ３／３）シルトの表土である。

・第２層

黒褐色（10ＹＲ２／２）シルトの層で、獣骨等を多量に含む遺物包含層である。

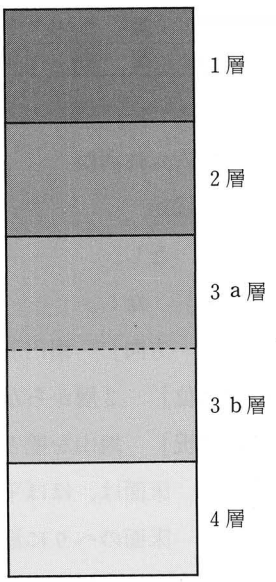
・第３層

２層に分けられる。ａ層は黒褐色（10ＹＲ３／２）シルトの層で、焼土・炭化物を含み、粘性がある。

ｂ層は暗褐色（10ＹＲ３／４）シルトの層で、細かい炭化物と地山土を含み、しまりがある。

・第４層

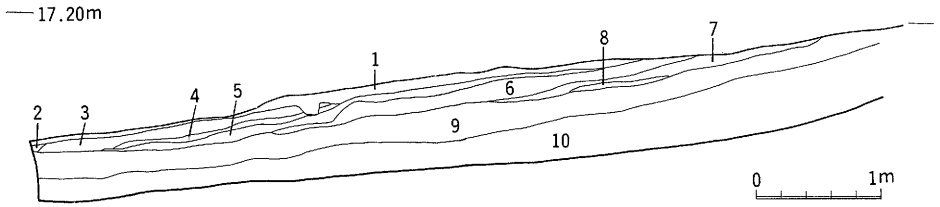
黄褐色（10ＹＲ５／４）シルトの地山である。凝灰角礫岩が風化してできたもので、粘性・しまりともあまりなく、凝灰岩黄色パミス粒を含み層厚は40から70㎝ほどである。



2．縄文時代の遺構と遺物

(1) 貝塚及び包含層

左道貝塚は北西方の塩釜湾に張り出した標高26.4mの丘陵の西側斜面に形成されている。東側は要害浦、西側は現在埋め立てられているが下方浦となっており、これを挟んで縄文前・中期の大木囲貝塚と対峙している。貝層の厚さは薄いところで10cm、厚いところでも約40cm前後である。貝層範囲は約20m×7mほどで、暗褐色の地山までの深さは70cm、地山上に焼土と木炭粒を含む黒褐色土がのり、そのうえに貝層が形成されている。貝塚を形成している自然遺物で顕著なものが、貝類ではスガイでありこれについでアサリ・マガキとなっている。魚類ではマダイがおおくみられ、動物ではシカ・イノシシとなっている。



貝層東西セクション

層位	土色	土性	備考
第1層	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	
3			貝層（カキ・アサリ多）
4	褐色(10YR4/4)		灰層
5			貝層（アサリ多く，その他にスガイ・カキなど）
6	にぶい黄褐色(10YR4/5)		灰層
7			貝層（スガイ・アサリ多）
8	にぶい褐色(7.5YR5/4)		灰層
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土・細かい炭化物・地山土を含む　粘性あり
10	暗褐色(10YR3/4)	シルト	細かい炭化物・地山土を含む　しまりあり

(2) 竪穴式住居跡

第25号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　楕円形と思われる。

［竪穴層位］　2層からなる。自然堆積土である。

［壁の状況］　地山を壁としている。壁はゆっくり立ち上がる。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。

［柱穴］　床面のへりに沿って6個のピットが認められる。いずれも直径10cm、深さ約10cm前後で壁面に斜めに掘り込まれている。

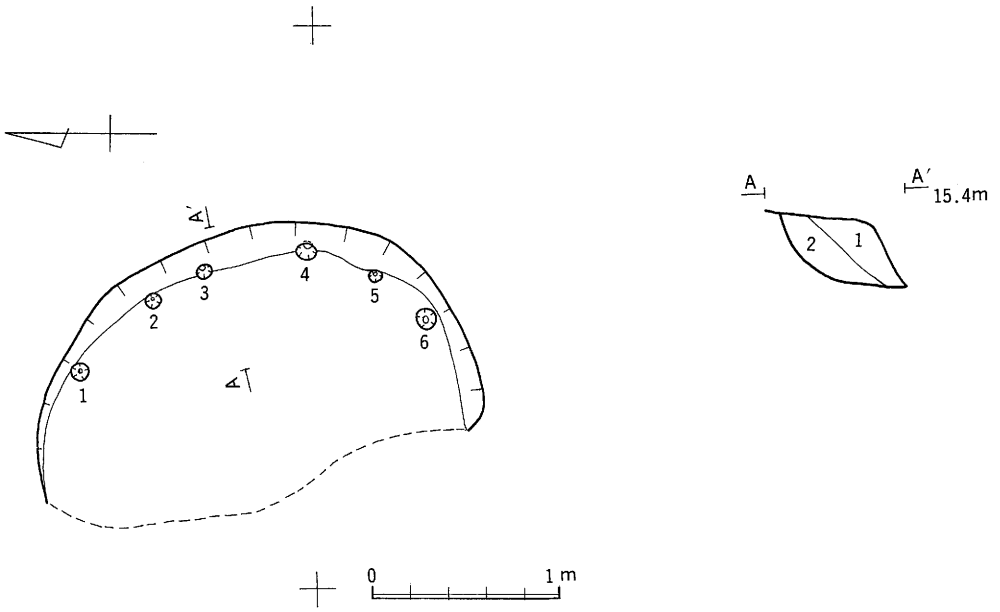
［周溝］　なし。

［炉・カマド・煙道］　なし。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　遺物が出土していないため年代決定は不可能であるが、竪穴の平面プランから縄文時代早期末と考えられる。

［出入口・周囲状況］　なし。



B区　第25号住居　東西セクション（A－A′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR2/2)	シ　ル　ト	炭化物と凝灰岩粒を少し含む。
2	黒　褐　色(10YR3/2)	シ　ル　ト	炭化物をわずかと凝灰岩粒を多く含む。

第21号住居跡

［重複］　住居の西側で24号住居と重複している。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　東西４ｍ×南北4.2ｍの円形である。

［竪穴層位］　住居内堆積土は５層からなる。堆積状況から推測して、全て自然堆積土である。

［壁の状況］　地山を壁としている。壁の保存状態がよく、壁高は最大で43cmである。壁の上端と下端の最大幅が８cmしかなく、しかも急である。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。貼床の有無は不明である。

［柱穴］　ピットと認められるのは15個ある。住居壁、住居壁そばに等間隔に14個（１～14）で、そのうち12～14は24号住居内と住居中央に１個（15）である。全て柱穴と考えられる。柱穴はすべて直径10cm程である。

［ピットの深さ］　１－３cm　２－３cm　３－13cm　４－13cm　５－11cm　６－４cm　７－12cm

8－3cm　9－6cm　10－1cm　11－4cm　12－4cm　13－6cm　14－3cm　15－5cm

［周溝］　平面形からは確認できなかったが、セクション図から周溝の埋め土らしいものが確認できた。

［炉・カマド・煙道］　なし。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　遺物が出土していないため、年代は不明である。

［出入口・周囲状況］　特になし。

第24号住居跡

［重複］　住居の東側で、21号住居と重複している。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　東西2.2m―推定（残存1.85m）×南北2.65mの楕円である。

［竪穴層位］　住居内堆積土は3層からなる。堆積状況から推測して、全て自然堆積土である。

［壁の状況］　地山を壁としている。壁の保存状態は悪く、壁高は最大で18cmである。壁の上端と下端の最大幅が16cmで平均でも約10cmである。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。貼床の有無は不明である。

［柱穴］　ピットと認められるのは9個である。住居壁、住居壁付近に等間隔でおかれている。そのうち3～6は21号推定住居内にある。全て柱穴と考えられる。柱穴は全て直径10cm程度である。

［ピットの深さ］　1－3cm　2－2cm　3－13cm　4－12cm　5－13cm　6－3cm　7－3cm　8－2cm　9－2cm

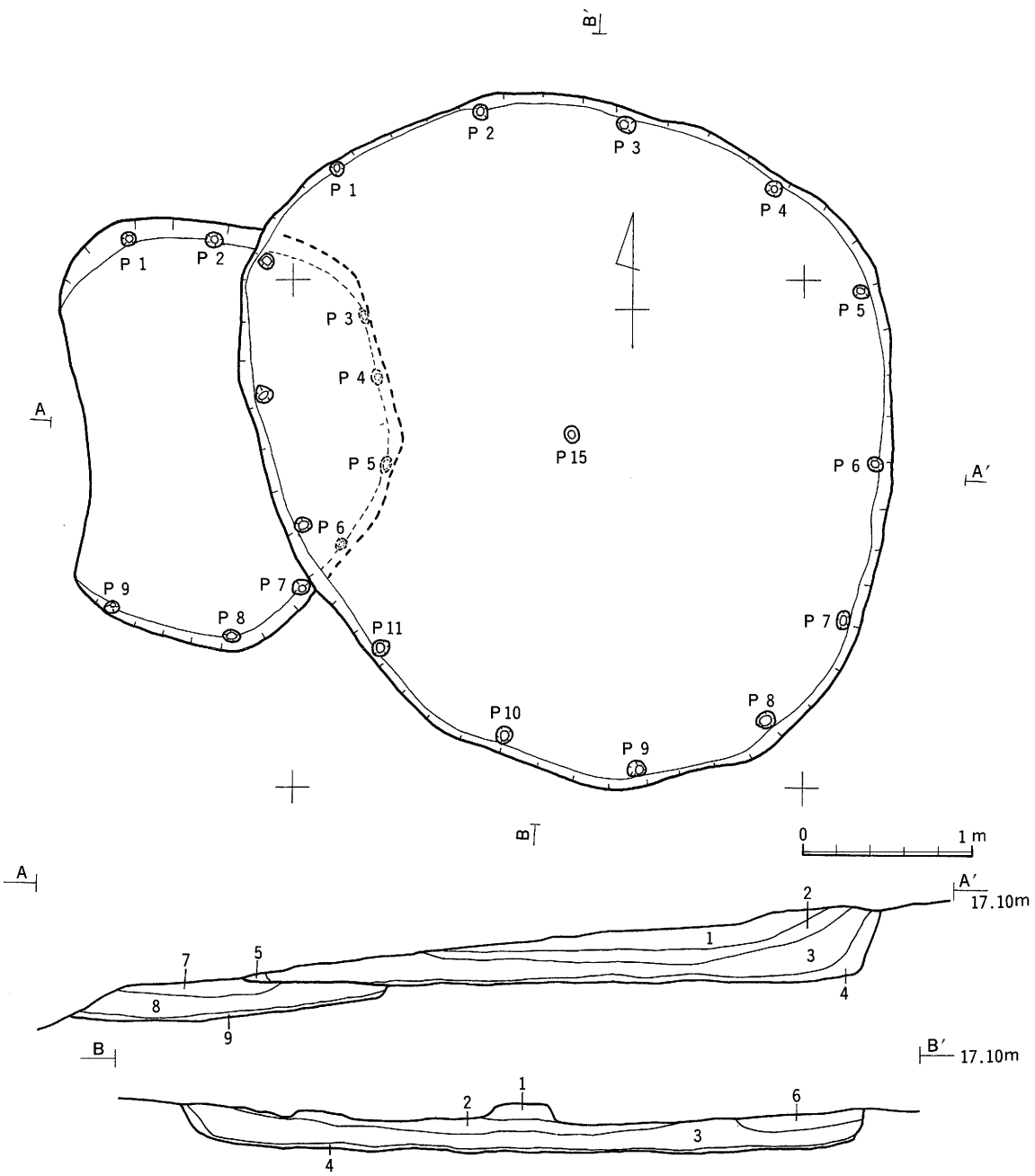
［周溝］　なし。

［炉・カマド・煙道］　なし。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　遺物が出土していないため年代決定は不可能であるが、住居の形態から推察すると縄文前期頃のものであろうか。

［出入口・周囲状況］　特になし。



C区　第21号住居・24号住居　東西セクション（A－A′）

層　位	土　色	土　性	備　考
第1層	暗　褐　色(7.5YR3/3)	シ　ル　ト	多量の地山細粒・土器片と少量の炭化物を含む。しまりあり。
2	暗　褐　色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	多量の炭化物と少量の焼土粒を含む。しまりあり。
3	褐　色(7.1YR4/4)	シ　ル　ト	多量の黄褐色（10YR5/6）のブロック状の地山土と少量の炭化物・焼土粒を含む。しまりあり。
4	褐　色(7.5YR4/4)	シ　ル　ト	少量の炭化物・焼土粒を含む。粘性・しまりあり。
5	暗　褐　色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	しまりあり。
6	暗　褐　色(7.5YR3/3)	シ　ル　ト	多量の炭化物・赤褐色（2.5YR4/8）の焼土粒を含む。しまりあり。
7	暗　褐　色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	炭化物・地山細粒を含む。
8	褐　色(7.5YR4/3)	シ　ル　ト	黄褐色(10YR5/6)の地山土をブロック状に含む。 } 24住埋土
9	褐　色(7.5YR4/6)	シ　ル　ト	炭化物を含む。粘性あり。

第23号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　楕円形を示している。

［竪穴層位］　住居内堆積土は4層からなる。堆積状況からして全て自然堆積土と考えられる。

［壁の状況］　地山を壁としている。壁は住居の東側しか残存しておらず、その他は自然傾斜のため切られているようになっている。北側の一部の壁は溝（年代は不明）を切って作られている。壁高は最大24cm、最小13cmである。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。

［柱穴］　ピットは住居内に7個と住居東壁に1個の計8個が確認されたが、柱穴と考えられるのは5個（1～5）である。他の2個（6・7）は大きさがほぼ同じであるが、住居壁から離れているため柱穴とは考えにくい。住居東壁のピット（8）は住居跡と関連ありそうだが柱穴ではない。

［ピットの深さ］　1－9cm　2－8cm　3－14cm　4－16cm　5－16cm　6－7cm　7－7cm　8－9cm

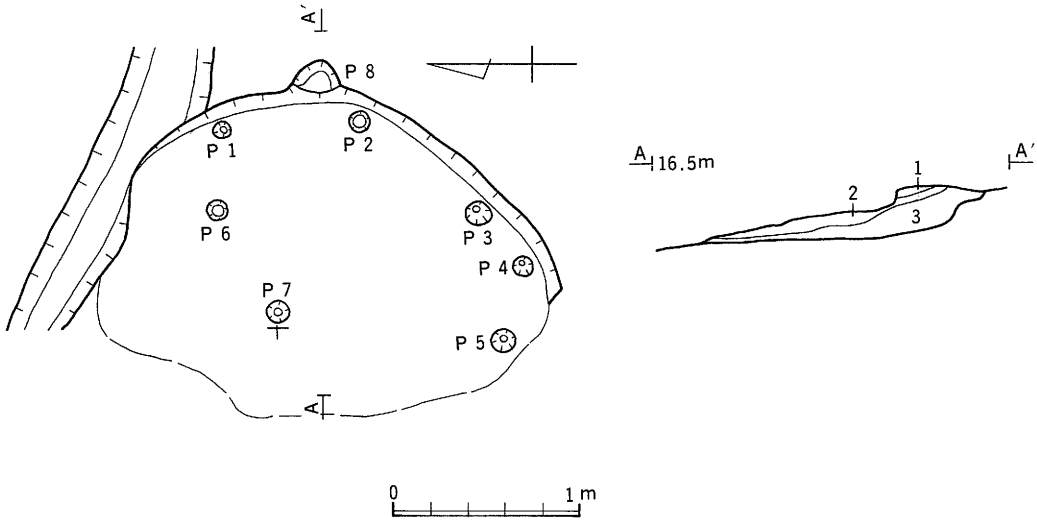
［周溝］　なし。

［炉・カマド・煙道］　なし。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　不明。

［出入口・周囲状況］　なし。



C区　第23号住居　東西セクション（A－A′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(7.5YR3/2)	シ　ル　ト	
2	黒　褐　色(7.5YR2/2)	シ　ル　ト	炭化物・焼土粒を含む。若干粘性あり。
3	暗　褐　色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	炭化物・焼土粒を含み，緻密で堅い。床直上はソフト。

第22号住居

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　不明。

［竪穴層位］　２層からなる。自然堆積土である。

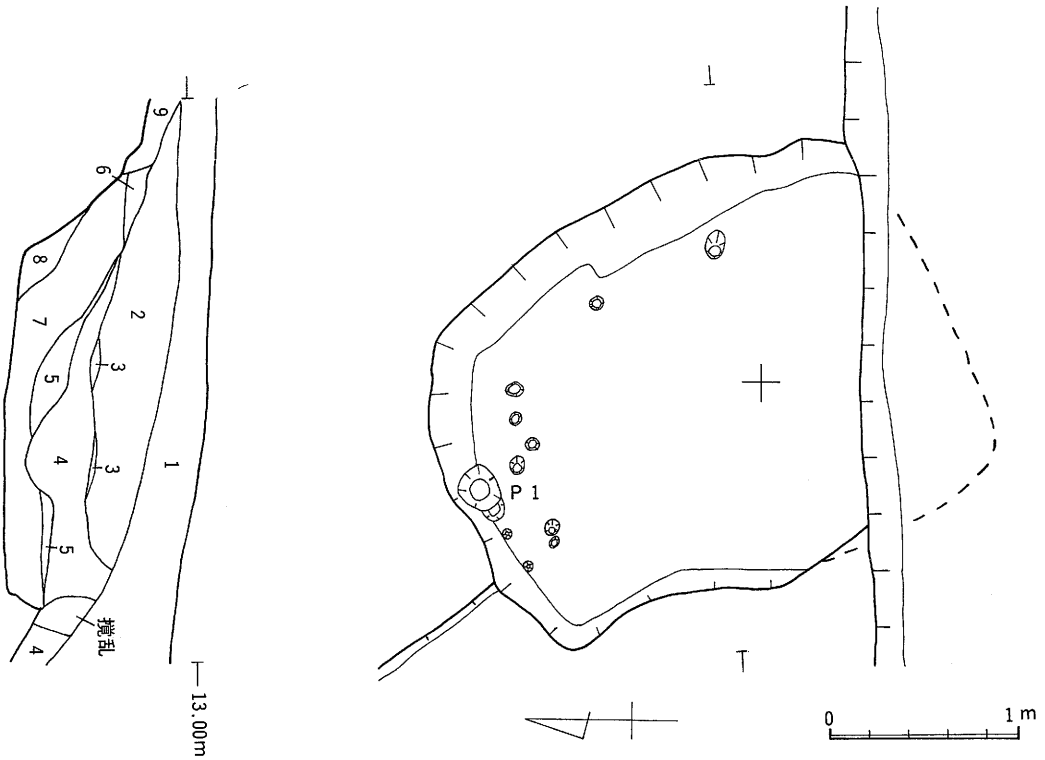
［壁の状況］　南側の壁を欠き、西側も一部崩壊している。壁高は東側で約50cmである。

［床面］　平坦である。

［柱穴］　北側壁近くにピットが１つある。東から北壁にそって小ピットが５つみられるが、柱穴になるかどうかは不明。

［ピットの深さ］　１―21cm小ピット群の深さは、平均約５cmである。

［周溝］　なし。



C区　第22号住居　東西セクション（A―A'）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第１層			表　土
2	黒　褐　色(10YR3/2)	シ　ル　ト	
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)		細砂を含む。
4	黒　褐　色(10YR3/1)	シ　ル　ト	獣骨を多量に含む。遺物包含層。
5	暗　褐　色(10YR3/3)	粘土質シルト	有機物を多量に含み粘性強い獣骨を多量に含む。
6	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	粗砂を含む。
7	暗　褐　色(10YR3/4)	〃	
8	褐　　色(10YR4/4)	砂質シルト	暗褐色(10YR3/4)を含む。
9	暗　褐　色(10YR3/4)	砂質シルト	

［炉・カマド・煙道］　なし。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　羽状縄文やループ文が施文された土器が埋土より出土している。早期末頃の縄文時代の住居跡であろう。

［出入口・周囲状況］　なし。

(3)　出土遺物

縄文土器

貝層および遺物包含層から出土した縄文土器は、ほとんどが深鉢の破片で、胎土に繊維を含むものであった。これまでの発掘調査や表採により、いわゆる丸底のものと小（短）径平底の深鉢とが確認されており、丸底のものが時期的に先行するものと推察されていた。貝層部セクションには、炭化物を含む灰層によって区画される箇所が認められ、時間的な堆積の推移を示すものと考えられ、重点的に遺物の抜き取りを行ったが、両者は渾然と出土しており、また貝層そのものが薄いこともあって、丸底のものと平底のものとの時期的上下関係を、層位から確認することはできなかった。出土した土器を施文および形態を中心に大別し、記述すると次のように分類される。

施文別分類

・土器全面に同一の文様が施されている

　斜行縄文

　羽状縄文　　結束あり　結束なし

　撚糸文　　不整撚糸文　正整撚糸文

　ループ文

・口縁部に文様帯が設けられ体部との区画がされている

　押型（圧、捺）文による区画

　刺突文による区画

　ループ文による区画

　撚糸文による区画

・口唇部に連続する押し型文のあるもの

・底部に施文されているもの

形体別分類

・口縁部

　頚部からそのまま立ち上がるもの

　ゆるやかに外反して立ち上がるもの

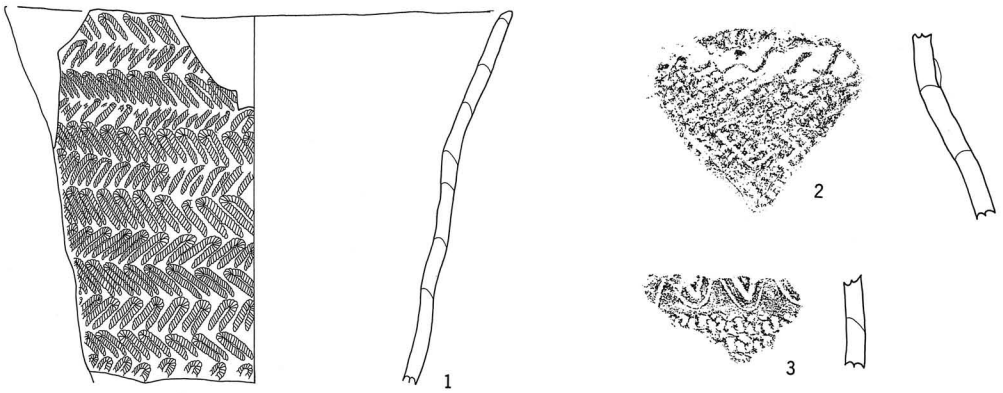
　ゆるやかな波状口縁のもの

　内反するもの

・胴部

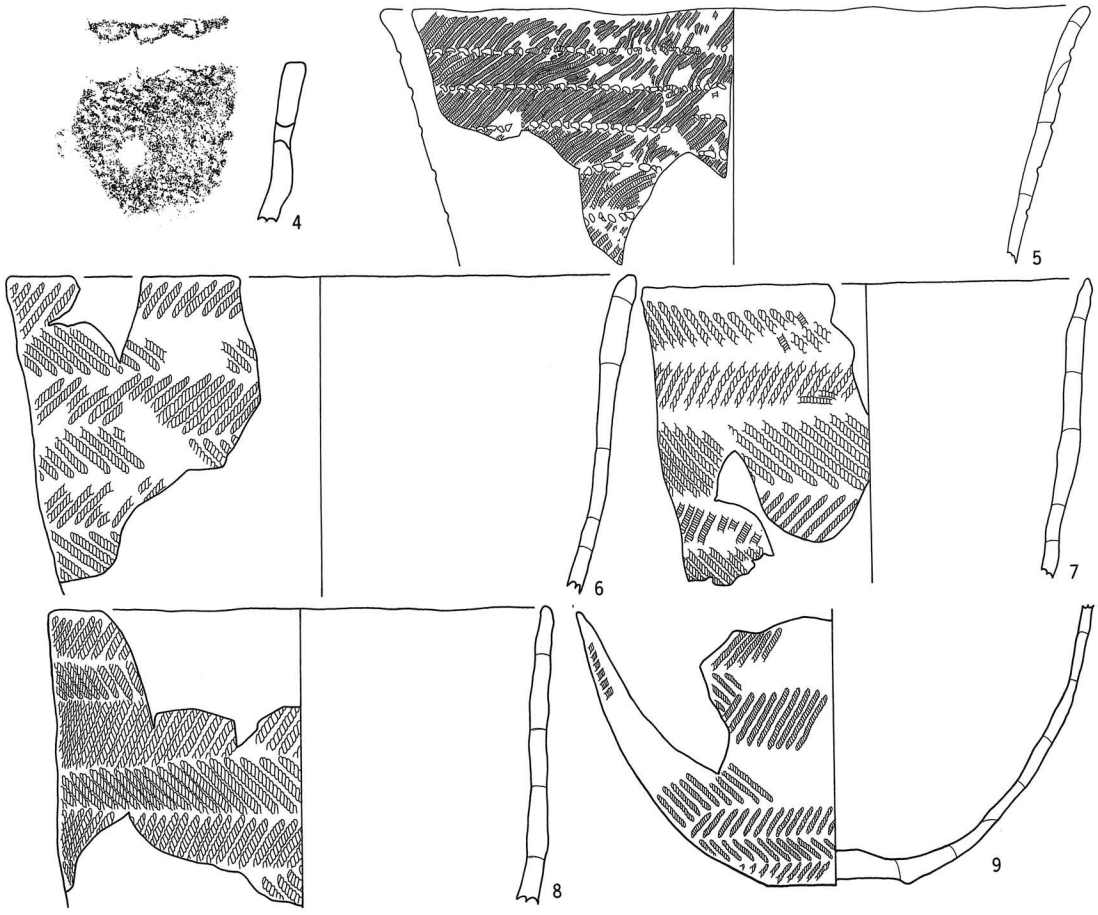
　まっすぐ立ち上がるもの

　膨らみをもつもの



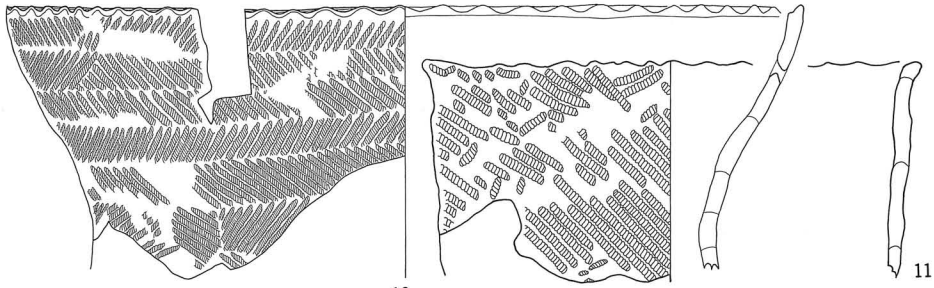
表－1　表　土

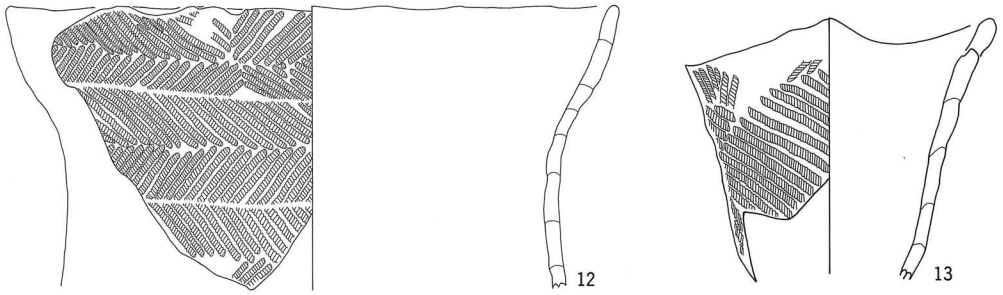
土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
1	H区O－45 表土	深鉢	口縁部	－	26.4	－	0.7	指ナデ調整	LR・RLの交互のループ文様	S　石英砂を3％含む　1/4
2	H区P－45 表土	深鉢	体部	－	－	－	0.9		羽状縄文　指によるつまみ出し	S　1/3
3	H区P－44 表土	深鉢	体部	－	－	－	0.7		小波状沈線文　ループ文	S　1/3

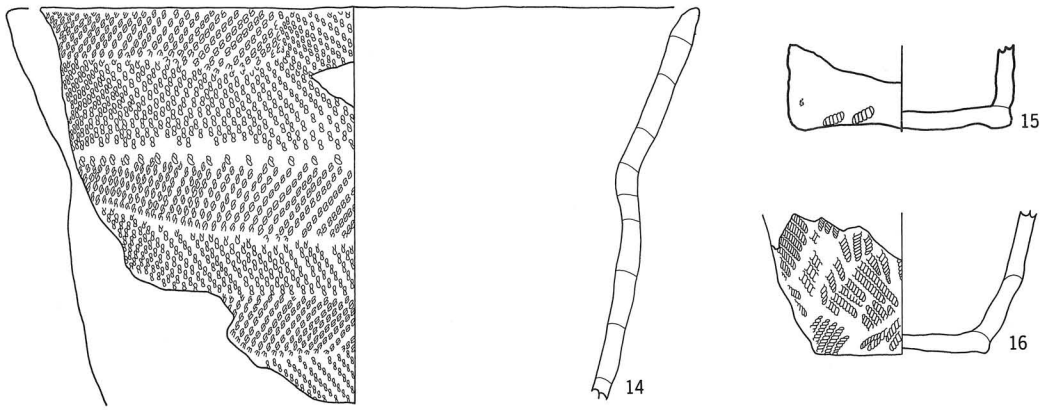


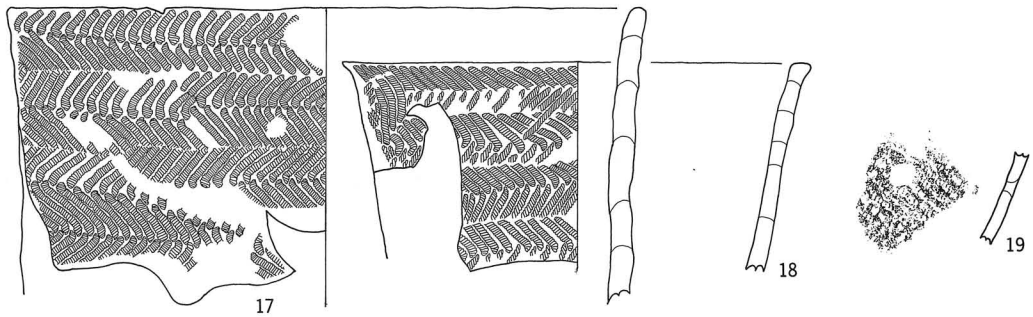
表－2　2　層

土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
4	B区 2層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.8		口唇部一交互刺突文 RL縄文	S　補修孔あり　1/3
5	H区E－8 2層	深鉢	口縁～体部	－	37.0	－	0.7		LR縄文（結束）	S　石英粒・小石粒少し含む　1/4
6	H区M－42 2層	深鉢	口縁～体部	－	22.8	－	0.6		羽状縄文	大粒の石英砂を含む　1/3
7	H区JK間60 2層	深鉢	口縁～体部	－	17.6	－	0.7		羽状縄文	石英粒・小石粒を含む　1/3
8	H区M－42 2層	深鉢	口縁～体部	－	20.0	－	0.6	横位指ナデ	羽状縄文	S　砂粒を7％含む　1/3
9	H区JK間60 2層	深鉢	体部～底部	－	－	5.5	0.5		羽状縄文 底部一放射状に縄文	砂粒を含む　平底　1/3



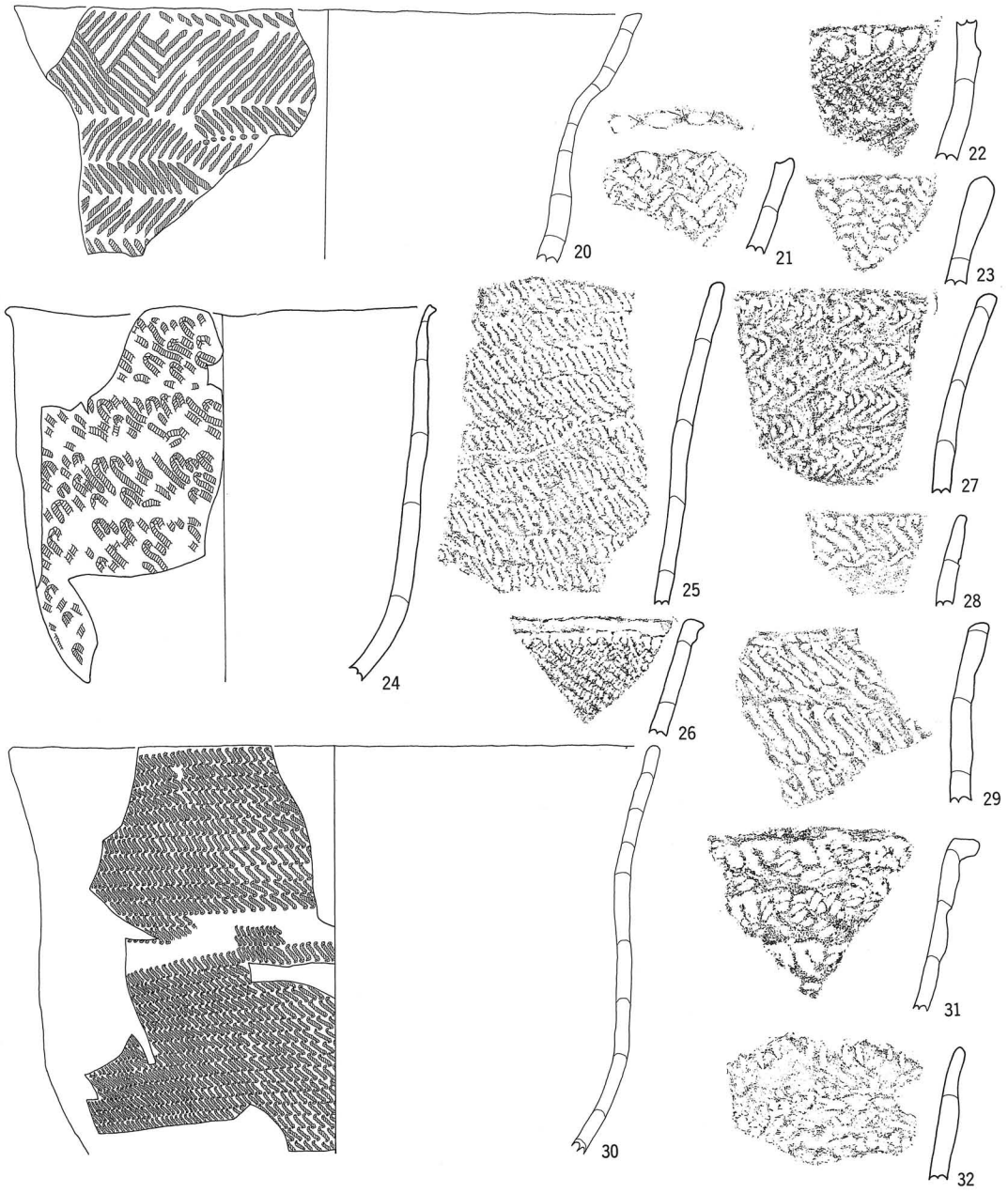






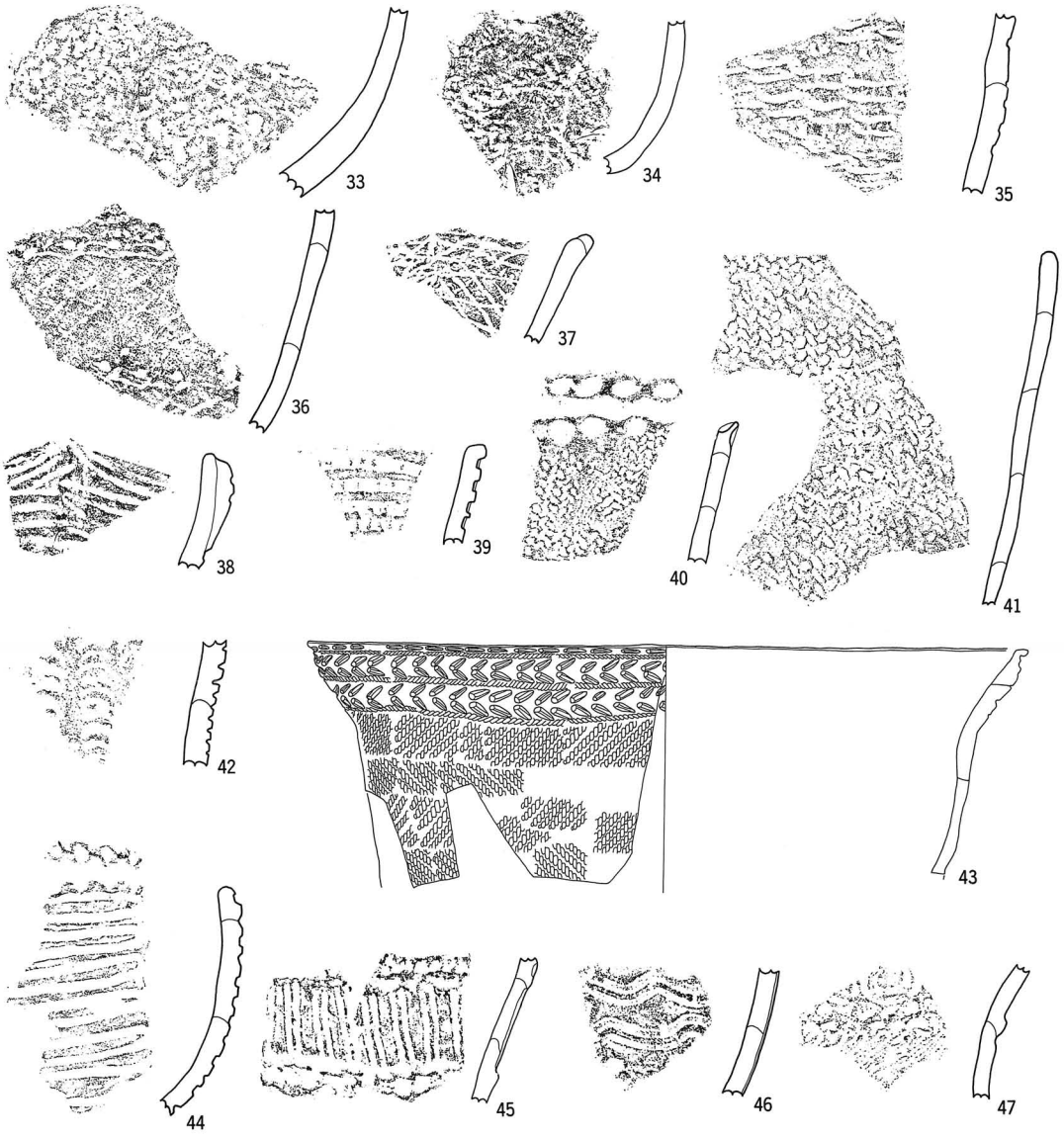
表－3　2　層

土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
10	H区MN間ベルト　2層	深鉢	口縁～体部	—	42.0	—	0.9	横位指ナデ調整	羽状縄文　口唇部一小波状文	S　石英砂５％程含む	1/4
11	H区N－44　2層	深鉢	口縁～体部	—	9.7	—	0.6		縦位ＬＲ縄文縦位ＲＬ縄文小波状口縁	S　礫粒・微砂２～３％含む	1/3
12	H区Ⅰ－12　2層	深鉢	口縁～体部	—	32.0	—	0.8		羽状縄文	S　小石粒・石英粒・礫粒５％程含む	1/4
13	H区M－54　2層	鉢	口縁～体部	—	—	—	0.6		羽状縄文口縁部一山形突起		1/3
14	H区M－44　2層	深鉢	口縁～体部	—	33.4	—	0.8	口縁部横位指ナデ体部縦位指ナデ	羽状縄文（二段二条）	S	1/3
15	H区R－58ベルト　2層	鉢	体部～底部	—	—	5.5	0.4		横位ＬＲ縄文	石英粒・礫粒・小石粒を３％含む　平底	1/2
16	H区N－41　2層	鉢	体部～底部	—	—	6.8	0.6	指ナデ調整	縦位ＬＲ縄文縦位ＲＬ縄文	S　砂粒を含む　平底	1/3
17	H区D－８ベルト　2層	深鉢	口縁～体部	—	24.8	—	0.9	指ナデ　ミガキ	羽状縄文（結束）	石英粒・小石粒を３～５％含む	1/3
18	H区N－41　2層	深鉢	口縁～体部	—	18.5	—	0.6		羽状縄文		1/3
19	B区　2層	深鉢	体部	—	—	—	0.5		ＲＬ縄文	S　補修孔あり	1/3



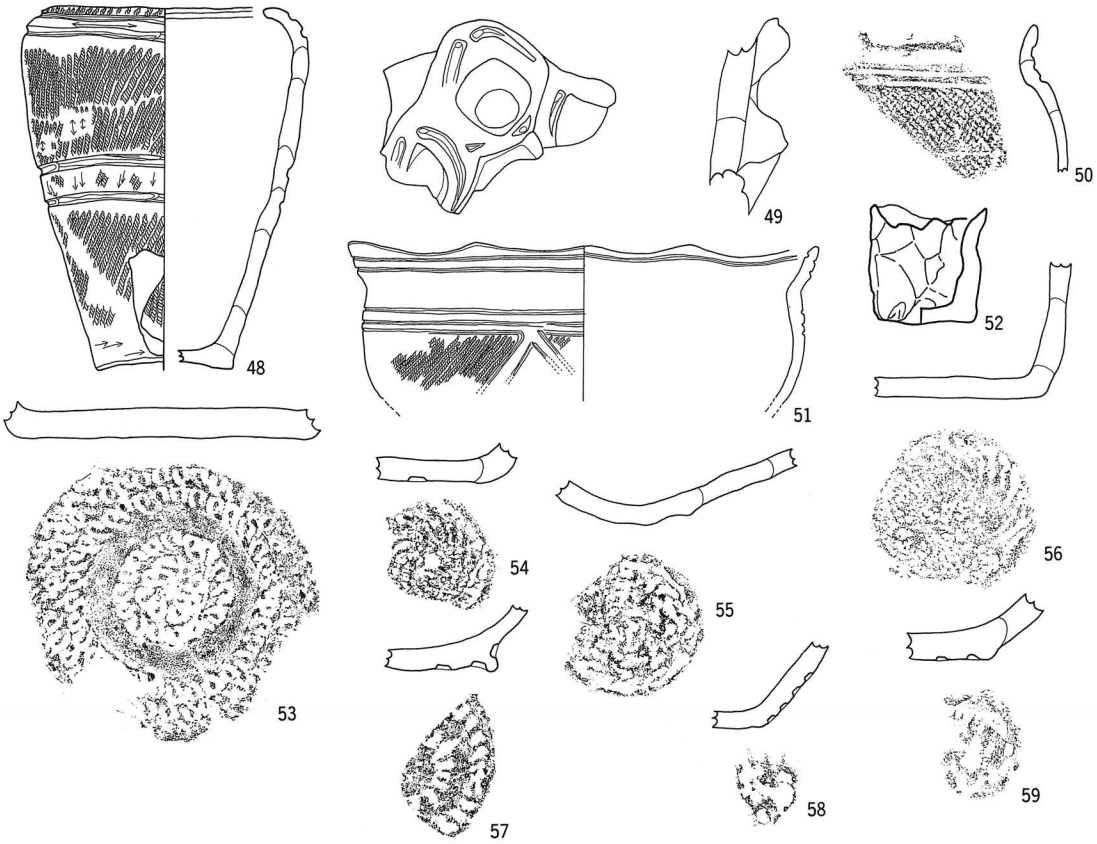
表－4　2　層

土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
20	H区E－7　2層	深鉢	口縁～体部	－	35.4	－	0.8		羽状縄文（結束）	S　石英粒・礫粒・小石粒を3％程含む　1/4
21	H区N－40　2層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.7		口唇部一交互刺突文　縄文	S　1/3
22	H区O－56　2層	深鉢	体部	－	－	－	0.9		竹管による刺突文羽状縄文	S　1/3
23	H区E－8　2層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.8		ループ文	S　1/3
24	H区E－7　2層	深鉢	口縁～体部	－	24.0	－	0.8		横位ループ文	S　小石粒・石英粒を含む　1/3
25	H区O－57　2層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.7		ループ文	S　1/3
26	H区O－58ベルト　2層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.7		ループ文	S　1/3
27	B区　2層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.7		ループ文	S　1/3
28	H区O－58ベルト　2層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.7		ループ文　S字状撚糸文	S　1/3
29	H区O－58　2層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.8		ループ文	S　1/3
30	H区NO42間ベルト　2層	深鉢	口縁～体部	－	36.4	－	0.8	横位指ナデ 縦位指ナデ	ループ文	石英質砂粒多く含む　1/4
31	H区Q－55　2層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.7			1/3
32	H区O－55　2層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.7		ループ文　二対の山形突起 刻目文	S　補修孔あり　1/3



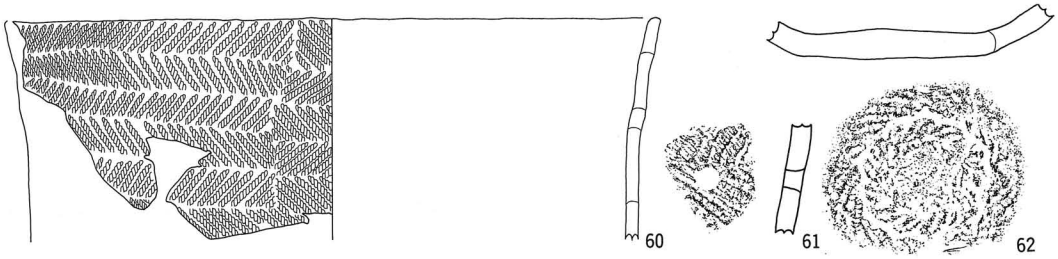
表－5　2　層

土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
33	H区E-8 2層	深鉢	体部	—	—	—	1.0		不整縄文	1/3
34	H区E-8 2層	深鉢	体部～底部	—	—	—	0.7		不整縄文	S 丸底 1/3
35	H区E-9 2層	深鉢	体部	—	—	—	0.9		葺瓦状撚糸文	S 1/3
36	H区K-58･59ベルト 2層	深鉢	体部	—	—	—	0.7		網目状撚糸文	S 1/3
37	H区N-44･45ベルト 2層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.6		網目状撚糸文 口縁部二対の山形	S 1/3
38	H区O-58･59ベルト 2層	深鉢	口縁部	—	—	—	1.1		支柱状粘土貼付文縄目圧痕	S 1/3
39	H区O-55 2層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.8		押引文	S 1/3
40	H区O-58ベルト 2層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.7		組紐文　口唇部交互刺突文	S 1/3
41	H区I-10 2層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.6		組紐文	S 1/3
42	H区O-56 2層		口縁部	—	—	—	0.9		爪形文	S 1/3
43	H区J-K間60 2層	深鉢	口縁～体部	—	38.4	—	0.6	横位ナデ　ミガキ	撚糸圧痕文刺突文羽状縄文	1/4
44	H区M-41(5) 2層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.8		口唇部一交互刺突文沈線文	S 1/3
45	H区M-42(9) 2層	深鉢	体部	—	—	—	0.7		縦沈線文粘土貼付　連続刺突文	S 1/3
46	B-7(溝) 2層		体部	—	—	—	0.7		半截竹管による波状沈線文	S 1/3
47	H区M-41(6) 2層		体部	—	—	—	0.6		ループ圧痕　同心円	S 1/3



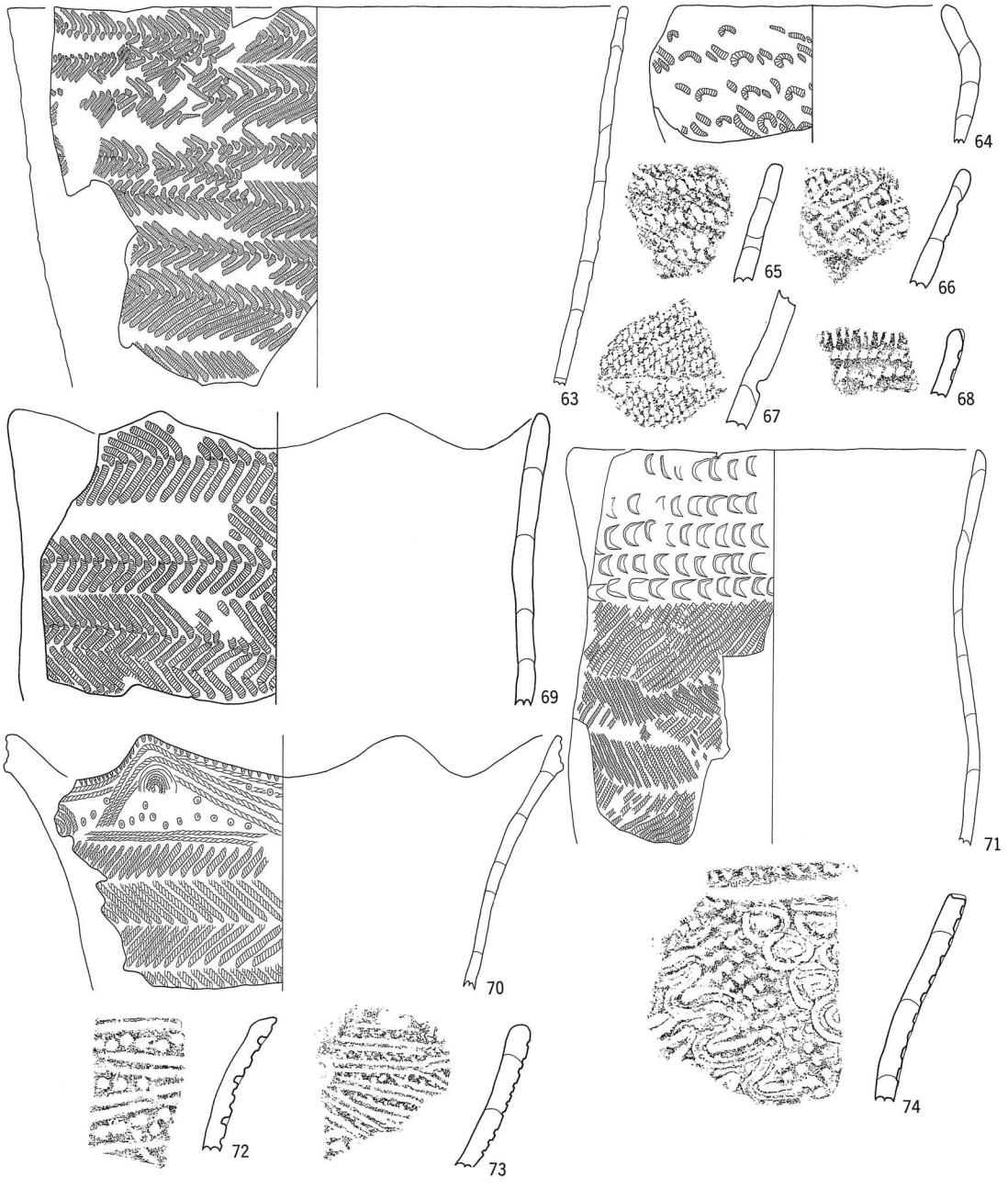
表－6　2　層

土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
48	H区R-58・59間ベルト　2層	鉢	完形	15.5	9.0	5.4	0.6	横位・縦位指ナデ	横位ＬＲ縄文　沈線文	砂粒を多く含む	1/3
49	H区F-11　2層	深鉢	胴部突帯	—	—	—	1.6		刺突文　隆帯　盲孔	石英粒・小石粒・礫粒を含む	1/3
50	B区　2層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.5		沈線文　ＲＬ縄文	S	1/3
51	H区E-8　2層	浅鉢	口縁～体部	—	17.2	—	0.4		沈線文　ＬＲ縄文 波状口縁		1/3
52	H区M-58　2層	ミニチュア	完形	2.4	2.1	1.9	0.3				2/3
53	H区O-56　2層		底部	—	—	12.0	1.1		ループ文	S　石英粒・砂粒を含む	平底　1/3
54	H区L-57　2層		底部	—	—	—	0.8		不整縄文	石英粒・砂粒を含む	平底　1/3
55	H区L-57　2層		底部	—	—	—	0.7		不整縄文	S　石英粒を含む	丸底　1/3
56	H区N-41　2層	深鉢	体部～底部	—	—	—	0.8			S　石英粒を含む	平底　1/3
57	H区N-58ベルト　2層		底部	—	—	7.6	0.9		刺突文	S　石英粒を含む	平底　1/3
58	H区O-42　2層		体部～底部	—	—	—	0.7		底部押引文　体部押引文	S　石英粒を含む	平底　1/3
59	H区Q-57　2層		底部	—	—	—	1.0		刺突文	赤い礫を含む	平底　1/3



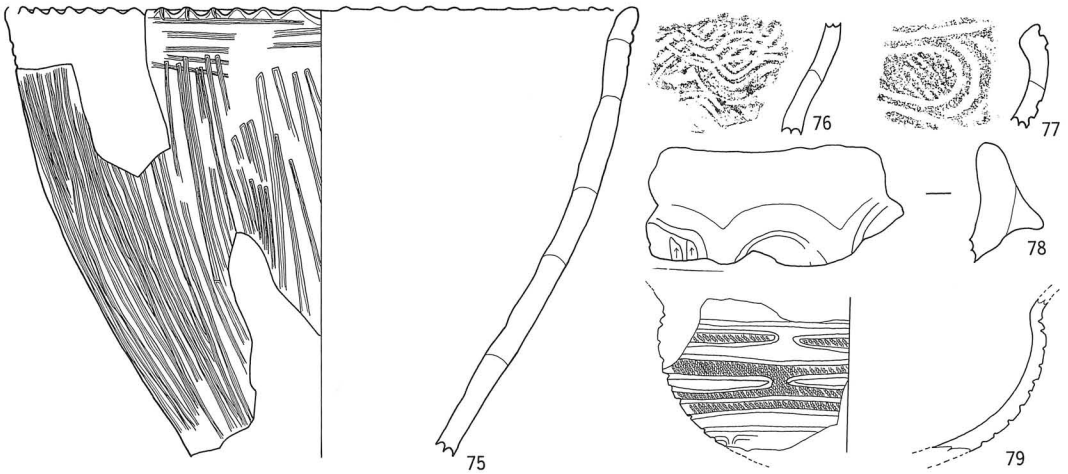
表－7　3　層

土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
60	H区O-55　3層	深鉢	口縁～体部	—	35.0	—	0.7	横位ナデ	羽状縄文	石英粒を含む	1/4
61	H区E-10　3層		体部	—	—	—	0.7		羽状縄文	S　補修孔あり	1/3
62	H区Q-52　3層		底部	—	—	7.5	1.1		羽状縄文(結束)	S　石英粒を少し含む	平底　1/3



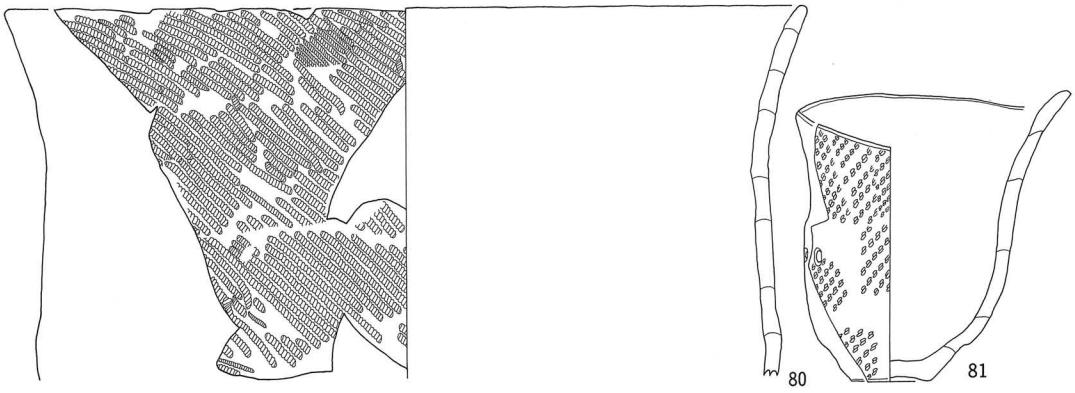
表－8　3　層

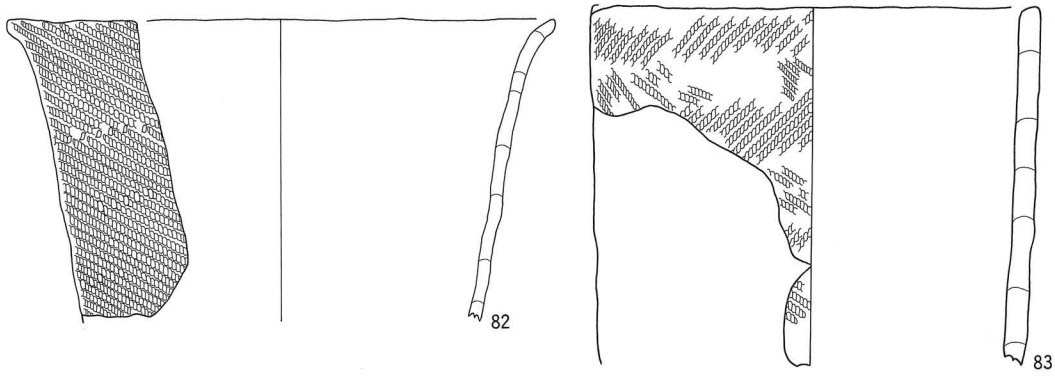
土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
63	H区D-8 3層	深鉢	口縁～体部	－	35.0	－	0.7		羽状縄文	礫粒・小石粒・石英粒を含む	1/4
64	H区D-8 3層	深鉢	口縁～体部	－	22.3	－	0.8		羽状縄文　山形突起　一部にすり消	S	1/3
65	H区O-7 3層	鉢	口縁～体部	－	11.2	－	0.7		ループ文	小石粒・石英粒・礫粒を含む	1/3
66	H区E-11 3層		口縁部	－	－	－	0.7		ループ文　補修孔　盲孔	S	1/3
67	H区I-6 3層		口縁部	－	－	－	0.7		網目状撚糸文	S	1/3
68	H区56・57ベルト 3層		体部	－	－	－	0.9		縄文(複節)刺突文	S	1/3
69	H区E-9 3層		口縁部	－	－	－	0.7		刻目文　刺突文	S	1/3
70	H区K-55 3層	深鉢	口縁～体部	－	32.0	－	0.6	指ナデ	羽状縄文　山形突起　円形連続刺突文　渦巻文　爪形連続刺突文	砂粒を多量に含む	1/4
71	H区M-41 3層	深鉢	口縁～体部	－	23.4	－	0.7		羽状縄文　鱗状連続刺突文	石英粒・小石粒を少し含む	1/4
72	H区C-8 3層		口縁部	－	－	－	0.7		刺突文　沈線文	S	1/3
73	H区I-11 3層		口縁部	－	－	－	0.8		半截竹管による沈線文	S	1/3
74	H区D-7 3層	深鉢	口縁部	－	－	－	0.9		口唇部に刻目文　波形沈線文　同心円　刺突文	S	1/3



表一9　3　層

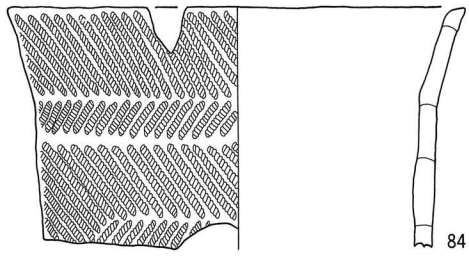
土器番号	出土地区 地区一層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
75	H区D－7　3層	深鉢	口縁～体部	—	25.0	—	0.9	縦位指ナデ	口唇部一指によるつまみ出し　貝殻による沈線文	S　砂粒を10%程含む	1/3
76	H区H-10　3層	深鉢	体部	—	—	—	0.7		沈線文	S	1/3
77	H区I-12　3層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.7		RL縄文　沈線文	S	1/3
78	H区P-58・59間ベルト　3層	深鉢	口縁部	—	35.4	—	1.5	すり消し	横位ミガキ	石英粒・礫粒・小石粒を3～5%含む	1/3
79	H区H-11　3層	浅鉢	体部	—	—	—	0.6	ミガキ	工字文	石英質の砂粒を多く含む	1/3

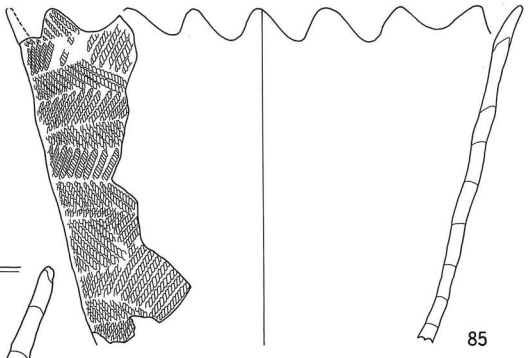


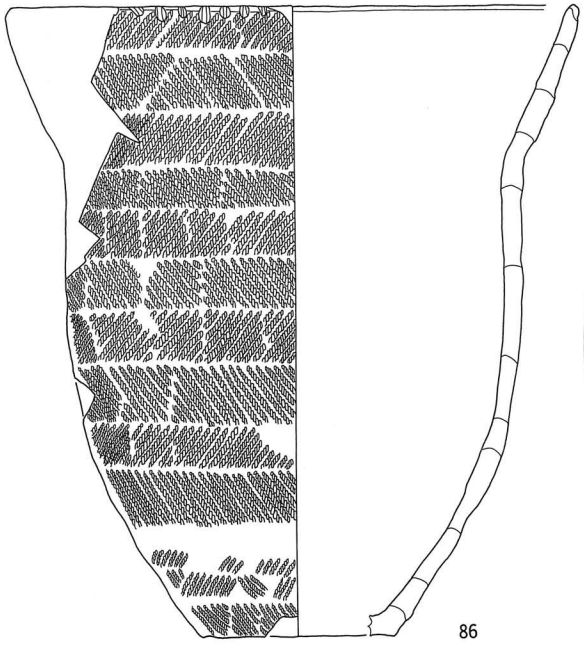


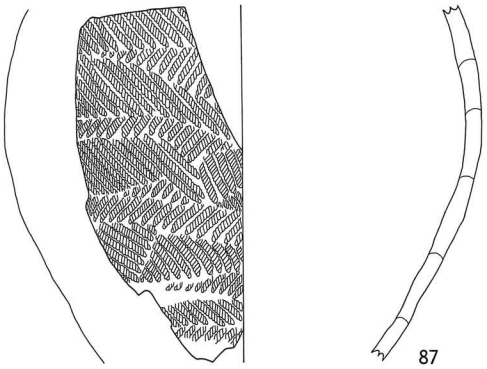
表一10　4　層

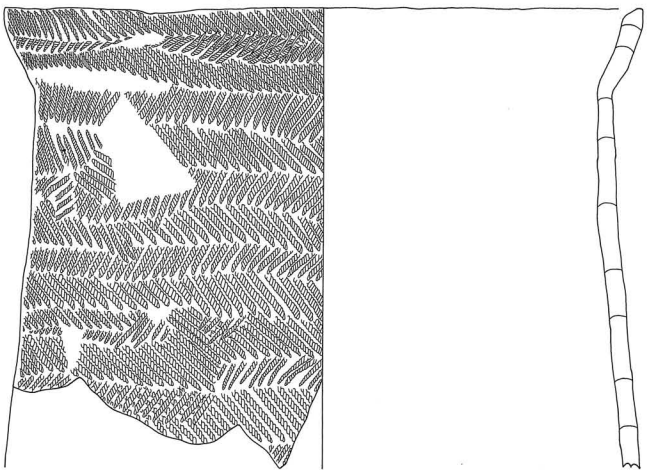
土器番号	出土地区 地区一層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
80	H区E-9ベルト　4層	深鉢	口縁～体部	—	42.2	—	0.9		横位RL縄文	小石粒・礫粒・砂粒2～3%含む	1/4
81	H区M-55　4層	鉢	完形	11.6	9.4	3.1	0.5	縦位ナデ	横位LRL縄文(二段二条)	S　補修孔あり　平底	1/3
82	H区E-9ベルト　4層	深鉢	口縁～体部	—	28.8	—	0.6		横位RL縄文(結束・撚紐あり)	礫粒・小石粒・石英粒を2%程含む	1/4
83	H区J-58　4層	深鉢	口縁～体部	—	17.4	—	0.7		羽状縄文	S　小石粒・礫粒・小石粒を5%程含む	1/3

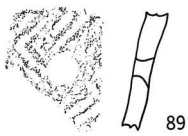






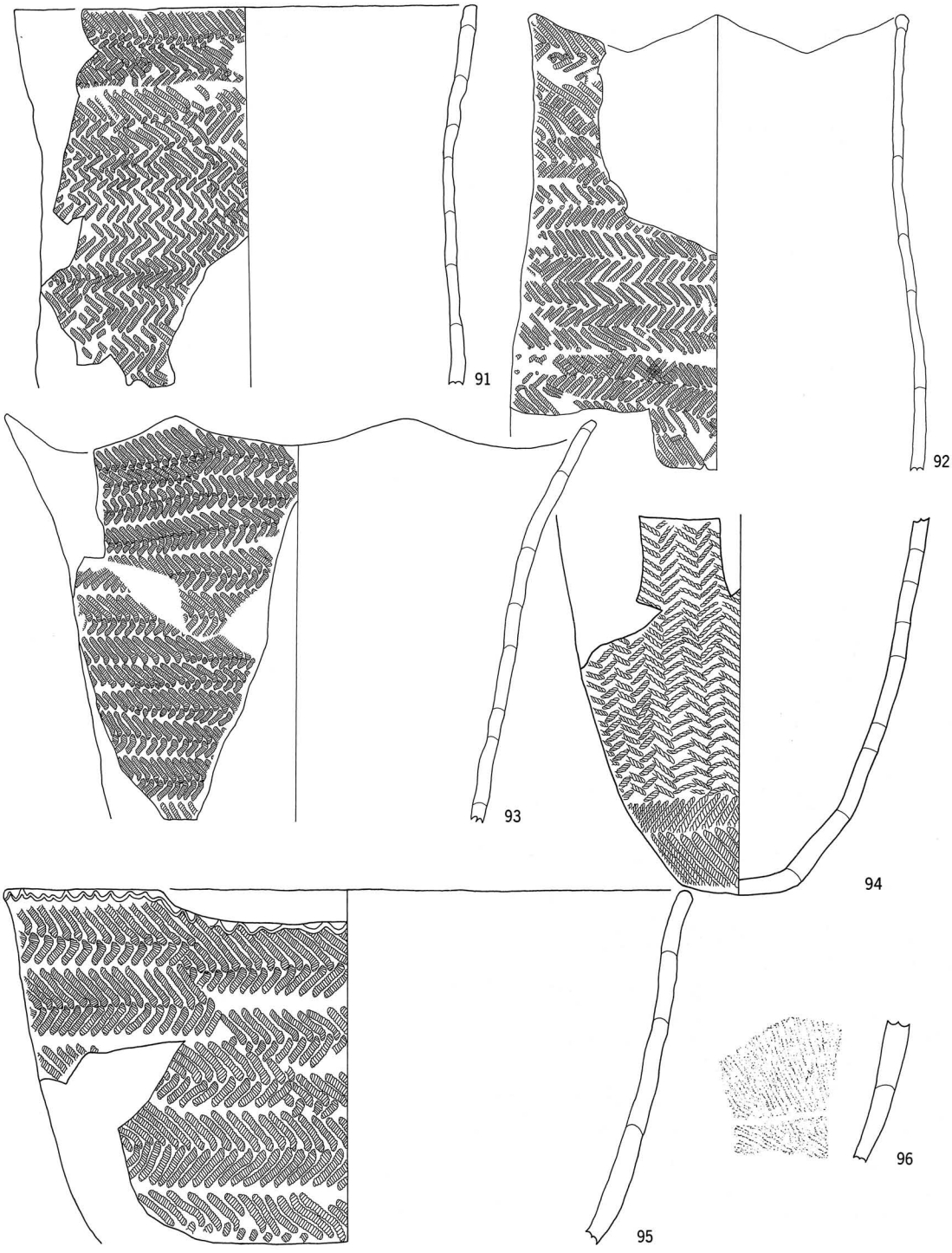






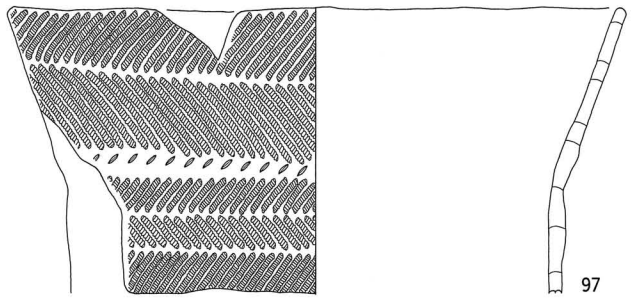
表—11　4　層

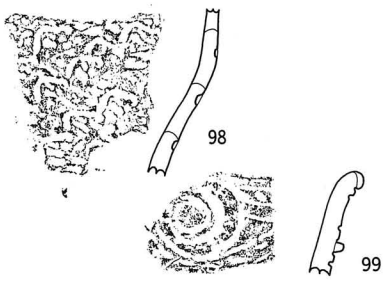
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
84	H区　L—55　4層	深鉢	口縁～体部	—	18.0	—	0.7	横位指ナデ	羽状縄文	S　砂粒を多く含む　1/3
85	H区　N—58ベルト　4層	深鉢	口縁～体部	—	26.7	—	0.7		羽状縄文　山形突起	1/4
86	H区　M—55ベルト　4層	深鉢	口縁～底部	25.1	22.0	7.7	0.7	縦位・横位ナデ　縦位ミガキ	羽状縄文　口縁部に刻目文	S　平底　1/3
87	H区　M—41(3)　4層	深鉢	体部	—	—	—	0.8		羽状縄文	S　砂粒を5％程含む　1/4
88	H区　H—10　4層	深鉢	口縁～体部	—	33.6	—	1.0	横位指ナデ	羽状縄文　口縁付近に沈線文	1/4
89	H区　E—9ベルト　4層	深鉢	体部	—	—	—	0.7		羽状縄文	S　補修孔あり　1/3
90	H区　F—10　4層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.7		羽状縄文（結束）	1/3

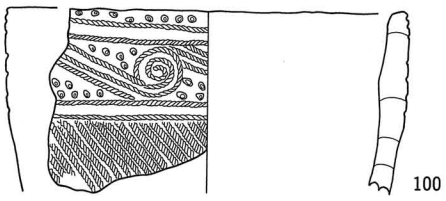


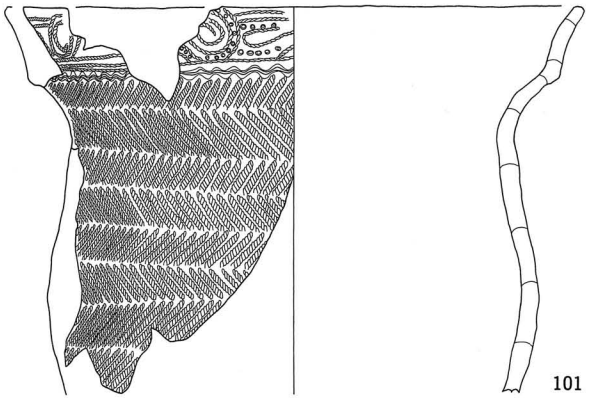
表—12　4　層

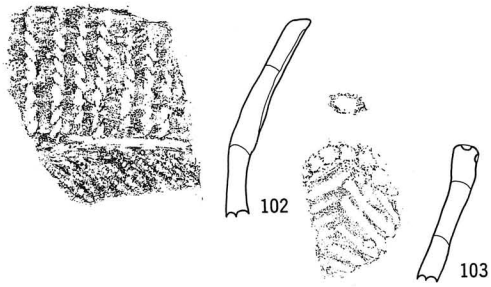
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
91	H区　N—57ベルト　4層上面	深鉢	口縁～体部	—	28.0	—	0.6		羽状縄文	小石粒・石英粒を5～7%含む　1/4
92	H区　O—55　4層	深鉢	口縁～体部	—	22.0	—	0.6		羽状縄文　山形突起	S　小石粒を少し含む　1/4
93	H区　O—55　4層	深鉢	口縁～体部	—	35.5	—	0.8		羽状縄文　山形突起	石英を含む　1/4
94	H区　E—9ベルト　4層	深鉢	体部～底部	—	—	5.6	0.7	横位指ナデ	羽状縄文	砂粒を多く含む　丸底　1/3
95	H区　O—55　4層上面	深鉢	口縁～体部	—	13.2	—	0.8		羽状縄文　口縁部は小波状文で段有り	S　石英粒・小石粒・礫粒を2～3%含む　1/3
96	H区　E—10ベルト　4層	深鉢	体部	—	—	—	0.8		撚糸文	S　1/3

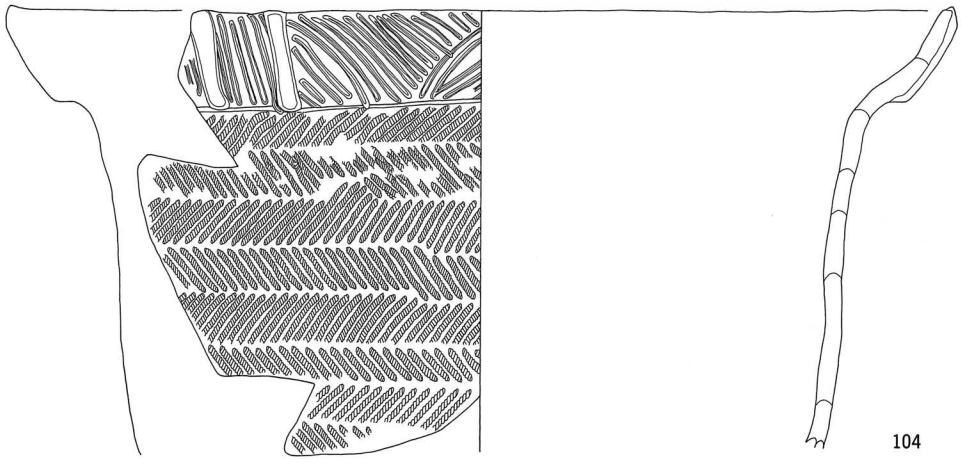






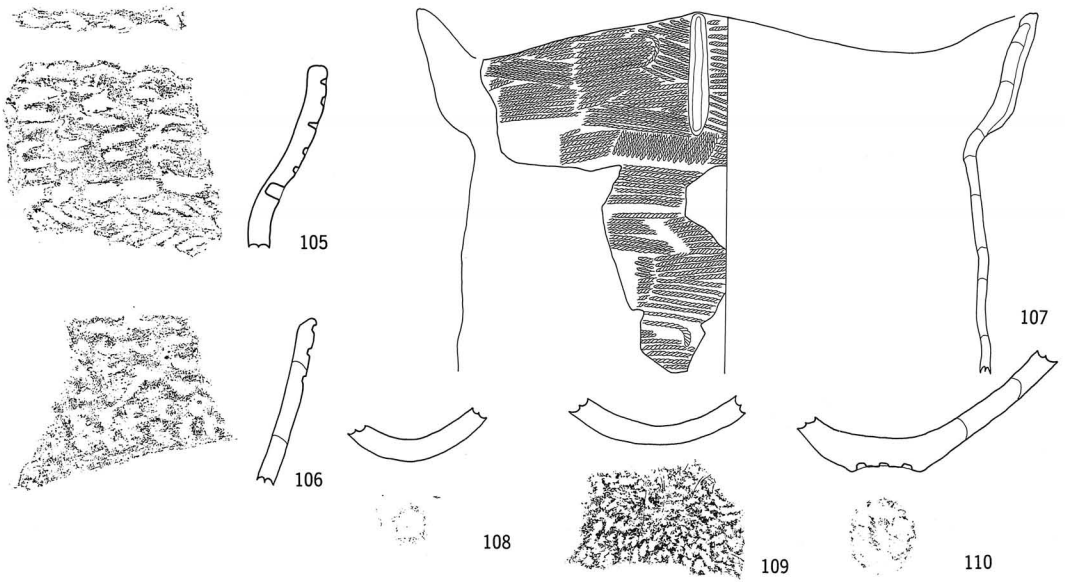






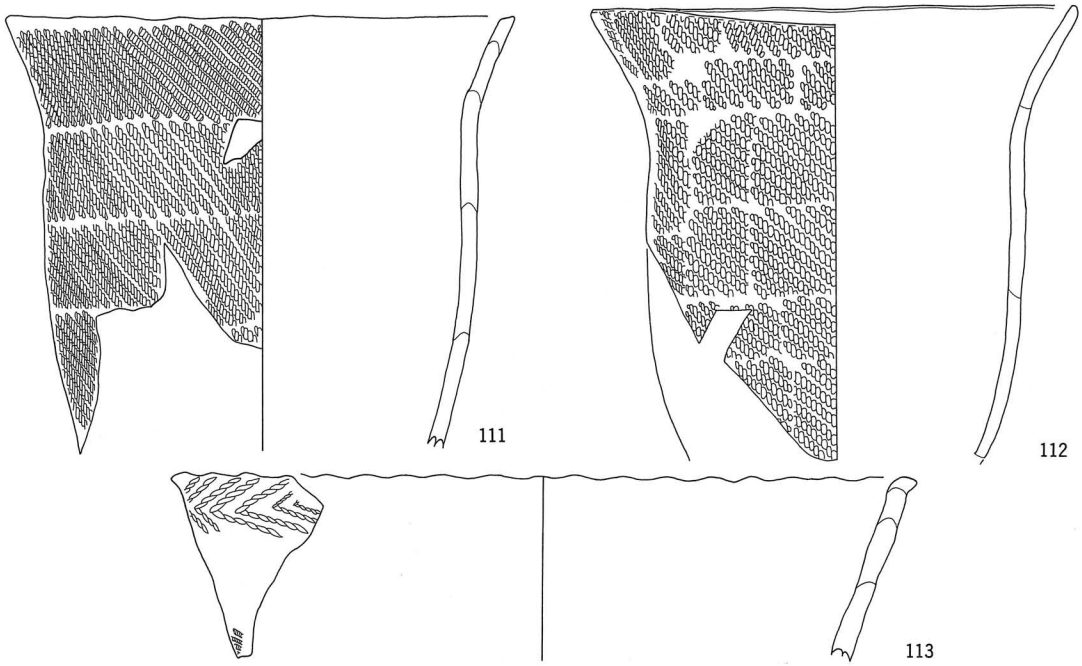
表—13　4　層

土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
97	H区 D—9 4層	深鉢	口縁～体部	—	32.0	—	0.7		羽状縄文 爪形連続刺突文	石英粒・礫粒を7～8％含む	1/4
98	H区 O—55 4層	深鉢	体部	—	—	—	0.6		不整撚糸文	S	1/3
99	不明 4層	深鉢	口縁部	—	—	—	0,7		刺突文 縄目圧痕 C字状粘土貼付文		1/3
100	H区 H—10 4層	鉢	口縁～体部	—	—	—	0.9		横位RL縄文 小円形連続刺突文 渦巻文 縄目圧痕	S 石英砂を多く含む	1/3
101	H区 H—10 4層	深鉢	口縁～体部	—	29.4	—	0.9	横位指ナデ	羽状縄文 小円形連続刺突文 渦巻文 縄目圧痕	石英砂を多く含む	1/4
102	H区 O—58•59ベルト 4層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.9		RL縄文 縄目圧痕	S	1/3
103	H区 K—58 4層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.7		半截竹管による連続刺突文 押引文	S	1/3
104	H区 G—11 4層	深鉢	口縁～体部	—	49.8	—	0.8	縦位・横位指ナデ	羽状縄文 隆文 沈線文	石英砂を含む	1/4



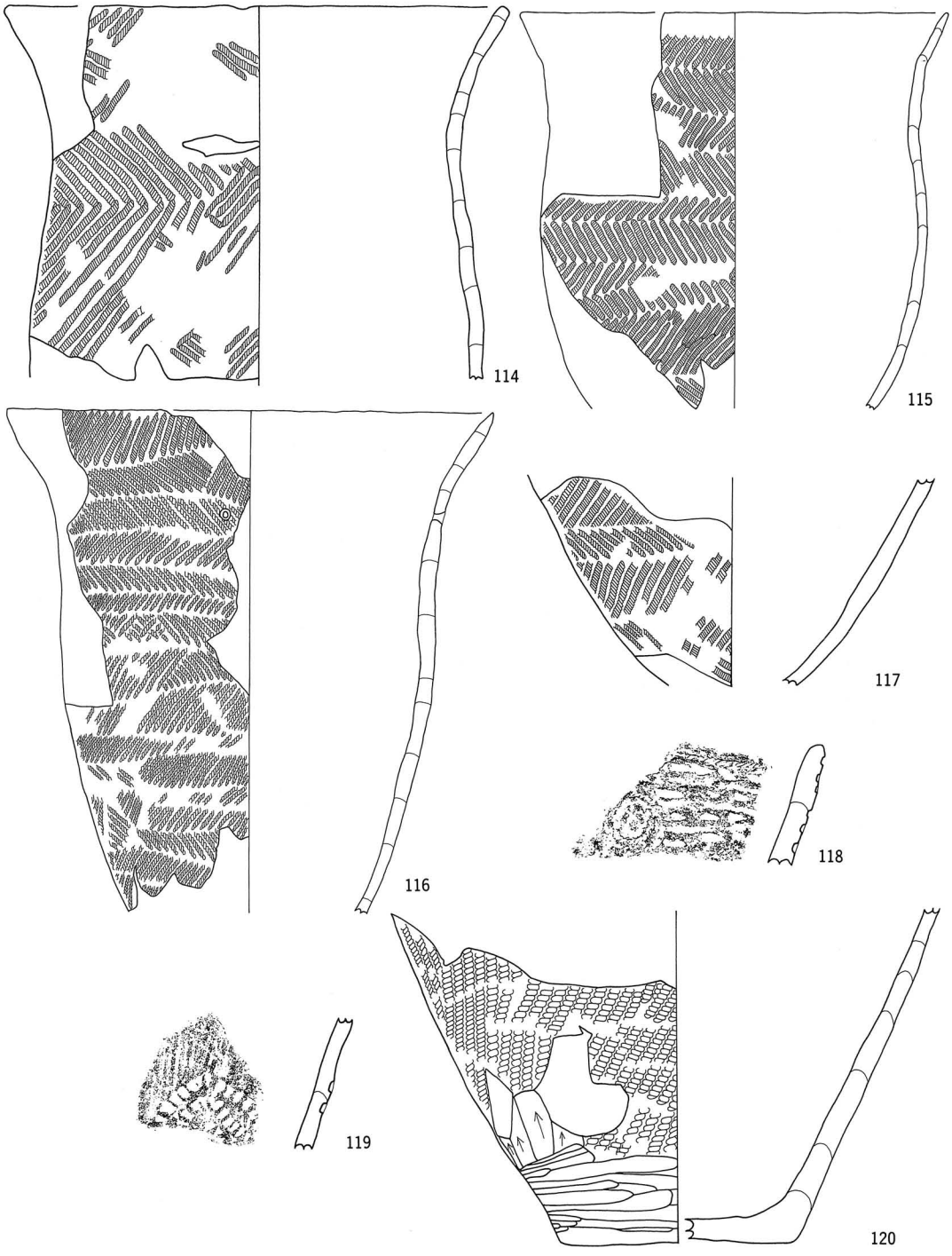
表—14　4　層

土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
105	H区　M—55　4層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.7		口唇部—刺突文　半截竹管による刺突文　羽状縄文	S	1/3
106	H区　I—10・11ベルト　4層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.6		半截竹管による刺突文	S	1/3
107	H区　L—58ベルト　4層5層	深鉢	口縁～体部	—	32.8	—	0.5	縦位指ナデ	横位ＬＲ縄文　縦位ＲＬ縄文　山形突起　隆文	S　石英砂を含む	1/4
108	H区　O—57ベルト　4層		底部	—	—	—	0.8		底部—刺突文	S　石英粒を含む　丸底	1/3
109	H区　M—58・59ベルト　4層		底部	—	—	—	0.8		複々節縄文	S　石英砂を含む　丸底	1/3
110	H区　M—58・59　4層		体部～底部	—	—	3.0	1.1		体部—羽状縄文（結束）底部—刺突文	S　石英粒を少し含む　平底	1/3



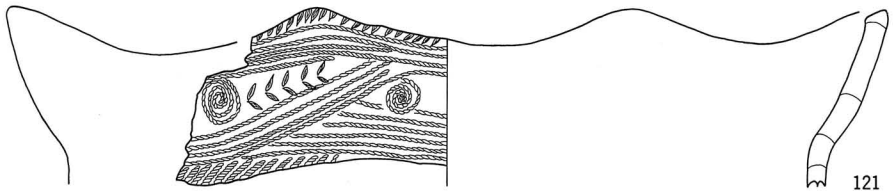
表—15　5　層

土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
111	H区　M—55ベルト　5層上面	深鉢	口縁～体部	—	20.0	—	0.6	縦位・横位指ナデ	横位ＲＬ縄文	砂粒を5％程含む	1/3
112	H区　M—55ベルト　5層上面	深鉢	口縁～体部	—	19.0	—	0.6	縦位・横位指ナデ　横位ミガキ	横位ＲＬ縄文	S　石英粒を含む	1/3
113	H区　M—55ベルト　5層上面		口縁部	—	28.6	—	0.8		羽状縄文　波状口縁	小石粒・石英粒を含む	1/3



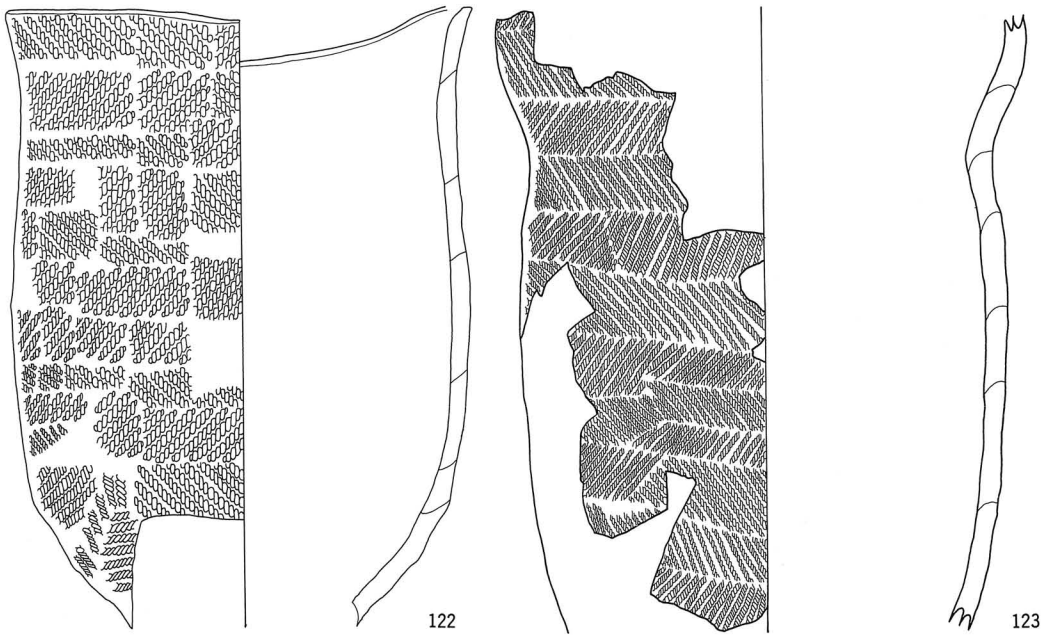
表—16　5　層

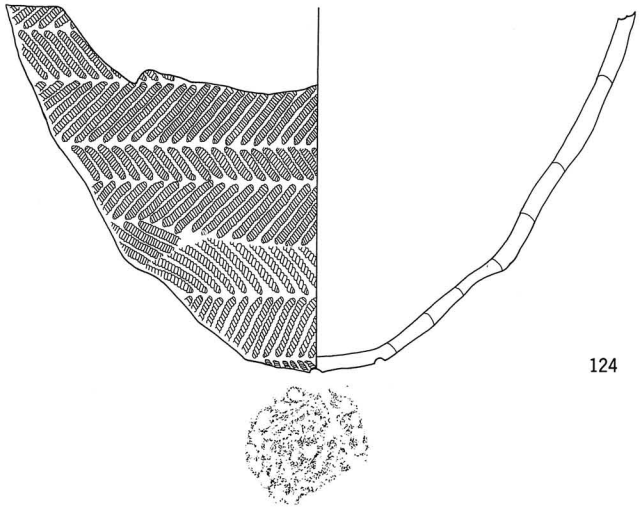
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
114	H区　M—55ベルト　5層上面	深鉢	口縁～体部	—	22.0	—	0.6		羽状縄文	石英粒・石英砂を含む　1/3
115	H区　K—58　5層	深鉢	口縁～体部	—	25.2	—	0.6		羽状縄文	小石粒・石英粒を含む　1/4
116	H区　M—55　5層	深鉢	口縁～体部	—	29.0	—	0.9		羽状縄文	補修孔あり　1/4
117	H区　M—55ベルト　5層上面	深鉢	体部	—	—	—	0.7		羽状縄文	S　小石粒・石英粒を含む　1/4
118	H区　D—9　5層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.9		縄目状圧痕文　刺突文	S　1/3
119	H区　R—58　5層	深鉢	体部	—	—	—	0.7		刺突文　沈線文	S　1/3
120	H区　N—58・59間ベルト5層	深鉢	体部～底部	—	—	10.2	1.0		縦位RL縄文　縦位ケズリ 横位ミガキ	S　礫粒・小石粒・石英粒を7%程含む 平底　1/3



表—17　5　層

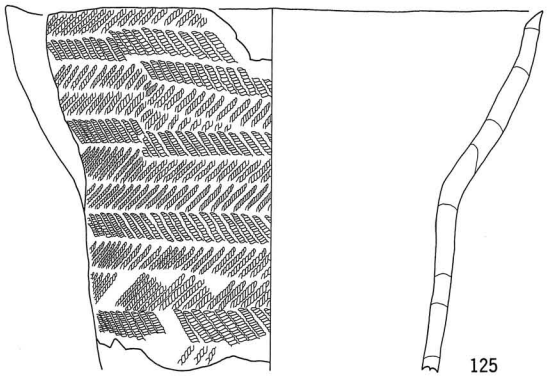
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
121	H区　P—58　5層	深鉢	口縁部	—	35.0	—	0.9	指ナデ	横位RL縄文　渦巻文　爪形連続刺突文　山形突起	S　砂粒を5%程含む　1/3



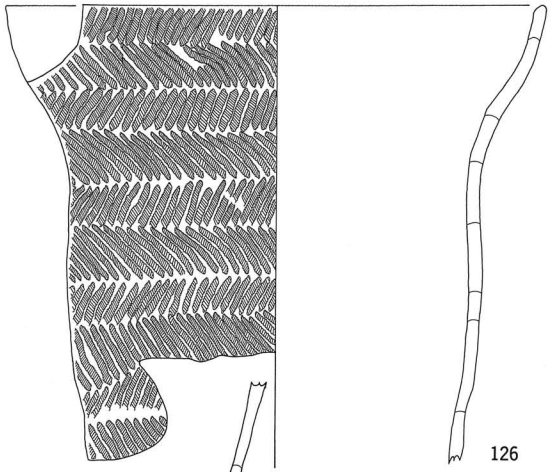


表—18　6　層

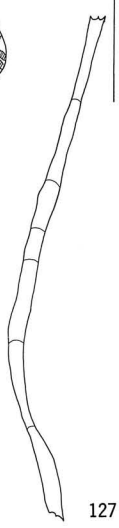
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
122	H区　M—41(1)　6層	深鉢	口縁～体部	—	18.0	—	0.7	横位　斜位ナデ	羽状縄文	S　1/3
123	H区　M—41　6層	深鉢	体部	—	—	—	0.8	指ミガキ	羽状縄文	S　石英粒・砂粒含む　1/3
124	H区　L—57　6層	深鉢	体部～底部	—	—	5.7	0.7		羽状縄文　底部一円形連続刺突文	S　石英粒を3～5%程含む　丸底　1/3



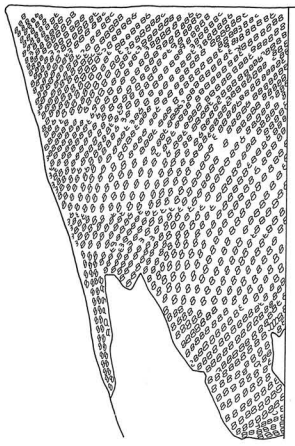
125

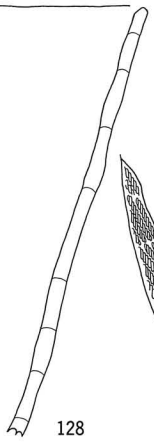


126

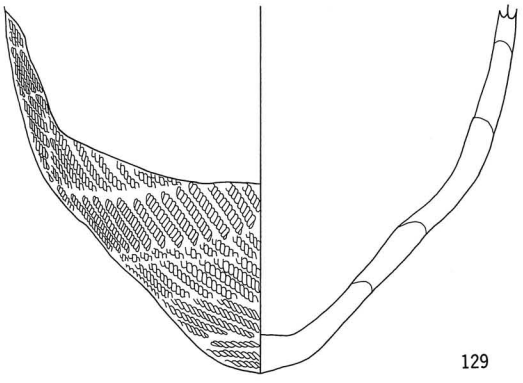


127





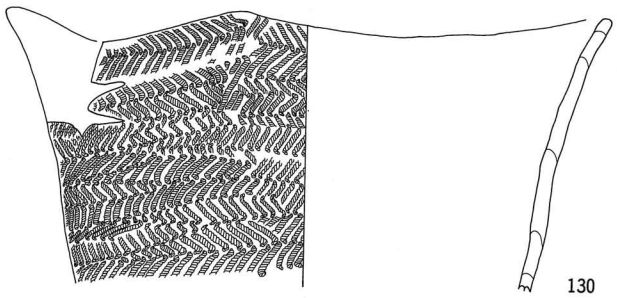
128

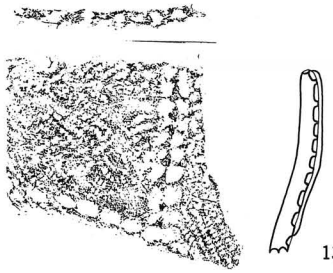


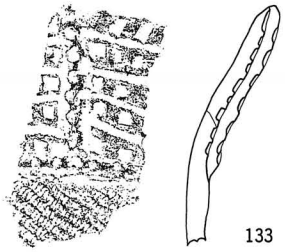
129

表—19　7　層

土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量（cm） 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
125	H区　M—41　7層上面	深鉢	口縁～体部	—	28.3	—	1.0		羽状縄文	石英粒を含む	1/4
126	H区　L—57　7層	深鉢	口縁～体部	—	28.4	—	0.7		羽状縄文	S	1/4
127	H区　L—57　7層	深鉢	体部	—	—	—	0.8		羽状縄文	礫粒・石英粒・小石粒を含む	1/4
128	H区　O—38　7層	深鉢	口縁～体部	—	29.4	—	0.7		二段二条（横位ＲＬ縄文）		1/4
129	H区　L—57　7層	深鉢	体部～底部	—	—	—	0.9		横位ＲＬ縄文　縦位ＲＬ縄文	小石粒・石英粒を含む　丸底	1/3

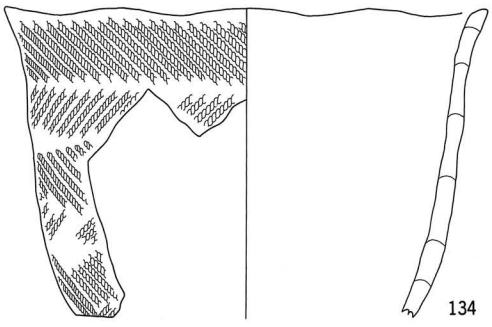


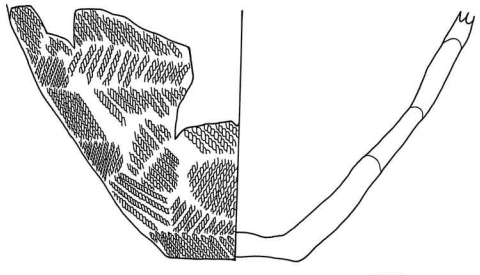




表—20　7　層

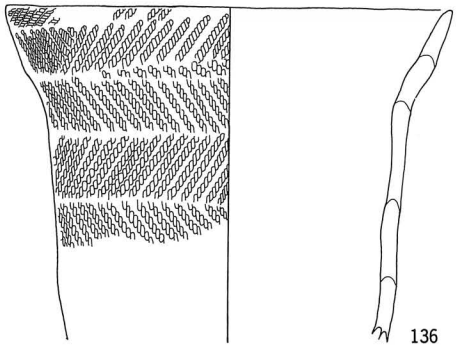
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
130	H区　L—56　7層	深鉢	口縁～体部	—	31.2	—	0.7		羽状縄文　山形突起	石英粒・小石粒・礫粒を7％程含む　1/4
131	H区　7層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.8		複節縄文　押型文	S　1/3
132	H区　7層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.8		口唇部—刺突文　LR縄文	S　1/3
133	H区　N—4(9)　7層	深鉢	口縁部	—	—	—	1.2		粘土紐貼付文　連続刺突文 刻目文　RL縄文	S　1/3



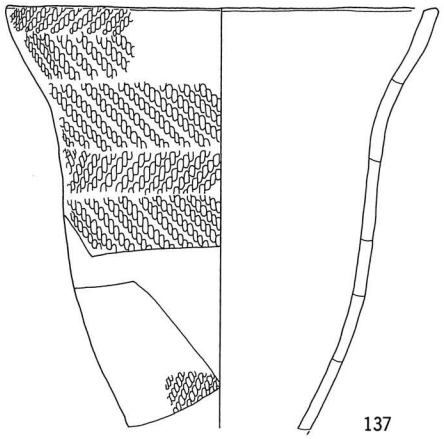


表—21　10　層

土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
134	H区　L—56　10層	深鉢	口縁～体部	—	25.4	—	0.9		羽状縄文　波状口縁	小石粒を含む　1/4
135	H区　L—57　10層	深鉢	体部～底部	—	—	5.1	0.8	縦位指ナデ	羽状縄文　底部—縄文L R・RLが4方面から施文	S　平底　1/3



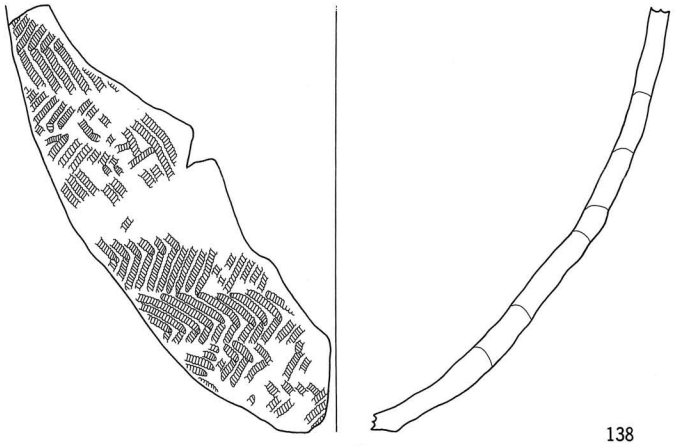
136



137

表—22　10　層

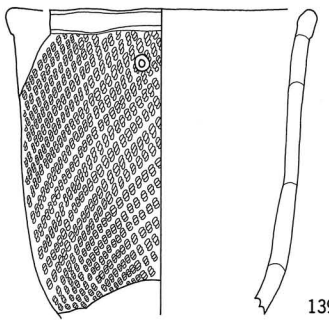
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
136	H区　L—56　11層	深鉢	口縁～体部	—	17.5	—	0.6		羽状縄文	1/3
137	H区　K—56　11層	深鉢	口縁～体部	—	17.0	—	0.5	縦位ミガキ	羽状縄文	S　砂粒を含む　1/3



138

表—23　14　層

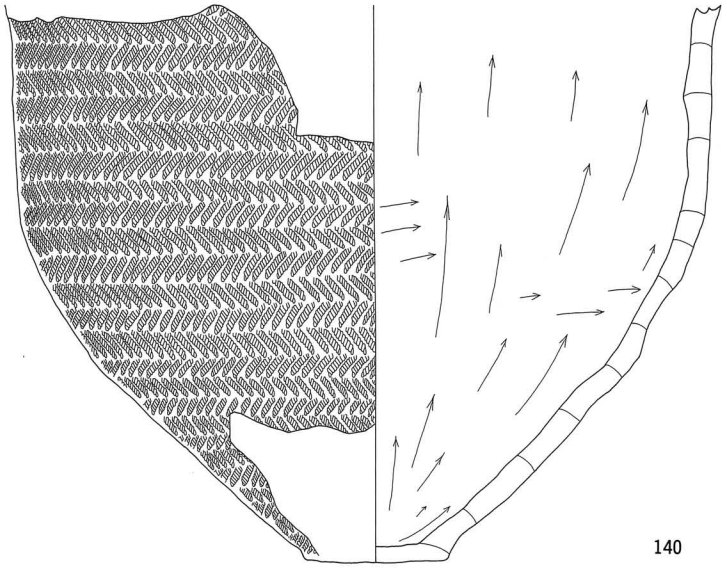
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
138	H区　L—57ベルト　14層上面	深鉢	体部～底部	—	—	4.7	0.9		羽状縄文	石英粒を多く小石粒を少し含む　平底　1/3



139

表—24　15　層

土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
139	H区　L—57ベルト　15層	深鉢	口縁～体部	—	11.7	—	0.6		二段三条(縦位ＲＬＲ縄文)	補修孔あり S　礫粒・小石粒・石英粒を3％程含む　1/3

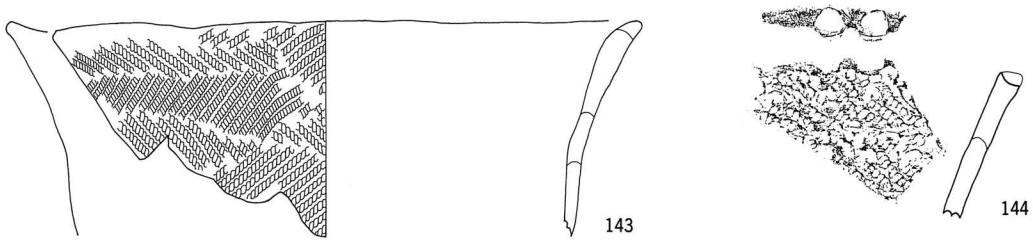


表—25　19　層

土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
140	H区　LM—57間ベルト 19層	深鉢	体部～底部	—	—	7.7	1.1	縦位・横位指ナデ	羽状縄文	砂粒を5％程含む　平底　1/4

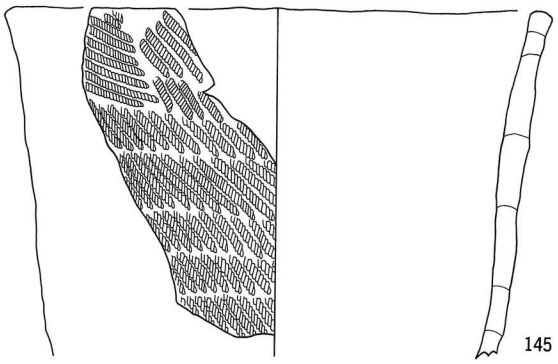
表—26　貝　層

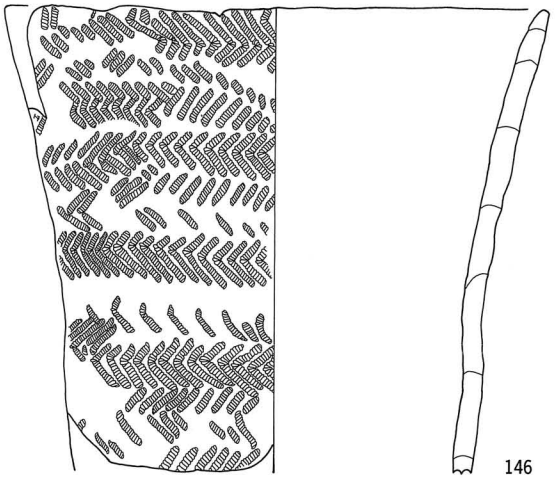
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
141	H区　O—46　貝層	深鉢	体部	—	—	—	0.7		RL縄文　沈線文	1/3
142	H区　O—46　貝層	深鉢	体部	—	—	—	0.6		羽状縄文　刻目文　縄目圧痕	S　1/3

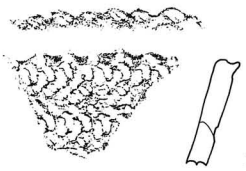


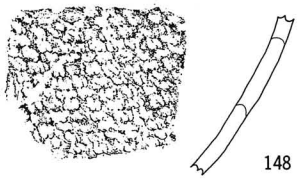
表—27　黒色土層

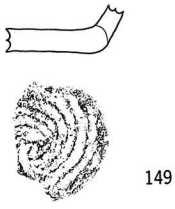
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
143	H区　O—48　黒色土層	深鉢	口縁～体部	—	25.0	—	0.6		羽状縄文	小石粒・石英粒・礫粒を3％程含む　1/3
144	H区　R—44　黒色土層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.7		口唇部—指による押型文ループ文	S　1/3

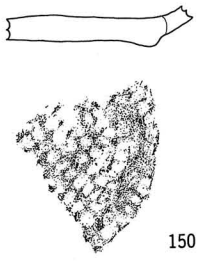






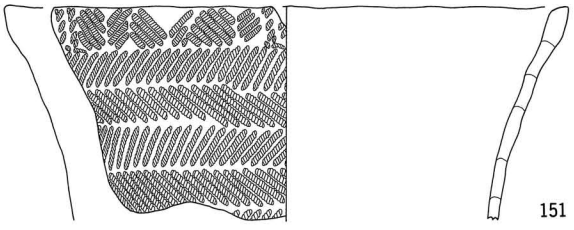


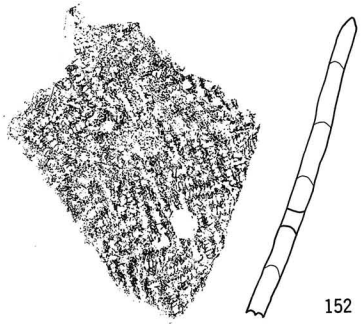




表—28　黒色土層

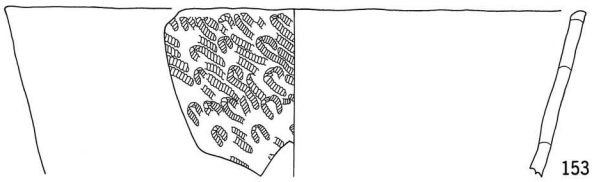
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
145	H区 P—45 黒色土層	深鉢	口縁～体部	—	21.9	—	0.8	縦位・横位指ナデ	横位RL縄文 斜行RL縄文	S 石英砂粒を含む 1/3
146	H区 O—48 黒色土層	深鉢	口縁～体部	—	21.4	—	0.8		羽状縄文	小石粒・礫粒・石英粒を含む 1/3
147	H区 O—43 黒色土層	深鉢	口縁部	—	—	—	0.8		口唇部—指によるつまみ出し ループ文	S 1/3
148	H区 P—48 黒色土層	深鉢	体部	—	—	—	0.7		ループ文	S 1/3
149	H区 O—48 黒色土層		底部	—	—	5.6	0.9		縄目圧痕文	S 石英粒を含む 平底 1/3
150	H区 NO—38・39 貝層下黒色土層		底部	—	—	10.2	1.0		押引文 半截竹管による刺突文	S 石英粒を少し含む 平底 1/3

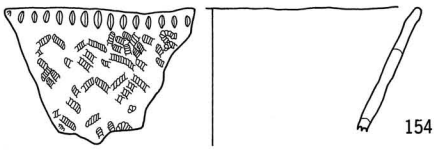


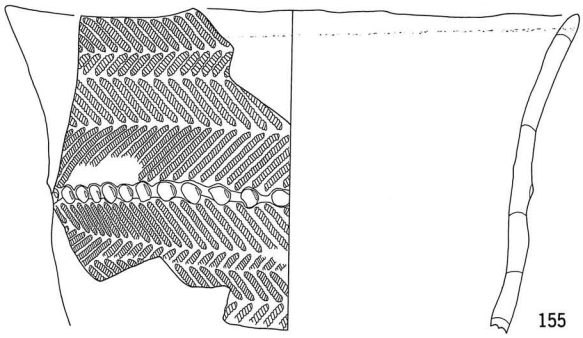


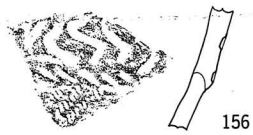
表—29　不　明

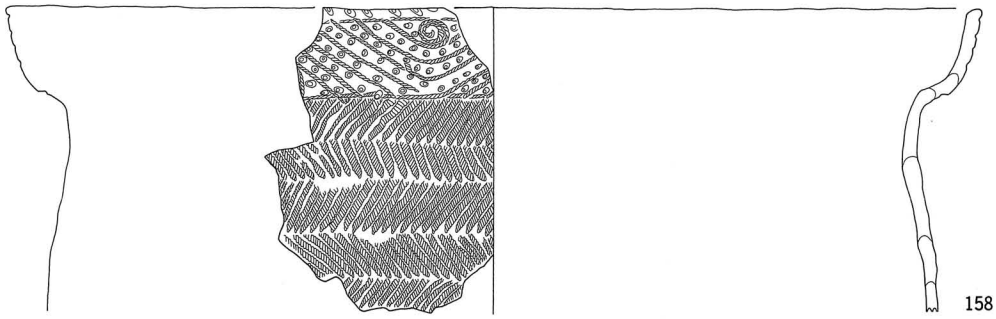
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
151	不明 不明	深鉢	口縁～体部	—	29.8	—	0.6		羽状縄文	小石粒・石英粒・礫粒を3％程含む 1/4
152	不明 不明	深鉢	口縁部	—	—	—	0.7		羽状縄文 波状口縁	S 補修孔あり 1/3

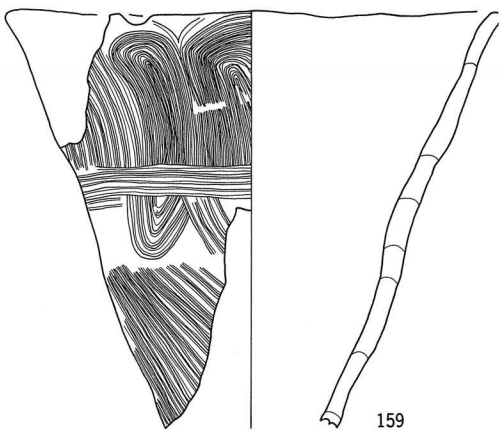


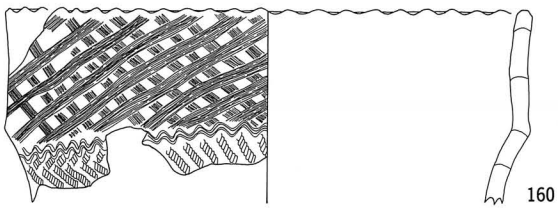


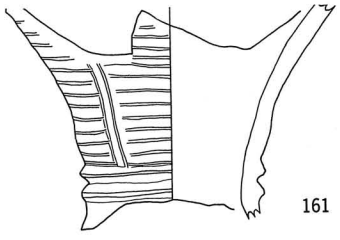






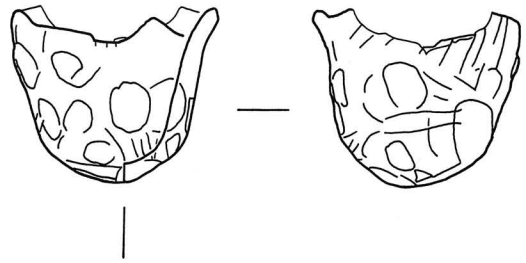




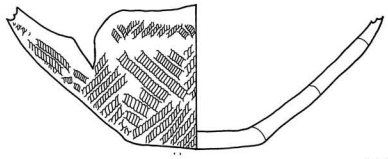


表—30　不　明

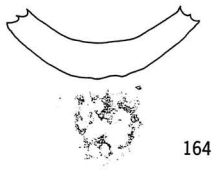
土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
153	不明	不明	深鉢	口縁～体部	—	30.0	—	0.6		ループ文	小石・石英粒を含む	1/4
154	H区　O—55	不明	深鉢	口縁部	—	16.0	—	0.5		ループ文　爪形連続刺突文	小石粒・石英粒を含む	1/3
155	不明	不明	深鉢	口縁～体部	—	30.0	—	0.9		羽状縄文　指による連続刺突文　口縁はゆるい波状	小石粒・石英粒・礫粒を含む	1/4
156	H区　Q—59	不明	深鉢	体部	—	—	—	0.8		沈線文・粘土貼付に刺突文　RL縄文		1/3
157	H区	不明	深鉢	体部	—	—	—	0.7		波形沈線文　刺突文　RL縄文	S	1/3
158	不明	不明	深鉢	口縁～体部	—	51.2	—	0.7		羽状縄文　縄目圧痕文　渦巻文　連続刺突文		1/4
159	不明	不明	深鉢	口縁～体部	—	19.8	—	1.0	指ナデ	貝殻文（渦巻状・放射状・横位）	S　石英粒を含む	1/4
160	不明	不明	深鉢	口縁～体部	—	27.8	—	0.9	横位指ナデ	羽状縄文　斜格子文　波形文	砂粒を5％程含む	1/4
161	H区　58，59間ベルト	不明	深鉢	体部	—	—	—	0.6	縦位指ナデ	隆帯　沈線文	礫粒を含む	1/3



162



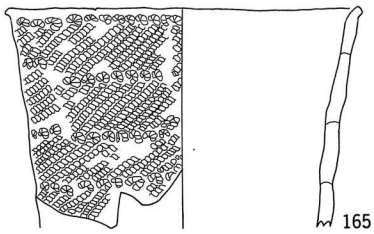
163



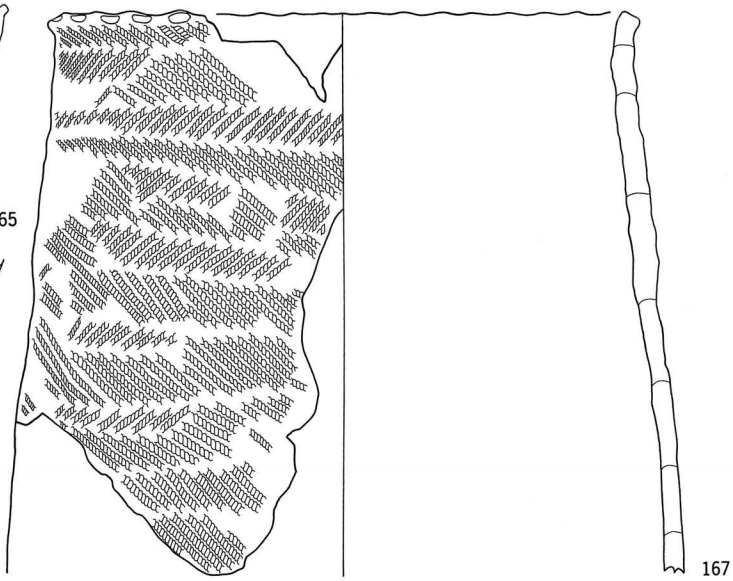
164

表－31　不　明

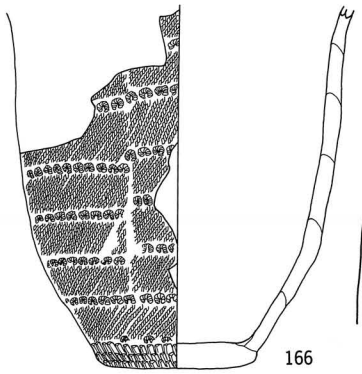
土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
162	H区　N－58　不明	ミニチュア	ほぼ完形	3.5	最大 4.1 最小 2.95	－	0.4		直径5～10㎜の円や統一性のある線を施す	丸底　2/3
163	H区　O－71　住居埋土		体部～底部	－	－	5.6	0.6		羽状縄文　底部－RL縄文が三方向から施文	小石粒を含む　平底　1/3
164	不明　不明		底部	－	－	－	1.4		刺突文	石英粒を含む　丸底　1/3



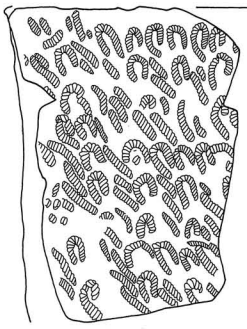
165



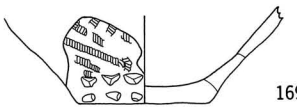
167



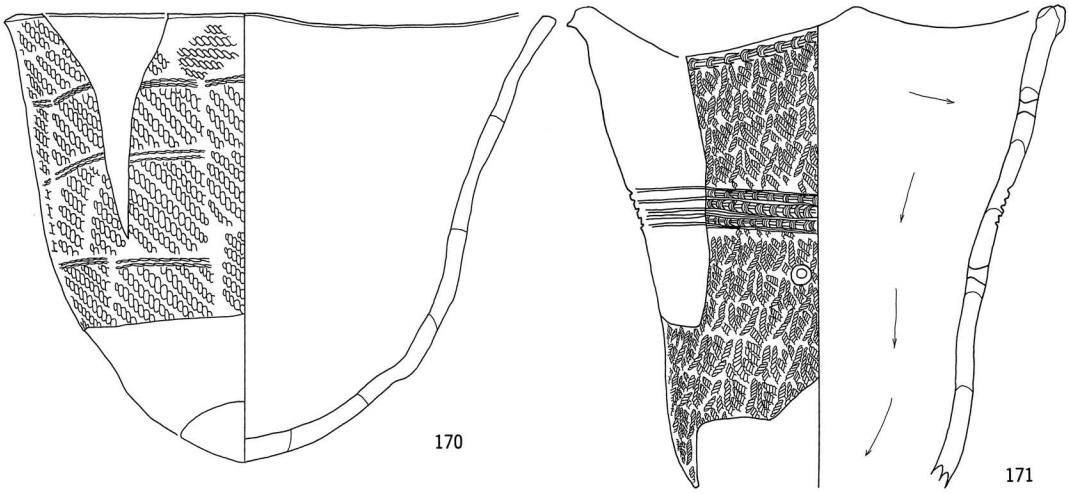
166



168



169



第22　住　居

土器番号	出土地区 地区一層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
165	第22号住居　Aコーナー　4層	深鉢	口縁～体部	(8.8)	14.1	—	0.5		斜行縄文（結束）ＬＲ	石英粒を含む	1/3
166	第22号住居　Aコーナー　4層	深鉢	体部～底部	(14.5)	—	6.4	0.65	指ナデ	斜行縄文(結束)ＬＲ刺突文	S　砂粒・石英粒を含む	1/3
167	第22号住居　Aコーナー　4層	深鉢	口縁～体部	(22.6)	23.4	—	0.9		小波状口縁	石英・小石粒を含む	1/3
168	第22号住居　Aコーナー　4層	深鉢	口縁～体部	(12.6)	24.3	—	0.5	指ナデ	ループ文	S　礫・石英粒を含む	1/3
169	第22号住居　Aコーナー　4層	深鉢	体部～底部	(3.9)	—	5.0	0.5		羽状縄文　刺突文	石英粒を含む	1/3
170	第22号住居　4層	深鉢	口縁～底部	17.9	21.8	—	0.6	貝殻条痕　指ナデ	斜行縄文(ＲＬ)＋横位撚糸文（ℓ）	S	1/3
171	第22号住居　Bコーナー　4層	深鉢	口縁～体部	(19.3)	19.6	—	0.65		付加縄文　半截竹管押引文補修孔あり	S　雲母・石英粒を含む	1/3

その他の遺物

剝片石器

［石鏃］　いずれも無茎の石鏃で、基部に抉り込みをもつ。

［石匙］　基部につまみ部の作り出しがあり、二次調整の加工が片面にのみみられるものと限定した。縦長のものと横長のものがあり、石質も様々である。

［石篦］　縦長で下辺に向かって緩やかに開くもので、剝離は粗く大きい。肉厚で先端部が急角度をなす。

［石槍］　つまみの作り出しを欠いているが、両面に二次加工がみられ柳葉状の鋭い尖頭部を有している。

磨製石器

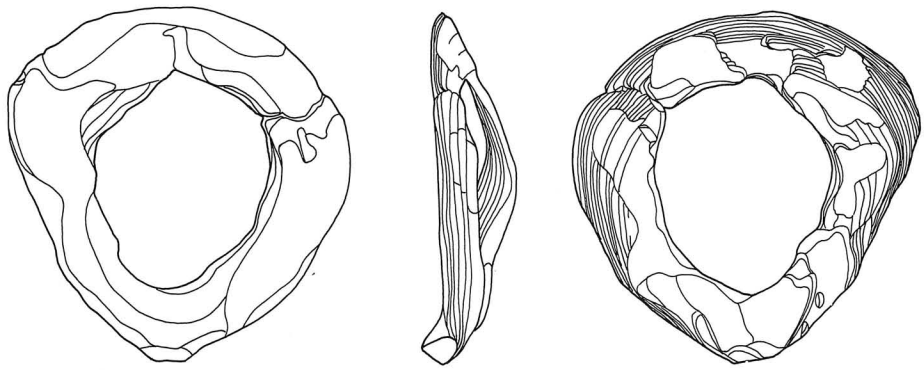
［磨製石斧］　いずれも破損しており完形品がないため、全体の形態は不明である。刃部が残っていたもののうち、一点のみ刃部の研磨が片面にのみ施されているものがあった。調整しようとして中断したためか、小型であり使用目的が他のものと異なるためか、不明である。

貝製品

［貝輪］　イタボガキの中央部を打ち欠いている。細かい調整や研磨が施された跡はみられない。

土製品

［ミニチュア土器］　2点出土した。成型及び施文は極めて雑であり幼稚さがうかがえ、子供が遊びとして作ったとも思われる。用途等不明。



自然遺物

貝層部では３ｍ×３ｍのグリットを設定し調査を実施した。このうちM列及びN列でブロックサンプリングをおこなった。

サンプリングの方法は、東西40cm×南北20cm×深さ５cm、合計4000ccとし、層の厚さが５cmを越える場合には順に５cmずつ下げ、採集した。

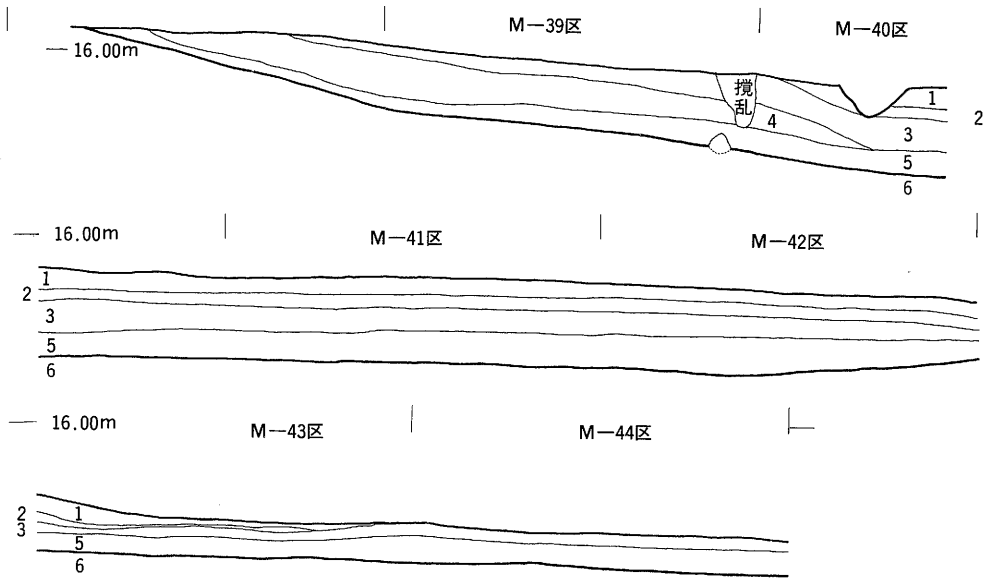
	1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	合計
ア サ リ		4		2			6	12
ハ マ グ リ		6		2			8	16
サ ル ボ ウ		13		1			14	28
ハ イ ガ イ		1					1	2
オキシジミ		7					7	14
カガミガイ		4					4	8
オオノガイ		2		1			1	4
イタボガキ		3		1			4	8
マ ガ キ	1	4					4	9
アカニシ		2		3			3	8
ツメタガイ		7						7
ウミニナ								
ス ガ イ	1	6					6	13
イボニシ		1					1	2
レ イ シ		2					2	4
ヘビガイ		1						1
合 計	2	63		10			61	136

（表の５～７層は、取り上げ５層）

		1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	合計
イノシシ	肩甲骨		2	1		1			4
	下顎骨		2						2
	尺骨		1						1
	踵骨		1		1				2
	距骨		1			1	1		3
	中手or中足								
	指骨		3	1					4
	椎骨								
	歯片		1	1			1	1	4
	合計		11	3	1	2	2	1	20
シカ	肩甲骨		5	1	5				11
	下顎骨		1						1
	尺骨		1						1
	踵骨								
	距骨		2						2
	中手or中足								
	指骨		8	3				2	13
	椎骨							1	1
	鹿角		2				1	1	4
	歯片					1			1
	合計		19	4	5	1	1	4	34
	不明獣骨		59	3	5	8		6	81
	総計		89	10	11	11	3	11	135

		1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	合計
マダイ	歯　骨(R)		13						13
	(L)		9		1		1	1	12
	前上顎骨(R)		13	1	1				15
	(L)		9	1	1				11
	上顎骨(R)	1	14	2	1	1	1	3	23
	(L)	2	21	1	1		1	2	28
	額　骨	1	5		1			1	8
	関節骨	1	6			1	1	1	10
	方　骨		11	1					12
	主鰓蓋骨		2						2
	前鰓蓋骨		4	1					5
	椎　骨		27			1		3	31
	その他								
	マダイ合計	5	134	7	6	3	4	11	170
クロダイ	歯　骨(R)								
	(L)								
	前上顎骨(R)		1						1
	(L)		4						4
	上顎骨(R)								
	(L)								
	関節骨								
	方　骨								
	主鰓蓋骨								
	前鰓蓋骨								
	椎　骨								
	その他								
	クロダイ合計		5						5

		1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	合計	
スズキ	歯　骨(R)									
	(L)									
	前上顎骨(R)									
	(L)									
	上顎骨(R)									
	(L)									
	関節骨									
	方　骨									
	主鰓蓋骨		3	2					5	
	前鰓蓋骨									
	椎　骨		4		2				6	
	その他									
	スズキ合計		7	2	2				11	
その他	不明魚骨		33	1	5			3	42	
	不明椎骨		67	1					68	
	不明上後頭骨	1	43	4	1			1	50	
	マグロ椎骨		16		4	7		1	28	
	マグロその他		1						1	マグロ尾部棒状骨1
	海獣骨		4					1	5	
	イルカ		6						6	
	その他合計	1	170	6	10	7		6	200	
	魚総計	6	316	15	18	10	4	17	386	



M列西壁断面

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　　色(10YR2/1)	シ　ル　ト	焼土粒含む
2			貝層
3	褐　　色(10YR4/4)		灰層
4	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	炭化物片を含む
5	黒　褐　色(10YR3/1)	シ　ル　ト	地山と同様の土含む
6	黄　褐　色(10YR5/4)	シ　ル　ト	地山，凝灰礫石を含む

人　　骨

貝層の南端部分（B区）において、頭部を北側に脚部を折り曲げた屈葬の状態で人骨が発見された。頭蓋では、頭蓋底面部や頬骨、鼻骨及び上顎骨の一部を欠いている。脊柱部分は残っておらず、上腕骨（R）や左右の大腿骨と指骨の一部がみられた。下顎骨と上顎骨の噛み合わせは、前歯を欠いているためはっきりとはしないが、上下の臼歯咬合状態から鉗子状になると思われる。歯は摩耗しておらず、虫歯もみられない。大腿骨最長が約42cm程であり、成人の人骨とみるならば身長148cm前後の女性の骨と考えられる。

3．奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴式住居跡

A区　第1号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　北東コーナーを欠いているが、方形である。

［竪穴層位］　住居内の堆積土は8層からなる。堆積状況は自然堆積土と思われる。2層と3層、3層と4層の間にわずかではあるが、炭化物層が認められる。

［壁の状況］　地山を壁としている。

［床面］　ほぼ平坦である。

［柱穴］　住居内に1～5のピットが認められる。6は住居外にあり、他のピットと性格を異にする。

［ピットの深さ］　1―12cm　2―19cm　3―10cm　4―10cm　5―7cm　6―12cm

［周溝］　住居の壁に沿って認められる。

［炉・カマド・煙道］　ピット6は、煙道部の残りと考えられる。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　不明。

［出入口・周囲状況］　なし。

A区　第3号住居跡

［重複］　東側は土壙に切られている。

［増改築］　なし。

［平面形］　南壁と西壁の一部しか残存していないが、方形ないし隅丸方形を呈していると思われる。一辺が約2.5mである。

［竪穴層位］　住居内堆積土は5層からなる。一部根の攪乱を受けているところがあるが、自然堆積土と考えられる。

［壁の状況］　南壁と西壁の一部が残存している。壁高は、南壁で約40cmある。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。

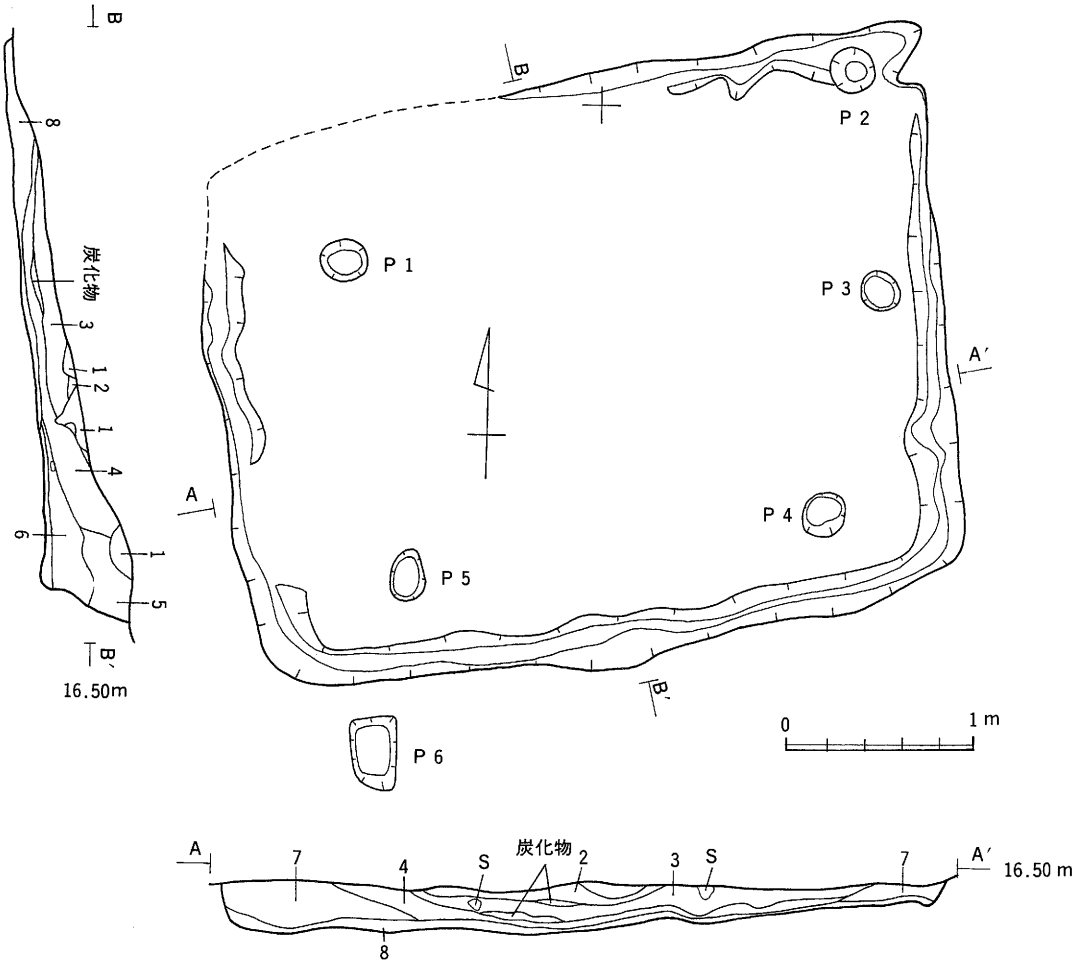
［柱穴］　西側に1個が確認されている。

［ピットの深さ］　1―20cm

［周溝］　南東コーナーのカマド袖部から西側まで、壁にそって周溝がめぐっている。

［炉・カマド・煙道］　南東コーナー近くの東壁（土壙等に切られない）に焼土と礫を積んで作られたカマドの袖（片方）がみられる。一方のカマド袖と煙道は、土壙により壊されている。

［年代決定］　静止ヘラ切り底の土師器の高台付坏と平行叩き目の土師器の甕が出土している。



A区　第1号住居　東西セクション（A－A'）

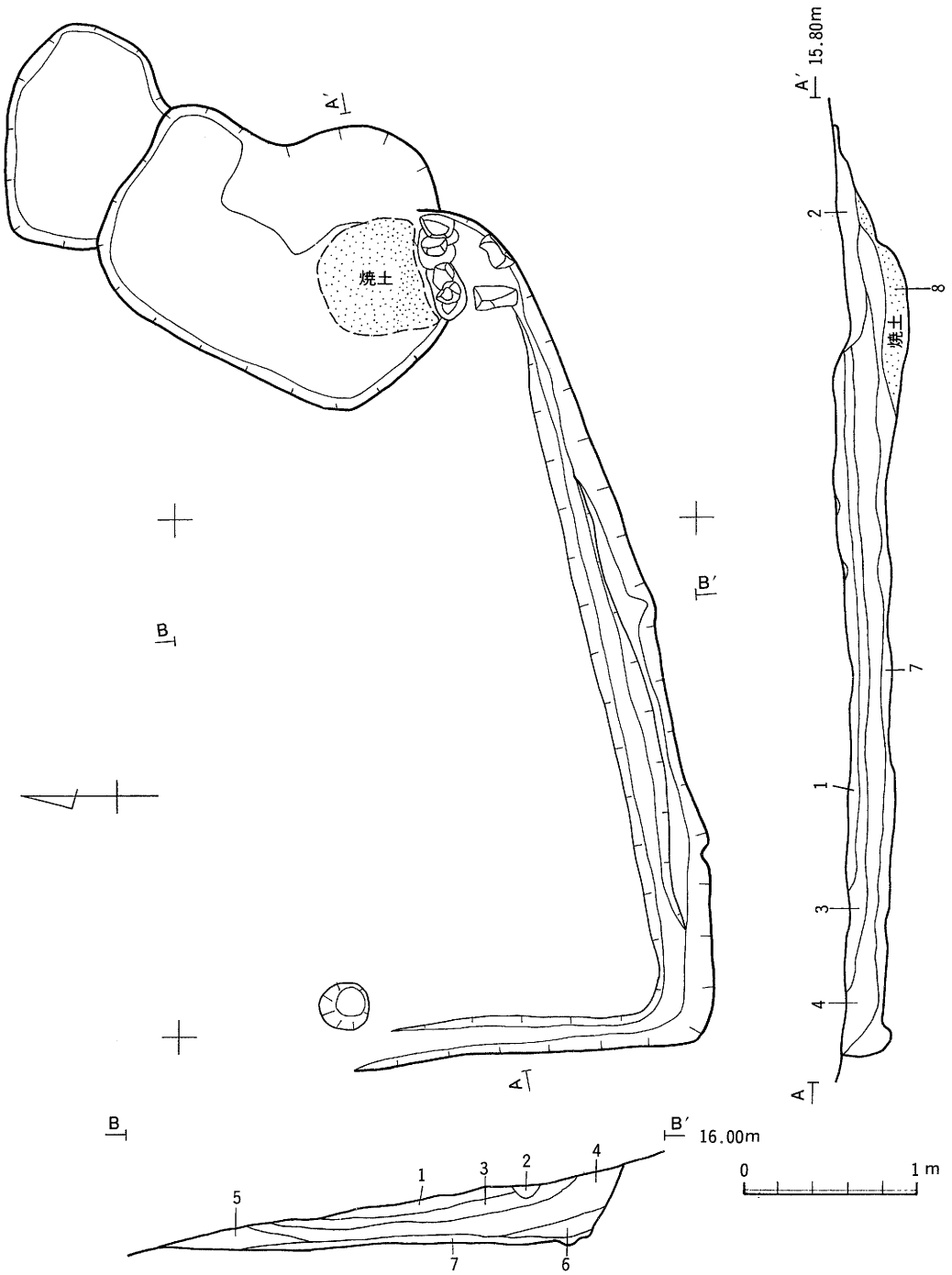
層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR2/2)		根の腐植あり
2	黄　褐　色(10YR4/3)	シ　ル　ト	遺物と若干の炭化物を含む
3	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	遺物・炭化物を含む
4	黒　褐　色(10YR3/2)	シ　ル　ト	遺物・炭化物を共に小量含む
7	暗　褐　色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	炭化物と斑点状に白色粘土を含む
8	黄　褐　色(10YR5/6)		地山

※第5・6層なし

A区　第1号住居　南北セクション（B－B'）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR2/2)		根の腐植あり
2	黄　褐　色(10YR4/3)	シ　ル　ト	遺物をEWベルトE側寄りにと若干の炭化物を含む
3	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	遺物・炭化物を含む
4	黒　褐　色(10YR3/2)	シ　ル　ト	遺物・炭化物を共に小量含む
5	褐　色(10YR4/4)	シ　ル　ト	下にある壁が崩れた後にブロック状に堆積
6	黒　褐　色(10YR3/2)	シ　ル　ト	遺物・炭火物共にごく少量含む
8	黄　褐　色(10YR5/6)		地山

※第7層なし



A区　第3号住居　南北セクション（A－A'）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	にぶい黄橙色(10YR7/3)	シ　ル　ト	粘性・しまり共になし
2	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	根による撹乱
3	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	粘性・しまり共にあり
4	にぶい黄橙色(10YR4/3)	シ　ル　ト	1～10㎜程の小石を含む　粘性ややあり
5	褐　　色(10YR4/4)	シ　ル　ト	白い砂粒を霜降り状に含む　粘性ややあり
6	黒　褐　色(10YR3/2)	シ　ル　ト	粘性・しまり共にあり
7	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	粘性第4層よりある

A区　第3号住居　東西セクション（B－B'）

層　位	土　　色	土　　性	備　　考
第1層	にぶい黄橙色(10YR7/3)	シ　ル　ト	粘性・しまり共になし
2	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	根による腐植をうけている
3	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	粘性・しまり共にあり
4	にぶい黄橙色(10YR4/3)	シ　ル　ト	1～10mm程の小石を含む　粘性ややあり
7	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	粘性第4層よりある
8	暗　褐　色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	焼土を多量に含む

A区　第4号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形］　住居南側と南西コーナー・南東コーナー付近までしか残存していないため平面形は不明である。

［竪穴層位］　自然堆積土の4層に攪乱層の1層が加わった5層である。

［壁の状況］　地山を壁としている。住居南側と南西コーナー・南東コーナー付近までしか残存していないが保存状況は良く、壁高は最大で43cmである。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。貼床の有無は不明である。

［柱穴］　小土壙らしい遺構が南東コーナーと南西コーナーの壁につくように、それぞれ1個ずつとその中間に1個の計3個を確認することができる。

［ピットの深さ］　1－45cm　2－38cm　3－23cm

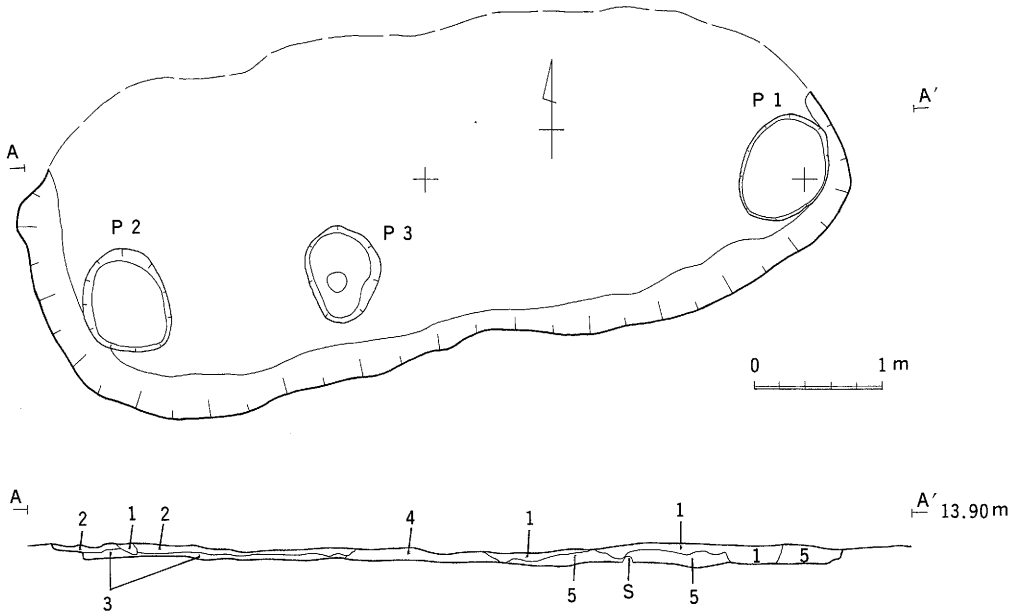
［周溝］　なし。

［炉・カマド・煙道］　なし。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　遺物が出土していないので年代決定は不可能である。

［出入り口・周囲状況］　なし。



A区　第４号住居　東西セクション（A－A'）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第１層			撹乱層
2	褐　　色(10Y R4/4)	シ ル ト 質	所々根による黒味を帯びている、しまりあり
3	褐　　色(10Y R4/4)	シ ル ト 質	２層に比して礫を多く含む
4	褐　　色(10Y R4/6)		礫を多く含む　しまりあり
5	にぶい黄褐色(10Y R5/4)		礫を多く含む

A区　第９号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　南北約４ｍ×東西3.4m（推定）の隅丸方形である。

［竪穴層位］　住居内堆積土は16層からなる。堆積状況から推測して、すべて自然堆積土である。

［壁の状況］　地山を壁としている。壁は住居跡の東側で最も保存状態が良いが、西側に行くほど残りが悪く、北西コーナー付近と南側カマド付近で消滅してしまう。壁高は最も保存の良い東側で、最大12cmである。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。

［柱穴］　ピットと認められるのは計９個である。住居床面に８個（１～５・７～９）と住居南東コーナー外の１個（６）である。そのうち柱穴と考えられるのは２個（２・３）である。またカマド焚口付近より土壙が１個（Ｄ１）と溝状遺構が１個（Ｍ１）認められた。

［ピットの深さ］　１－14cm　２－８cm　３－11cm　４－８cm　５－10cm　６－７cm　７－８cm　８－２cm　９－２cm　Ｄ１－16cm　Ｍ１－４cm

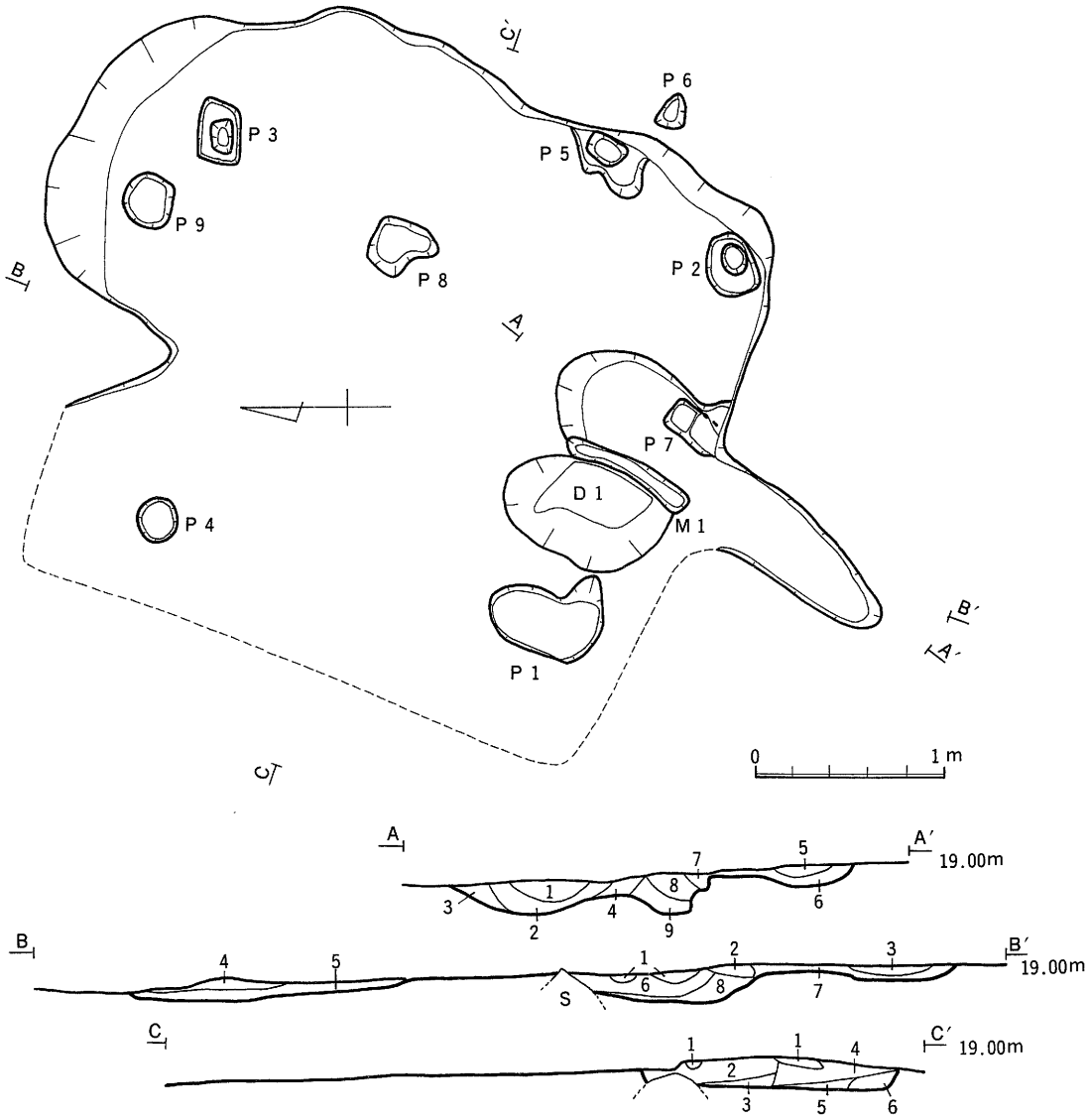
［周溝］　なし。

［炉・カマド・煙道］　住居南側中央部付近に煙道部・焚口部が認められた。出土遺物はなし。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　住居跡の脇から表採で須恵器の坏片（静止ヘラ切り）が出土している。この住居跡に関連があるかどうかは不明であるが、この坏の年代は10世紀初頭と思われる。

［出入口・周囲状況］　なし。



A区　第９号住居　カマドセクション（A－A'）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第１層	黒　褐　色(7.5YR2/2)	シ　ル　ト	粘性強く、しまり弱い
2	褐　色(7.5YR4/4)	シ　ル　ト	粘性強く、しまり弱い
3	灰色(7.5Y4/4)と 黄色の混入土が50%ずつ	砂　質	粘性なく、しまり強い　床面と同じ土
4	褐　色(10YR4/4)	シ　ル　ト	粘性弱く、しまり強い
5	褐　色(7.5YR4/6)	シ　ル　ト	粘性弱く、しまり強い　ロームをブロック状に含む
6	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	粘性弱く、しまり弱い　焼土・炭化物を含む
7	にぶ黄褐色(10YR4/3)	シ　ル　ト	粘性弱く、しまり弱い　ロームをブロック状に含む
8	褐　色(7.5YR4/3)	シ　ル　ト	粘性弱く、しまり弱い　ロームをブロック状に含む
9	黒　褐　色(10YR3/2)	シ　ル　ト	粘性・しまり共に弱い

A区　第９号住居　東西セクション（Ｂ－Ｂ'）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第１層	褐　　色(7.5ＹＲ2/2)	シ　ル　ト	しまり弱い　焼土を含む
2	黒　褐　色(7.5ＹＲ4/4)	シ　ル　ト	しまり弱い　焼土・炭化物を含む
3	暗　褐　色(7.5ＹＲ2/2)	シ　ル　ト	粘性なく，しまり弱い　焼土・炭化物を含む
4	暗　褐　色(10ＹＲ4/6)	シ　ル　ト	粘性・しまり共に弱い　ロームをブロック状に含む
5	黒　褐　色(7.5ＹＲ4/4)	シ　ル　ト	粘性・しまり共に弱い　炭化物を含む
6	暗　褐　色(10ＹＲ3/4)	シ　ル　ト	粘性弱く，しまり弱い　焼土炭火物を含む
7	黒　褐　色(10ＹＲ3/2)	シ　ル　ト	粘性弱く，しまり弱い　ロームをブロック状に含む
8	褐　　色(7.5ＹＲ6/1)	シ　ル　ト	粘性弱く，しまり強い　ロームをブロック状に含む

A区　第９住居　南北セクション（Ｃ－Ｃ'）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第１層	暗　褐　色(10ＹＲ3/3)	シ　ル　ト	粘性弱く，しまりなし
2	暗　褐　色(10ＹＲ3/4)	シ　ル　ト	粘性・しまり共に弱い　ロームをブロック状に含む
3	暗　褐　色(10ＹＲ3/4)	シ　ル　ト	粘性・しまり共に弱い
4	黒　褐　色(10ＹＲ3/2)	シ　ル　ト	粘性・しまり共に弱い　ロームをブロック状に含む
5	黒　褐　色(10ＹＲ3/2)	シ　ル　ト	粘性・しまり共に弱い
6	灰色(7.5Ｙ6/1)と 黄色の混入土が50％づつ	砂　　質	粘性なく，しまり強い　床面と同じ土

A区　第11号住居跡

［重複］　南西コーナーが土壙らしき遺構に切られており、この土壙より古い。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　残存する住居跡の状況から推測して３ｍ×３ｍの方形である。

［竪穴層位］　住居内堆積土は12層からなる。堆積状況から推測して全て自然堆積土である。

［壁の状況］　地山を壁としている。住居の北側で最も保存状態が良い。最も保存状態の良い北側で壁高は最大で27cmである。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。焚口部の一部であろうが焚口部から住居中央部付近まで床面（底面）が焼けている。南東コーナー寄りの所から10×20cmと20×30cmの石が出土した。

［柱穴］　ピットと認められるのは６個である。住居内壁に１個（１）と住居外に３個（２～４）それに住居床面に２個（５、６）である。柱穴と認められるのはない。

［ピットの深さ］　１－15cm　２－14cm　３－14cm　４－４cm　５－11cm　６－５cm

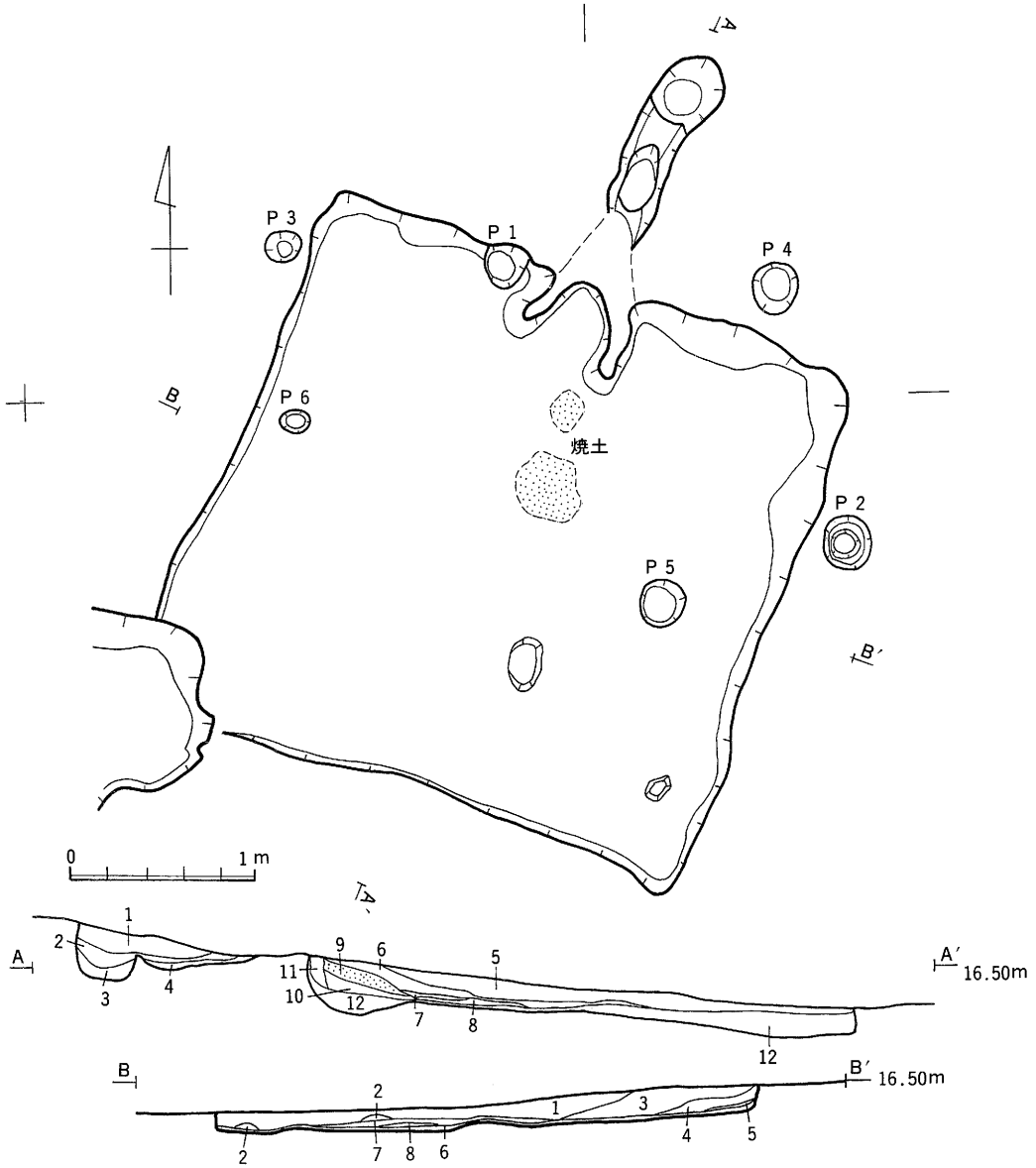
［周溝］　なし。

［炉・カマド・煙道］　なし。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　住居北東部ピットから縄文土器（深鉢）が３点（２点は底部、１点は口縁部）と住居カマド右側から製塩土器が１点出土した。縄文土器は器形から推測すると前期であろう。製塩土器は時代不明。

［出入口・周囲状況］　なし。



A区　第11号住居　南北セクション（A－A'）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	暗　褐　色(10YR3/4)	シルト質	粘性・しまり共にあり
2	暗褐色10YR3/4> 明褐色7.5YR5/6	シルト質	粘性・しまり共にあり　煙道
3	暗　褐　色(10YR3/4)	シルト質	粘性・しまり共にあり　炭化物を少量含む
4	褐　　色(10YR4/6)	シルト質	粘性・しまり共にあり
5	褐　　色(7.5YR4/4)	シルト質	粘性・しまり共にあり　7.5YR8/3浅黄橙の細粒　ブロックを霜降り状に含む
6	褐　　色(7.5YR5/4)	シルト質	粘性・しまり共にあり
7	赤　褐　色(7.5YR4/4)	シルト質	粘性なし，しまりあり　炭化物を多量に含む
8	赤　褐　色(5YR4/6)	粘　土　質	粘性・しまり共にあり
9	にぶい赤褐色(7.5YR4/3)	シルト質	粘性ややあり，しまりあり　焼土　7.5YR8/3にぶい黄橙の粘土をブロック状に含む
10	にぶい褐色(7.5YR3/3)	シルト質	粘性・しまり共にややあり
11	褐　　色(10YR5/3)	粘　土　質	粘性・しまり共にあり
12	褐　　色(7.5YR4/3)	シルト質	粘性ややあり，しまりあり

A区　第11号住居　東西セクション（B－B'）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	褐　　色(7.5YR4/3)	シルト質	粘性・しまり共にあり　7.5YR8/3浅黄橙の細粒・ブロックを霜降り状に含む　上記9層と同じ
2	にぶい褐色(7.5YR5/4)	シルト質	粘性・しまり共にややあり　炭化物を多量に含む
3	褐　　色(7.5YR4/4)	シルト質	粘性・しまり共にあり　明褐色の細粒を霜降り状に含む
4	暗　褐　色(7.5YR4/4)	シルト質	粘性・しまり共にあり　7.5YR5/6明褐色の細粒を霜降り状に含む
5	にぶい褐色(10YR5/4)	シルト質	粘性・しまり共にあり
6	にぶい褐色(7.5YR5/4)	シルト質	粘性・しまり共にあり　炭化物多量に含む　上記6層と同じ
7	橙　　色(7.5YR6/8)		地山
8	褐　　色(7.5YR4/4)	シルト質	粘性ややあり，しまりあり

A区　第15号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　カマドを改築している。

［平面形］　東西5.1m×南北3.0m（残存部）の方形である。

［竪穴層位］　住居内堆積土は、自然堆積の7層からなる。

［壁の状況］　北壁の全部と東西壁の一部が残存している。壁高は約30cm残存している。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。

［柱穴］　住居内にはみられない。

［周溝］　なし。

［炉・カマド・煙道］　北壁の中央に第1カマドの焚口、袖、煙道部があり、その東側に第2カマドの袖がみられ、カマドの上部で住居外に深さ約10cmのピットがあり、煙だしと思われる。第1カマドには、多量の焼土・焼石等を含む層が多く残存するが、第2カマドは焼土・焼石等を含む土層が少ないので第2カマドが古く、第1カマドは第2カマドより新しいと思われる。

A区　第16号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　東西側と南側を増築している。

［平面計］　増築前は東西4.4m×南北4.4mの隅丸方形で、増築後は東西6.4m×南北6.0m（推定）の隅丸方形である。

［竪穴層位］　不明。

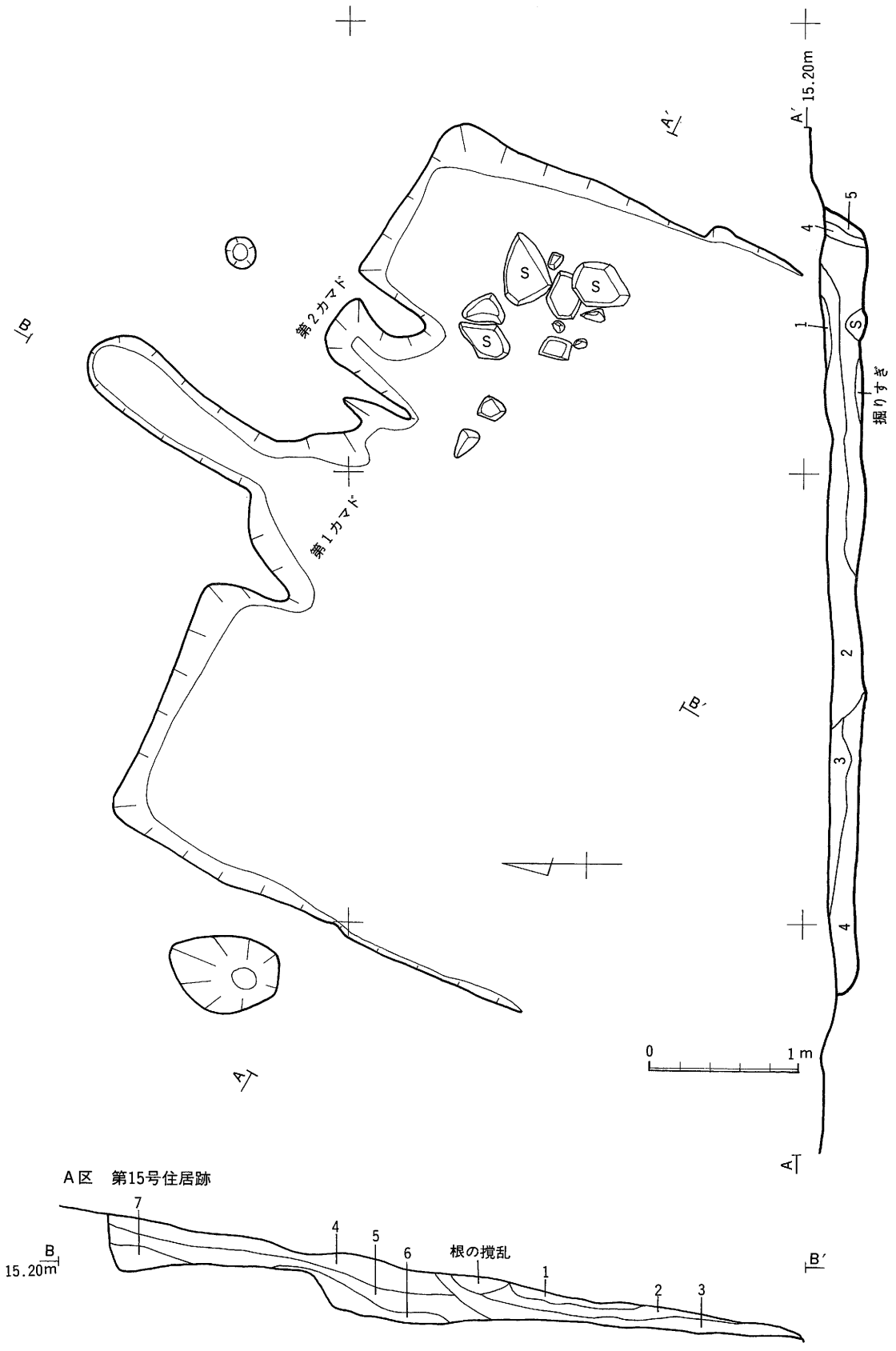
［壁の状況］　北壁の位置はそのままで、東西壁と南壁を造り変えている。増築後の南壁は欠損している。壁高は残存最高で約30cm。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。

［柱穴］　柱穴らしいピットを多数検出しているが、組み合わせは不明確である。増築前はわからないが、増築後は床面と壁に柱穴がみられる。壁柱穴は、一辺に4つずつで計16個とみられる。

［ピットの深さ］　P1～P13—平均40cm　P14—40cm　P15—30cm　P16—29cm　P17—27cm　P18—25cm　P19—38cm　P20—13cm　P21—13cm　P22—30cm　P23—25cm

［周溝］　増築後の南壁は欠損しているが、増築前・後とも壁にそって周溝がめぐっていると思わ



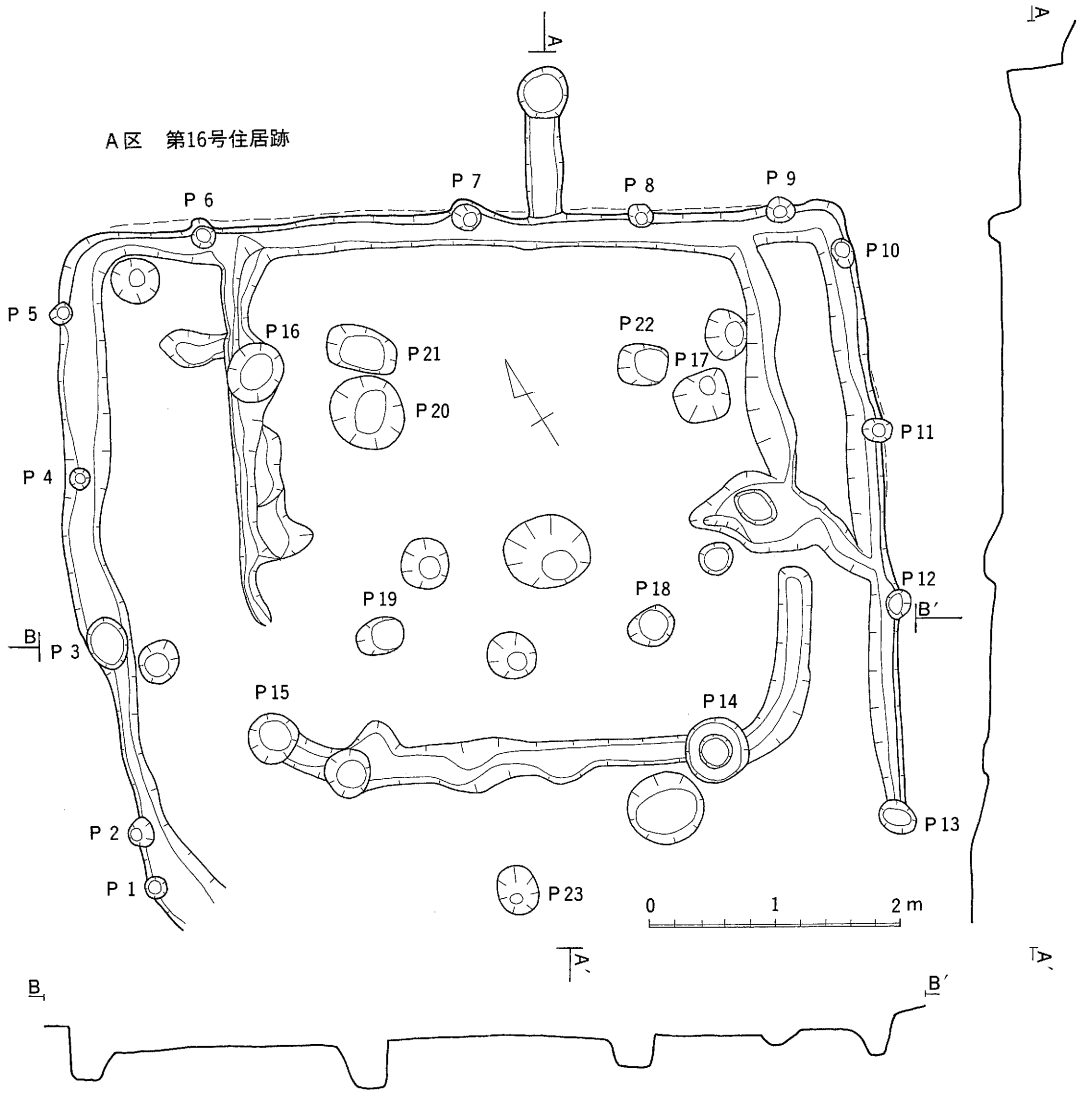
A′ 15.20m
A′
5
4
1
S
掘りすぎ
2
3
4
B
B′
A
第2カマド
第1カマド
S
0
1m
A区　第15号住居跡
7
4
5
6
根の撹乱
1
2
3
B
15.20m
B′

A区　第15号住居　東西セクション（A－A′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	にぶい黄褐色(10YR5/4)		粘性弱く，しまりあり
2	褐　　色(7.5YR4/3)		粘性弱く，しまりあり
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)		粘性弱く，しまりあり
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)		粘性弱く，しまりあり　明黄褐色土をブロック状に含む
5	暗　褐　色(7.5YR3/4)		粘性弱く，しまりあり　明黄褐色土を含む

A区　第15号住居　南北セクション（B－B′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	にぶい黄褐色(10YR5/3)		粘性弱く，しまりあり
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)		1～2㎜ぐらいの砂粒を含む　粘性弱く，しまりあり
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)		1～2㎜ぐらいの細砂と炭化物・土器片を含む　粘性弱く，しまりあり
4	暗　褐　色(7.5YR3/4)		焼石・炭化物を少量含む　粘性弱く，しまりあり
5	暗　褐　色(7.5YR3/4)		焼石・炭化物を少量と斑点状の明黄褐色土それに1～2㎜の砂粒を含む　粘性弱く，しまりあり
6	暗　褐　色(7.5YR3/4)		焼石・焼土を多量に含む　粘性ややあり，しまりあり
7	黒　褐　色(7.5YR3/1)		焼石・焼土・炭化物を多量に含む　粘性弱く，しまりあり



れる。周溝の一部は斜めに壁面を掘り込んでいる。

「炉・カマド・煙道」　煙道と煙だしが北側で確認されたが、焚口部は確認されなかった。

B区　第3号住居跡

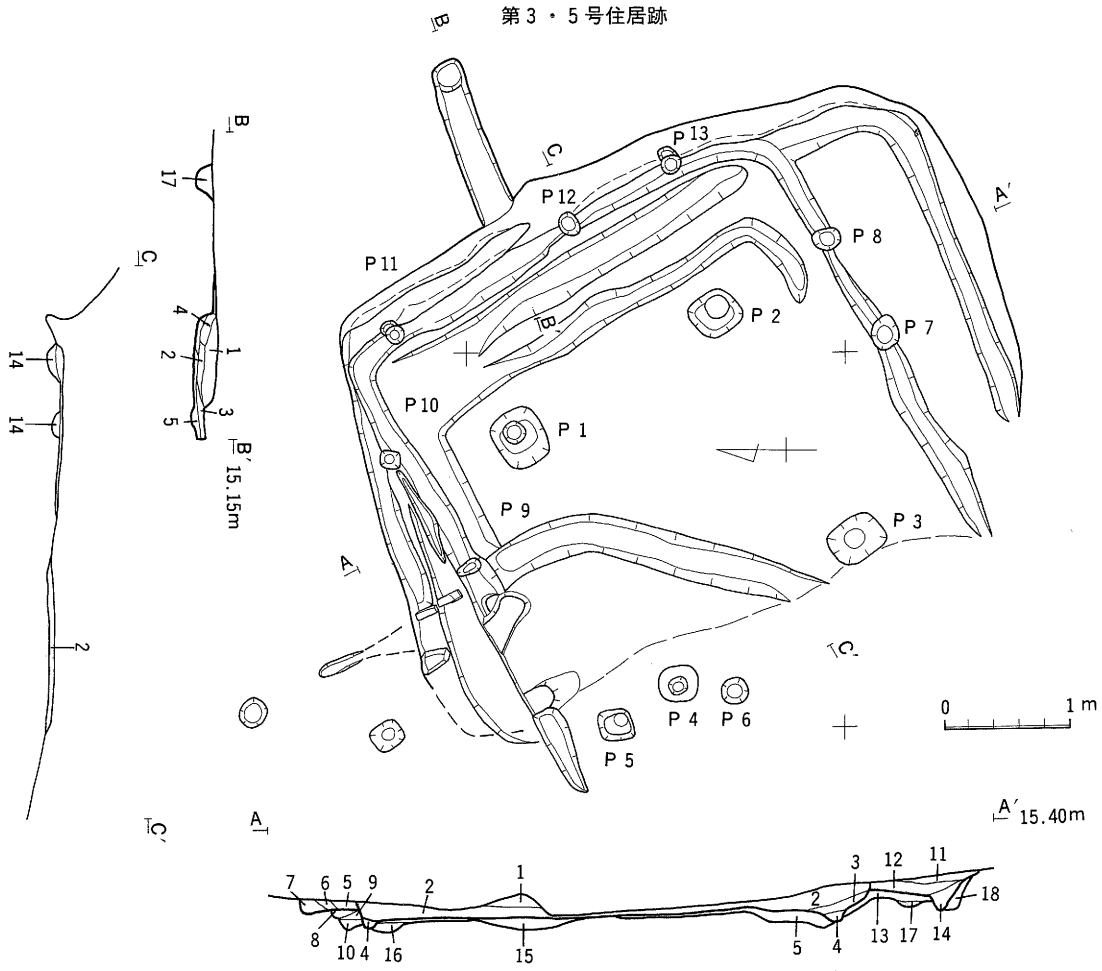
［重複］　第5号住居との重複関係にある。第5号住居の堆積土を掘り込んでいるところから第5号住居より新しい。その他東壁から西側に延びる新しい溝によって堆積土が切られている。遺構の確認された面は、表土下の縄文時代前期の遺物を含む黒色土の上面である。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　住居跡の西側が削剝されている。残存する住居跡の状況から南北約4m、東西約4m（残存壁長）のほぼ方形の平面形をもつ住居跡のコーナーは丸味をもちいわゆる隅丸方形である。

［竪穴層位］　確認できた堆積土は4層ある。すべて層や層の堆積状況などから自然堆積土と考えられる。

［壁の状況］　黒色土および地山を壁としている。第5住居と重複する部分では第5住居の堆積土



B区　第3号住居　南北セクション（A－A′）

層位	土色	土性	備考
第1層	黒褐色(10YR2/2)	シルト	
2	〃 (10YR3/1)	〃	白色の細粒をわずかに含む。
3	黒 色(10YR1.7/1)	〃	白色の細粒をわずかに含む。
4	黒褐色(10YR3/1)	〃	白色と黄色の細粒を多量に含む。
5	極暗褐色(7.5YR2/3)	〃	焼土を含む。
6	黒褐色(7.5YR2/2)	〃	炭化物・凝灰岩の天井の焼けを含む。
7	極暗褐色(7.5YR2/3)	〃	地山の細粒を含む。
8	極暗赤褐色(2.5YR2/2)	〃	焼土。人為的堆積土。
9	黒褐色(7.5YR2/2)	〃	地山細粒を含む。人為的堆積土。
10	〃 〃	〃	9層より地山細粒多し。
11	極暗褐色(7.5YR2/3)	〃	地山細粒を含む。
12	黒褐色(7.5YR2/2)	〃	焼土を含む。
13	〃 〃	〃	地山細粒を含む。貼床。
14	黒褐色(10YR3/2)		
15			｝地山（掘り下げすぎ）
16			
17	黒褐色(10YR2/2)		焼土・炭化物・地山細粒を含む。
18			地山（掘りすぎ）

B区　第5号住居　カマドセクション（B－B′）

層位	土色	土性	備考
第1層	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む。
2	暗赤褐色(2.5YR3/3)		焼地・炭化物を1層より少なめに含む。
3	極暗赤褐色(2.5YR2/3)	シルト	焼土・炭化物を少量含む。
4	黒褐色(7.5YR2/2)	〃	炭化物を多量に含む。
5	黒褐色(10YR3/2)	〃	

※3.5層　堀り方埋土

B区　第3号住居　東西セクション（C－C′）

層位	土色	土性	備考
第2層	黒褐色(10YR3/1)	シルト	白色の細粒をわずかに含む。
14	黒褐色(10YR2/3)	〃	溝埋土

と地山を壁としている。壁の大部分は周溝が壁上端の内側にくいこんでいる。壁にはピットが認められた。東壁に3個、北壁に2個、南壁に2個である。とくに北壁と南壁のものは対称の位置にある。なお西側は削平（破壊されていた）のため確認できなかった。

［床面］　残存する床面は、全体に貼床が認められた。貼床の土はわずかに黒色土を含むものである。床面は平坦で堅い。貼床の厚さは約3cmである。精査終了後、床面をさらに掘り込んで調査した結果、北壁と東壁側で周溝かと思われる溝を確認した。第3住居よりも古い住居跡の周溝かとも考えられるが確証は得られなかった。

［柱穴］　柱穴と認められるものは住居床面に6個（1～6）壁際に7個（7～13）の計13個検出されている。床面にみられる1、2、3、4は深さ、大きさ、配置関係等から主柱穴として考える。壁際にみられる7～13のピットは深さ、大きさ、配置関係確認状況などから3号住居に伴う壁柱穴と考える。

［ピットの深さ］　1－34cm　2－31cm　3－29cm　4－24cm　5－28cm　6－11cm　7－34cm　8－43cm　9－55cm　10－40cm　11－31cm　12－29cm　13－30cm

［周溝］　残存する壁の内側で、カマドの部分を除き周溝がめぐっている。住居東半の周溝は壁面

を外側にえぐるように掘り込んでいる。又西半分の周溝はゆるやかに立ち上がる。

［炉・カマド・煙道］　カマドは煙出し部・燃焼部（焚口部）が確認されている。燃焼部は最大幅1m、長さ60cm、燃焼部内幅50cmである。北壁に造りつけられており、粘土で構築されている。右側壁は、焼けて暗赤褐色をしているが左側壁はさほど焼けていない。焚き口は焼けて暗赤褐色をして比較的硬くやや平坦である。燃焼部底面は焼けておらずやや平坦である。燃焼部の奥壁はゆるやかに立ち上がる。住居外に長軸24cm、短軸22cm、深さ14cmのピットが確認された。煙道部先端の凹と考えられる。燃焼部に奥壁より斜めに平らな石が落ち込んでおり内側が焼けていた。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　表杉ノ入式の坏を出土している。

B区　第5号住居跡

［重複］　第3号住居と重複関係にある。第5号住居は第3号住居によって住居跡の大部分が切られており第3号住居より古い。縄文時代の遺物を含む層（2層）の上面で遺構を確認。カマドの造り替えが認められ(東壁→北壁)、それに伴って北壁をわずかに北側に拡張した形跡が認められた。

［平面形・方向］　残存する壁の状況から方形を基調とした平面形をもつ。

［竪穴層位］　4層に大別された。1層は南側に分布（極暗褐色シルト層No.5、11)、2層は黒褐色シルトに焼土や木炭を含む層で、住居跡残存部ほぼ全域に分布(層No.6、12)、3層は極暗褐色シルトに地山粒を含むもので、住居跡壁沿いに分布(層No.7)、4層は黒褐色シルトで住居跡東壁、南壁沿いに分布し周溝に堆積している（No.14)。

遺物は大別の各層ごとにとりあげたが、遺物の出土状況に規則性はみとめられない。

［壁の状況］　縄文時代の遺物包含層（2層）と地山を壁としている。住居跡の東側で最も保存が良いが西側にいくほど残存状態が良くない。壁の立ち上がりは、東壁が内側にくいこんで立ち上がるが、その他の部分では外傾する。

［床面］　床面は、ほぼ平坦であり堅い。床面は貼床となっている。住居跡北側では貼床下に古い壁があり、その下には周溝がめぐっている。南側の床面およびその直上から炭化材が認められたが、その規則性は不明である。

［柱穴］　本住居跡に伴うと考えられるピットは確認できなかった。

［周溝］　残存する壁沿いにめぐっている。(周溝の状態は壁の項を参照）古い北壁沿いの周溝は第3号住居によって切られている。南壁沿いの周溝には掘り方が認められ、壁沿いには地山質の土を埋めて周溝外側の壁としている。

［炉・カマド・煙道］　カマドは2個検出された。北壁にとりつくもの（第2カマド）と東壁にとりつくもの（第1カマド）である。第1カマド本体が失われている。煙道下の床面には若干の焼土が認められた。第2カマドは煙道・煙出しは削剝を受けほとんど残っていない。本体は石を用いて側壁としている。カマド内には天井に用いられたと思われる凝灰岩の切石が2個落ち込んでいる。第1カマドの煙道の側壁・底面は火熱を受けて赤変している。第1カマド煙道の

先端には煙道の天井に使用されたと思われる凝灰岩の切石が堆積土中に落ち込んでいる。第2カマドの底面の南側はもとの北壁の段の部分に人為的に貼床（層No.3）をしてその上面を利用している。底面はほとんど焼けていない。

［貯蔵穴］　確認されなかった。

［年代決定］　使用時、廃絶時に近いと考えられる遺物は出土していない。ちなみに住居跡貼床下および堆積土1層からは、栗囲式が国分寺下層式と思われる坏の破片が出土している。

［出入り口・周囲状況］　確認されなかった。

B区　第4号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　東西2.7m×南北3mの隅丸方形である。住居東側の中央部から北側に1.6m×0.3mのカマドがある。

［竪穴層位］　住居内堆積土は6層からなる。竪穴層位はこの自然堆積土6層に根の腐植の1層が加わった7層である。

［壁の状況］　地山を壁としている。南コーナー付近が残存していないだけで全体的に壁の保存状態は良い。壁高は住居東側のカマド西側で最も高く41cmある。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。貼床の有無は不明である。

［柱穴］　60cm×55cmの小土壙らしい遺構が住居北側の中央部に壁を切ってあるのが1個確認できる。

［ピットの深さ］　1—34cm

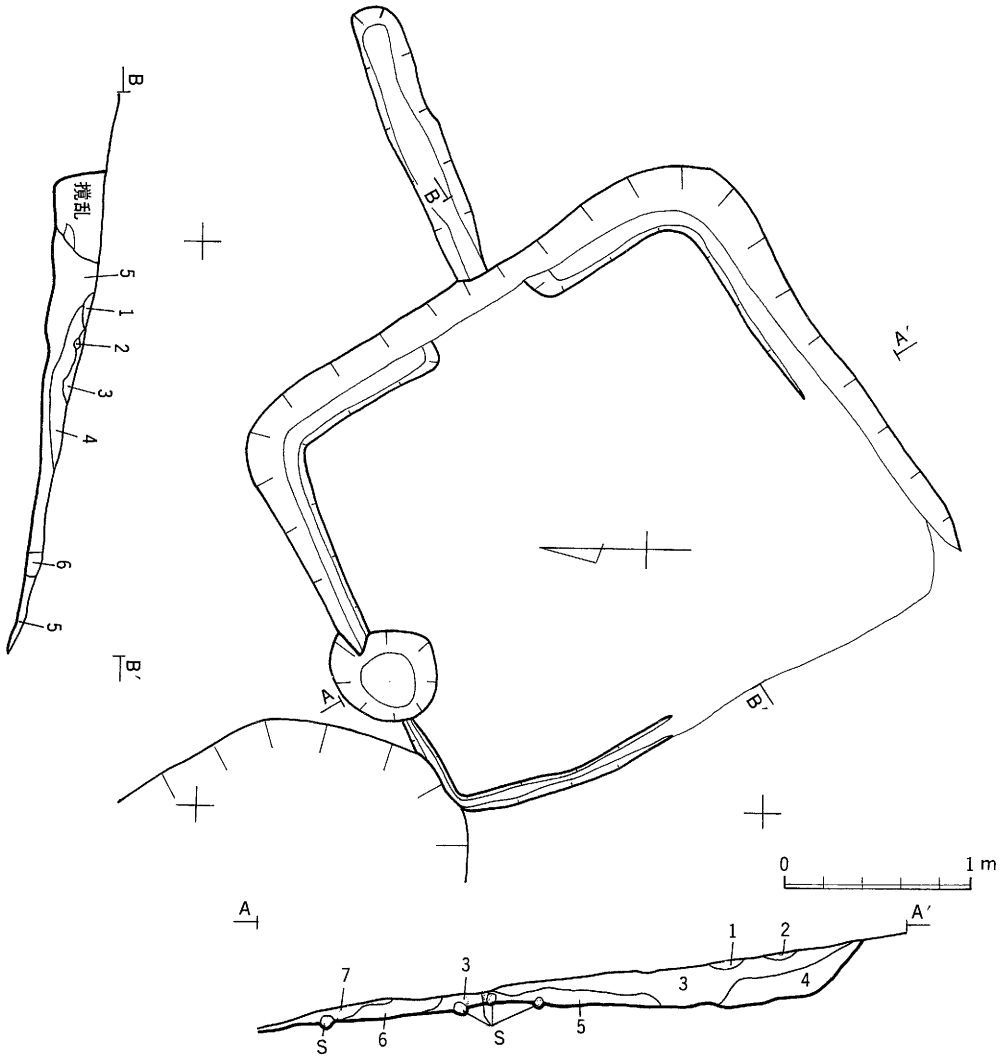
［周溝］　南コーナー付近とカマド焚口部を除き全体にめぐらされている。周溝の保存状態は悪く、周溝高は最大でも7cmである。

［炉・カマド・煙道］　住居東側の中央部から北側に1.6m×0.3mの煙道部と煙出し部を確認することができる。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　遺物が出土していないので年代決定は不可能である。

［出入り口・周囲状況］　なし。



B区　第４号住居　南北セクション（A－A′）

層　位	土　　色	土　　性	備　　考
第１層	淡　黄　色(５Ｙ R8/3)	粘　工　質	しまりなし。
2	暗　褐　色(10Ｙ R3/3)	シ ル ト 質	根の腐植による黒色の土が斑点状にみられる。
3	褐　　色(10Ｙ R4/4)	シ ル ト 質	根の腐植により上面に黒味を帯びているところがある。１～２㎜程の礫粒を含んでいる。しまりあり。
4	褐　　色(10Ｙ R4/4)	シ ル ト 質	第３層より礫粒を多く含んでいる。しまりあり。
5	明 黄 褐 色(10Ｙ R6/6)	シ ル ト 質	しまりなし。
6	黄　橙　色(10Ｙ R7/8)	シ ル ト 質	礫を多く含む。しまりあり。
7	褐　　色(10Ｙ R4/4)	シ ル ト 質	根の腐植による黒ずんだ土と思われる。

B区　第４号住居　東西セクション（B－B′）

層　位	土　　色	土　　性	備　　考
第１層	にぶい黄褐色(10Ｙ R5/4)		２層の土を含んでいる。
2	淡　黄　色(５Ｙ8/3)		ブロック状になって第２層と第３層の間に入り込んでいる。しまりなし。
3	暗　褐　色(10Ｙ R3/3)		根の腐植により若干上面は黒味を帯びている。しまりあり。
4	褐　　色(10Ｙ R4/4)		炭化物を若干含んでいる。しまりあり。
5	褐　　色(10Ｙ R4/4)		１～２㎜程の礫粒を含む。しまりあり。
6	褐　　色(10Ｙ R4/4)		根の腐植が進んでいる。

B区　第6号住居跡

［重複］　なし。

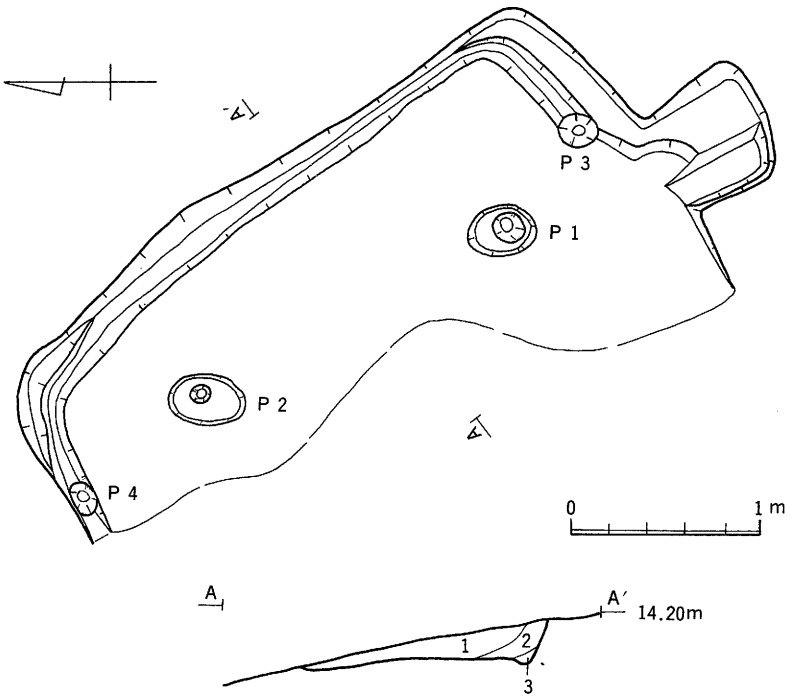
［増改築］　なし。

［平面形・方向］　隅丸方形と推定される。住居東側は残っているが、西側は地形が斜面になっているためか残っていない。

［竪穴層位］　住居内堆積土は2層からなる。第1層は黒褐色のシルトで東壁ぞいを除き、全域に分布している。第2層は地山のブロックを含む暗褐色シルトで東壁の部分にだけ分布している。遺物の出土状況は第1・2層から少量の土器片が出土している。これらの遺物の出土に規則性は認められなかった。

［壁の状況］　壁は住居の東側で保存が良いが、西側にいく程残りが悪く次第に消滅してしまう。最も保存の良い東壁は高さ15～25cmである。壁に伴う施設は確認されず、地山や縄文時代の包含層が壁となっている。

［床面］　床面は、ほぼ平坦になっている。床面下には住居掘り方は確認されず、地山および縄文時代の遺物包含層が床面となっている。床面上には炭化材が数本みられたがいずれも小片（5×20cm程度）で配置に規則性はみられなかった。



B区　第6号住居　東西セクション（A－A′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR2/2)	シ　ル　ト	1～2㎜の礫粒と小石粒を含む。粘性あり。
2	暗　褐　色(10YR3/3)	砂質シルト	地山と同様の土をブロック状に含む。
3	暗　褐　色(10YR3/4)	砂質シルト	周溝堆積土

※　床面には炭化材が数本見られたが，いずれも小片（5×20cm程度）である。

［柱穴］　床面からＰ１・Ｐ２の２つのピットが発見された。掘り方と柱痕跡が識別でき、柱穴と考えられる。Ｐ１・Ｐ２の間隔は約1.9mで２つのピットを結んだ線は東壁とほぼ平行で、Ｐ２は北壁および、南壁から約90cmの位置にある。柱配置などからＰ１、Ｐ２は、主柱穴の一部と推定される。

［周溝］　周溝は西側張り出し部分を除き、残存部のほぼ全体に見られる。住居北東隅と南壁の部分で周溝と住居壁との間に幅の狭い平坦面がある。その他の部分では壁と周溝は接している。周溝の幅は約20cm、深さ５cm、断面形は、「U」字状である。周溝内にはＰ３とＰ４の２つのピットが確認された。Ｐ３は住居南側、Ｐ４は住居北側の周溝内にあり、ほぼ対照的な位置にある。周溝内には暗褐色の砂質シルトが堆積していた。

［炉・カマド・煙道］　炉・カマドは確認されなかった。

［貯蔵穴］　確認されなかった。

［年代決定］　年代決定を示す遺物はなかった。

［出入り口・周囲状況］　住居南側に張り出しがある。長さは約60cmであるが、西側は削手を受けているため、幅は不明である。

B区　第８号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　東部80cm～１m位削られている。

［平面形・方向］　隅丸方形（南側と東・西側の大部分を欠くので確証はない。）

［竪穴層位］　住居内堆積土は２層からなる。

［壁の状況］　壁は住居の北側で保存が良い、南側にいくほど残りが悪く東西側の中程で自然消滅してしまう。地山を壁としている。最も保存の良い北側で壁高８～15cmである。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。周溝は北側と東側の旧住居壁のところまでめぐっている。またカマド東側の40cmのところから南に1.7m程周溝を確認することができる。

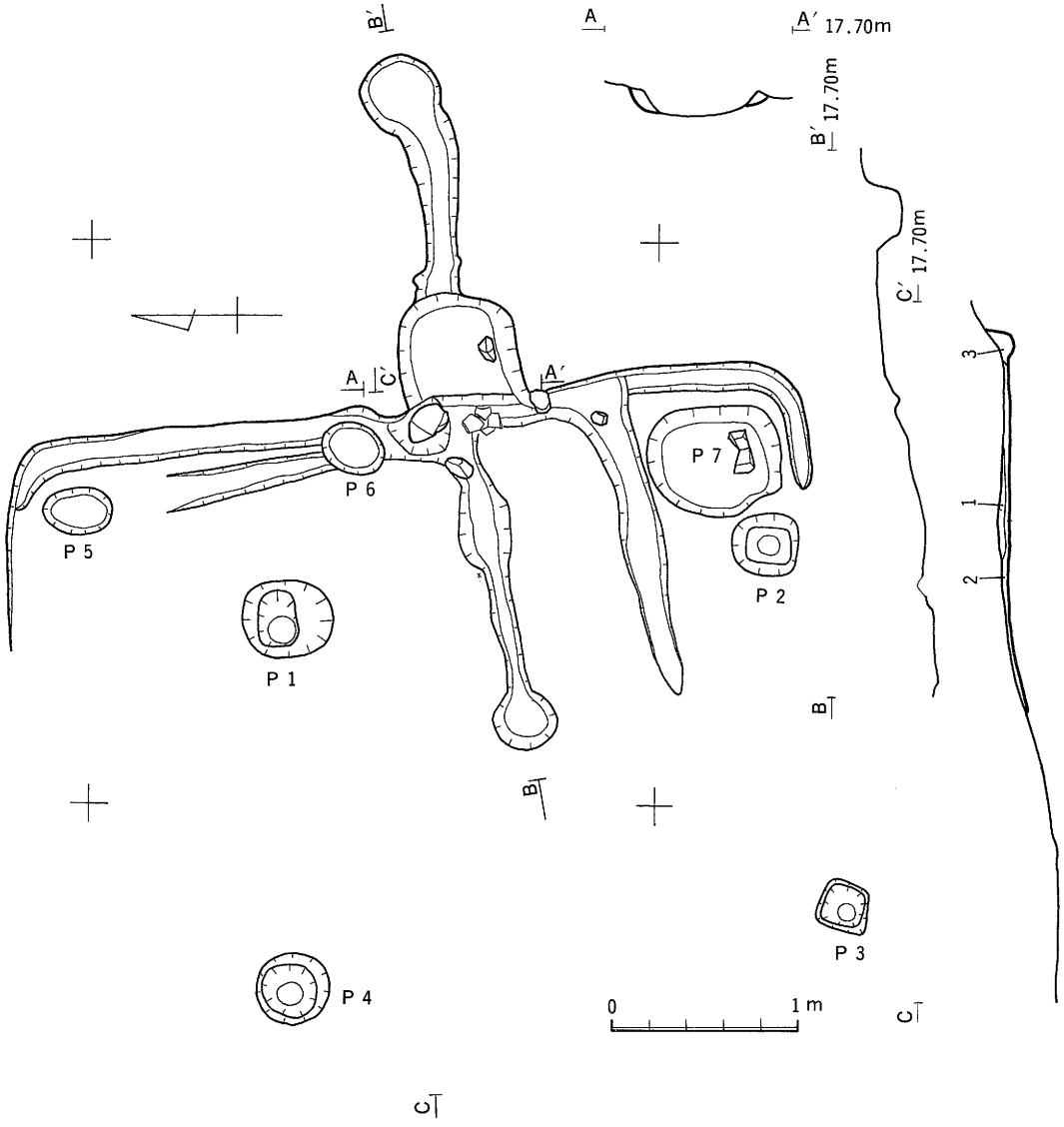
［柱穴］　新住居に伴う柱穴１個（５）新住居に伴う柱穴４個（１～４）それに新住居北側壁際にピット１個（６）と旧住居北西コーナーに土壙を１個（７）の計７個を確認することができた。

［ピットの深さ］　１―48cm　２―39cm　３―30cm　４―32cm　５―12cm　６―７cm　７―18cm

［周溝］　旧住居周溝は幅20cm深さ５cm以内、新住居周溝は幅30cm深さ５cm以内となっている。断面形は、旧周溝は「U」字状、新周溝はややV字状になっている。住居壁と周溝は接している。

［炉・カマド・煙道］　カマドは、住居北壁に構築されていて煙道部、焚口部が確認されている。焚口部は最大幅80cm焚口部内幅45cm長さ70cmである。住居壁と焚口部のつけね底面に焼けた丸石と土器を確認できた。

［貯蔵穴］　なし。



B区　第8号住居　東西セクション（A－A′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR3/2)	シ　ル　ト	微礫粒を含む。

B区　第8号住居　東西セクション（C－C′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR2/3)	シ　ル　ト	微礫粒を念む。
2	褐　色(10YR11/6)	〃	微礫粒を含む。しまりあり。
3	暗　褐　色(10YR3/3)	〃	

C区　第9号住居跡

［重複］　9′号住居と重複関係にある。9号住居の壁を掘り込んでいるところから住居より新しい。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　9号住居、9′号住居共に隅丸方形と推測される。9号住居の半分（北東側）と9′号住居の東側が残存していない。

［竪穴層位］　住居内堆積土は5層からなる。堆積状況からみて全て自然堆積土である。

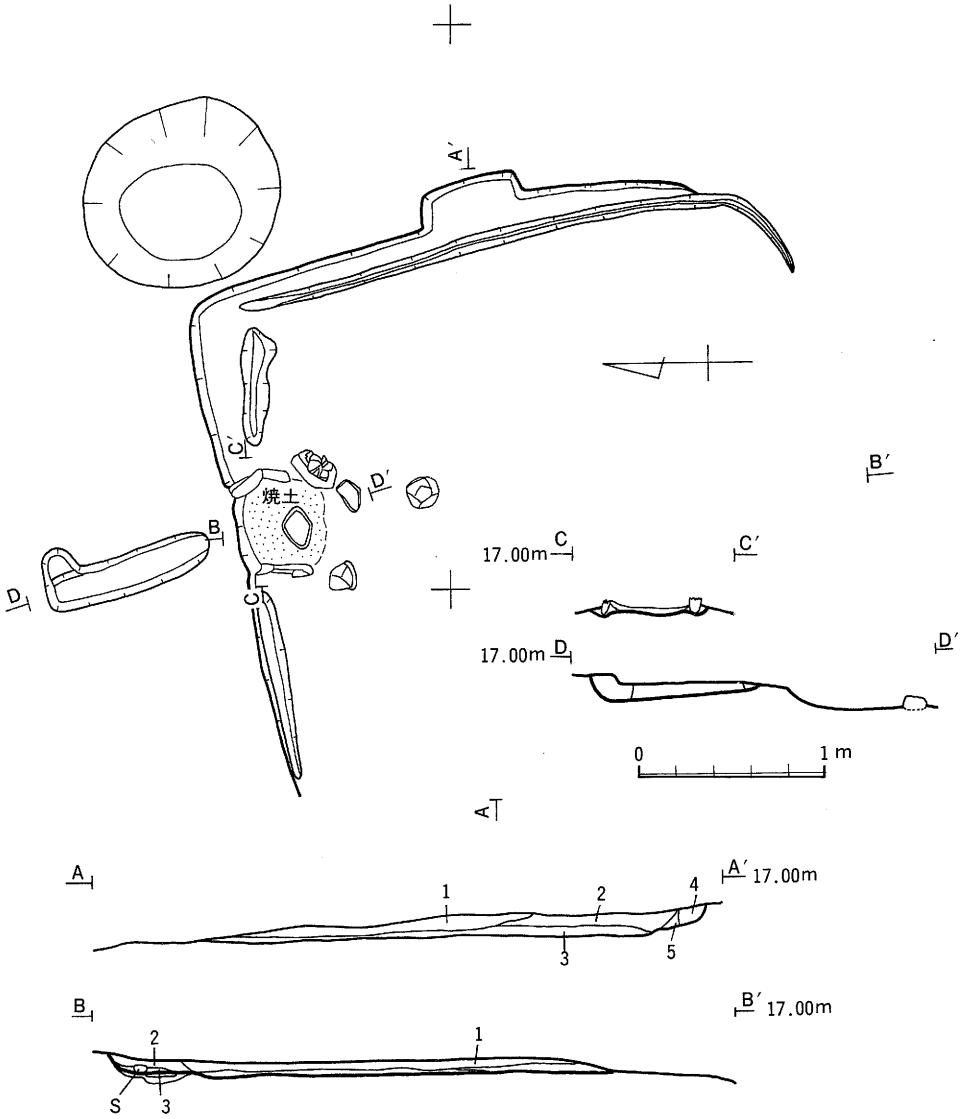
［壁の状況］　地山を壁としている。壁は東側より北側の方が保存状態が良い。壁高は保存状態の良い北側で最高14cmある。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。焚口部から土器、焼石が出土している。

［柱穴］　住居北東コーナー外側に土壙1.1m×1.0mが確認できる。

［ピットの深さ］　1—54cm

［周溝］　カマド焚口部を除き、北側に周溝が確認されている。



C区　第９号住居　東西・南北セクション（A－A′・B－B′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第１層	黒　褐　色(10YR2/2)	シ　ル　ト	焼土粒・細かい炭化物を含む。しまりなし。
2	黒　褐　色(10YR2/3)	シ　ル　ト	焼地粒・細かい炭化物を含む。しまりなし。
3	黒　褐　色(10YR2/3)	シ　ル　ト	焼土粒を多く含む。
4	黒　褐　色(10YR2/2)	シ　ル　ト	焼土粒細かい炭化物を含む。
5	暗　褐　色(10YR3/3)		地山細粒を含む。

C区　第９号住居　カマド東北セクション（D－D′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第１層	黒　褐　色(10YR2/3)	シ　ル　ト	細礫を含む。

C区　第９号住居　カマド東西セクション（C－C′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第１層	黒　褐　色(10YR2/2)	シ　ル　ト	焼土粒・ススを含む。ボサボサしている。
2	黒　褐　色(10YR2/2)	シ　ル　ト	焼土粒・炭化物を含む。
3	黒　褐　色(10YR2/2)	シ　ル　ト	焼土粒を多く含む。

［炉・カマド・煙道］　とぎれているが煙出部、煙道部、焚口部が確認されているが保存状態は決して良くない。煙出部、煙道部の壁高は２～６cmである。焚口部には焼石２個と土器片３ヶ所が出土している。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　住居脇から表採で須恵器の坏（静止ヘラ切り）が出土しているが住居との関連はわからない。ちなみに年代は９世紀頃であろう。

［出入口・周囲状況］　住居東壁中央部に20×60cmの張り出しが確認されているがこれは、出入口になるかもしれない。

C区　第10号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　増改築は２度行われている。新旧関係はカマド・周溝共に不明である。

［平面形・方向］　残存する住居跡は方形である。カマドは３つとも北に延びている。

［竪穴層位］　住居内堆積土は22層からなる。堆積状況から推測して全て自然堆積土である。

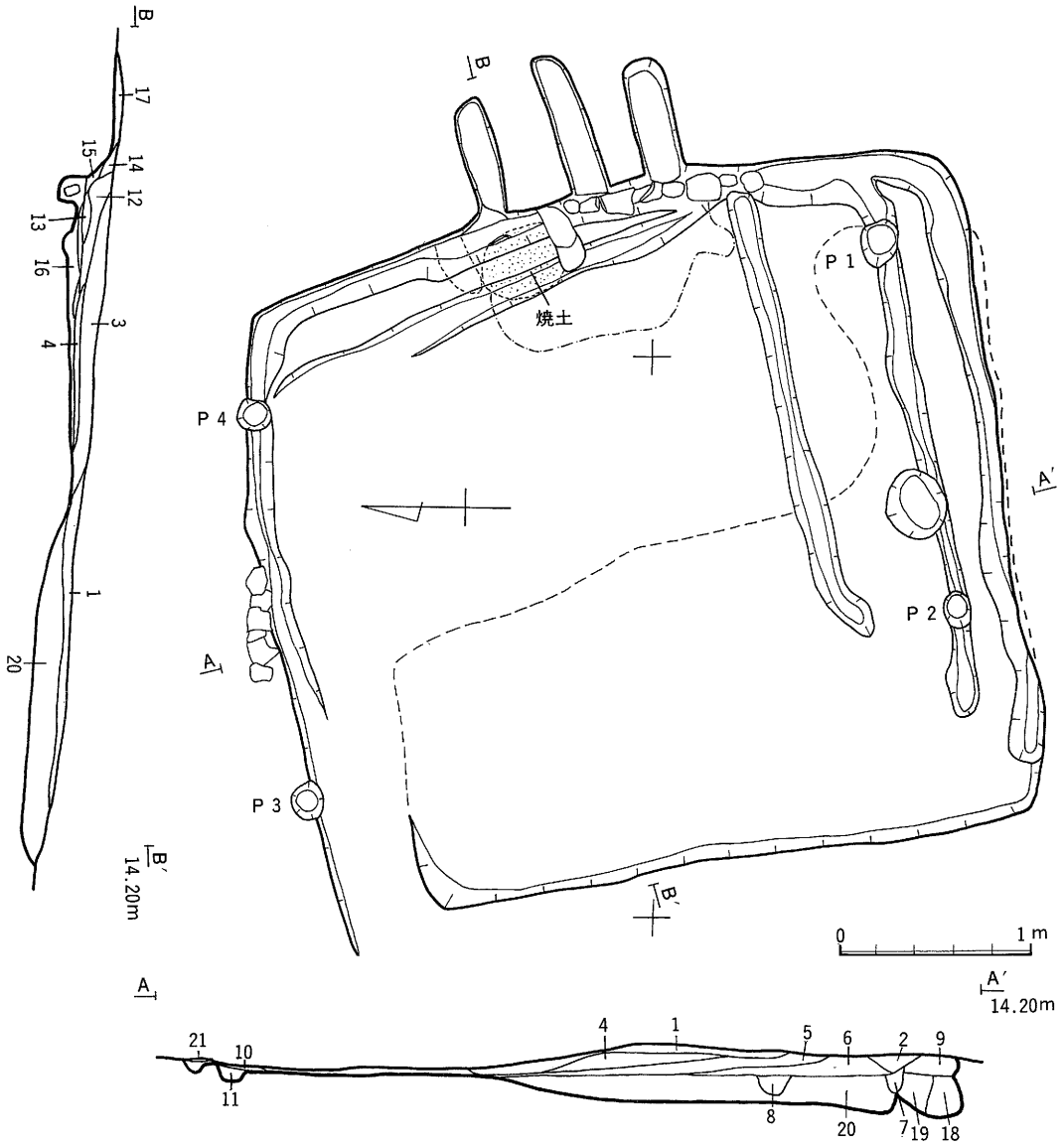
［壁の状況］　地山を壁としている。壁は全体的に残存しているが、一部南側において壁上端の内側にくい込んでいる。壁の保存状態は悪く、壁高は最大で20cmしかない。壁は西側を除き急である。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。貼床はきれいな地山土であり、多いところで２枚ある。（したがって使用面は３つある。）北側壁の中央部に一部壁を切って石を５個程検出した。

［柱穴］　ピットと認められるのは５個ある。第１周溝を切って３個（１、２、５）と北側の住居壁を切って２個（３、４）である。そのうち柱穴と考えられるのは１、２、４、５の計４個である。床面より土師器のカメが２個体分出土した。ただし、どの周溝に対する床面かは不明である。

「ピットの深さ」　１－31cm　２－12cm　３－12cm　４－32cm　５－10cm

「周溝」　増改築が行われたために、周溝は南側において３本と東側に２本、それに北側に１本確



C区　第10号住居　南北セクション（A－A′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	表土
2	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	撹乱層（地山粒を少量含みボサボサしている）
4	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	地山細粒・炭化物を含む。
5	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	炭化物を多量に含む。
6	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	地山細粒・炭化物を含む。
7	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	地山細粒をわずかに含む。周溝堆積土。
8	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	地山礫を含む。旧住居周溝堆積土。
9	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	地山細粒をわずかに含む。旧住居床面堆積土。
10	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	〃　　〃
11	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	地山細粒・炭化物をわずかに含む。
18	黒　褐　色(10YR3/4)		地山土・黒色土を多量に含む。周溝堆積土。
19	暗　褐　色(10YR3/3)		地山土を多量に含む。周溝堆積土。
20	暗　褐　色(10YR3/4)		地山土を多量に含む。
21	褐　　色(10YR3/4)		地山土を多量に含む。周溝堆積土。

C区　第10号住居　東西セクション（B－B′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	表土
3	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	地山土をブロック状に少量含む。
4	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	地山粒わずかに含む。木炭わずかに混入。
12	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	
13	暗 赤 褐 色(5YR3/6)	シ　ル　ト	ブロック状の地山土と焼土を多量に含む。
14	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	焼土を含む。
15	暗 赤 褐 色(10YR3/3)	シ　ル　ト	13層と同じだが焼土を含まない。
16	黒　褐　色(5YR3/6)	シ　ル　ト	粘性強い炭化物を含む。
17	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	地山細粒・焼土を含む。煙道堆積土。
20	暗　褐　色(10YR3/4)		地山土を多量に含む。

認することができる。南側において一部、周溝が壁上端にくい込んでいる。周溝の保存状態は悪く、壁高は最大で15cmである。

「炉・カマド・煙道」　住居東壁の中央部付近に3個のカマド（煙道）を確認することができる。大きさは北側より20×65cm・20×75cm・20×60cmである。一番北のカマドを除き、焚口部から石が多数出土している。

「貯蔵穴」　なし。

「年代決定」　出土遺物の器形から推測して9世紀前半であろう。床面より2個体分の土師器の甕が出土しているが、どの周溝に対する床面かは不明である。

「出入口・周囲状況」　なし。

C区　第11号住居跡

[重複]　なし。

[増改築]　住居東側壁より内側に30～70cm入ったところに旧住居周溝を確認することができる。

[平面形・方向]　残存する住居跡の状況から推測して東西4.6m前後×南北約43.5mの隅丸方形である。

[竪穴層位]　住居内堆積土は12層からなる。堆積状況から推測して全て自然堆積土である。

[壁の状況]　地山を壁としている。壁は住居跡の東側で最も保存状態が良いが西側にいくほど残りが悪く南西コーナー付近で消滅してしまう。壁高は最も保存の良い状態で最大44cmである。

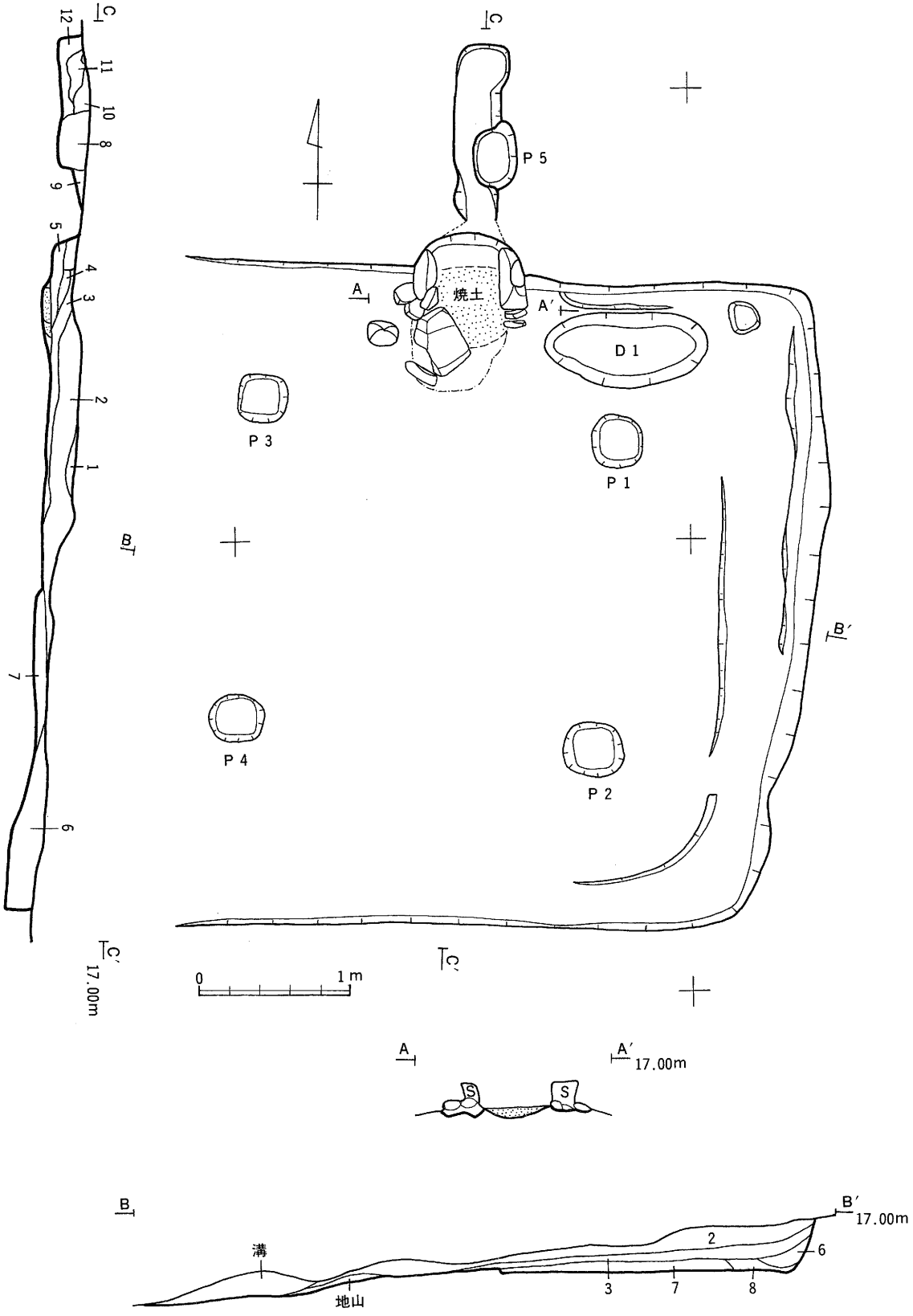
[床面]　床面は、ほぼ平坦である。

[柱穴]　ピットとして認められるのは住居内に4個（1～4）カマド煙道部に1個（5）の計5個である。そのうち柱穴と認められるのは住居内の4個である。また焚口部と住居北東コーナーの間に土壙を1個（D1）を確認することができる。

[ピットの深さ]　1－22cm　2－33cm　3－15cm　4－23cm　5－22cm　D1－12cm

[周溝]　住居北東コーナーから住居東壁中央部にかけてと第1土壙と住居北壁の間に周溝を確認することができる。

[炉・カマド・煙道]　住居北側中央部より煙出部、煙道部、焚口部が確認されている。焚口部を囲むように石が10個程組んであり、一つを除き焼けている。焚口部の底面（床面）は焼けており、そのてまえに炭化物が散在している。


C
C′
12
11
10
8
9
5
4
3
2
1
7
6
17.00m
P 5
A
焼土
A′
D 1
P 3
P 1
B
B′
P 4
P 2
0
1 m
S
S
溝
地山
2
6
3
7
8
17.00m

C区　第11号住居　南北セクション（C－C′）

層位	土色	土性	備考
第1層	暗褐色(10YR3/4)	シルト	ボサボサしてしまりがない。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・焼石粒・焼土粒を混入している。しまりあり。
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物・焼石粒・焼土粒を混入している。若干粘性を帯びる。
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土粒を混入している。しまりあり。
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土粒多量に混入している。しまりあり。
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物・微小礫を混入している。
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山
8	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	微礫黒褐色(10YR2/3))土が混入している。
9	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	火により赤変している。しまりあり。
10	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
11	黒褐色(10YR3/3)	シルト	微礫混入している。しまりあり。
12	黒褐色(10YR2/2)	シルト	スス焼土粒混入している。ボサボサしている。しまりがない。

※1～6層住居跡内堆積土、9～12層カマド煙道・煙出堆積土

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　遺物が出土しておらず不明。

［出入口・周囲状況］　なし。

C区　第12号住居跡

［重複］　南西コーナー付近を第13号住居に切られており、第13号住居より古い。

［平面形］　西側が欠損しているが、残存している壁の状況から方形を呈すると思われる。東壁3.6m、北壁1.7m（残存）、南壁2.8m（残存）。

［竪穴層位］　住居内堆積は8層からなり、縄文時代遺物包含層（9・10層）及び地山（11層）を掘り込んでいる。

［壁の状況］　西側が欠損しており、他の壁も残りが悪い。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。

［柱穴］　カマドの両脇に1つずつ計2個みられる。

［ピットの深さ］　1－7cm　2－9cm

［周溝］　カマドの両脇から壁にそって周溝がめぐっている。深さは3cm～15cmで西側にいくにしたがって深くなる。

［炉・カマド・煙道］　西壁の中央より南側に焚口部と煙出しがある。焚口部は壁を掘り込んでおり、住居外にとび出す形になっているので煙道はなく、焚口からすぐに煙出しになると思われる。

［貯蔵穴］　南東コーナーに106cm×80cm、深さ25cmの土壙があるが、カマドのすぐ前にあるので同時期に使用したとは考えられない。

［年代決定］　遺物が出土していないので不明である。

［出入口・周囲状況］　なし。

C区　第13号住居跡

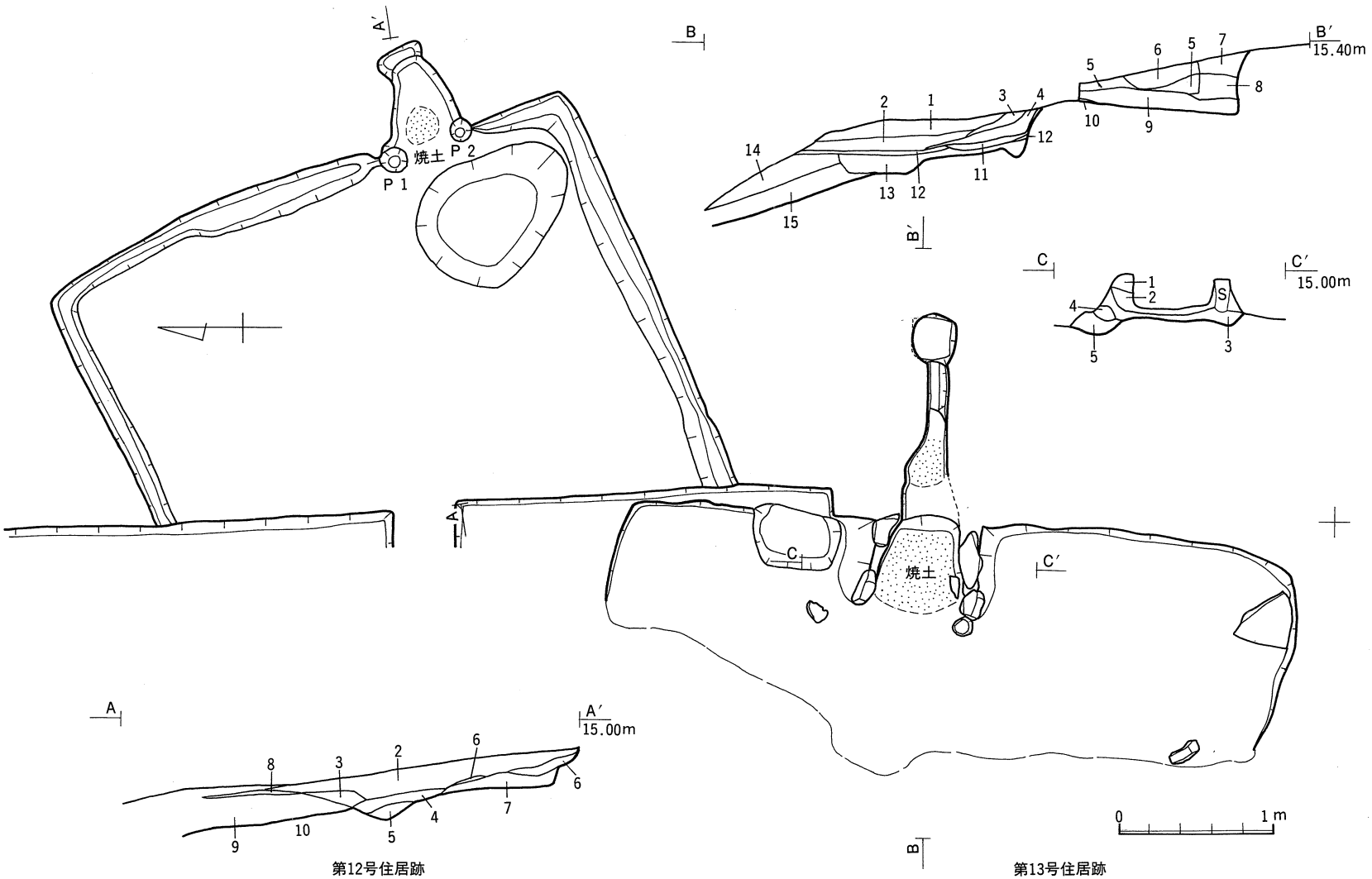
［重複］　第12号住居の南西コーナー付近を切っているので、第13号住居が新しい。

［平面形］　北東コーナーと南東コーナーの東側のみが残存している。二つのコーナーからみて隅丸方形を呈すと思われる。

［竪穴層位］　住居内堆積は13層からなる。縄文時代遺物包含層（14・15層）を掘り込んでいる。
［壁の状況］　東壁以外は80cm～１m位しか残存しておらず、壁高も最大で24cmである。
［床面］　床面は、ほぼ平坦である。貼床である。
［柱穴］　なし。
［周溝］　なし。
［炉・カマド・煙道］　カマドは、東壁の中央よりやや北側にある。焚口部は凝灰岩を並べ袖としている。煙道は壁より東側に約1.3mのびている。
［貯蔵穴］　カマド袖の左脇に長さ58cm×40cm、深さ34cmの土壙がある。
［年代決定］　年代決定するような遺物がでなかった。
［出入口・周囲状況］　なし。

C区　第14号住居跡

［重複］　なし。
［増改築］　詳細は何とも言えないが、最低３回は溝の改築を行っている。
［平面形・方向］　東西4.7m×南北４m以上（自然傾斜のため西側は残っていない）の隅丸方形である。
［竪穴層位］　住居内堆積土は６層からなる。堆積状況からみてすべて自然堆積土である。
［壁の状況］　地山を壁としている。最も保存のよい東側壁で、壁高は最大で63cm、最小で52cmである。
［床面］　床面は、ほぼ平坦である。床面から土師器甕（口縁部を欠く）と須恵器高台付坏が出土した。
［柱穴］　ピットは住居内より11個（１～11）と住居外溝より１個の計12個が確認された。その中で柱穴と考えられるのは、住居内溝中最も外側の溝に入り込んでいるピット６個（１～６）と南西部にあるピット（７）の計７個である。柱穴は全てそれぞれの向壁から同一距離にあるが、柱穴間の距離は一定ではない。第８ピットは住居壁を切って作られている。第10ピットは焼土・炭化物などを含んでいた。ピットは第８、11ピットを除き溝を切るように作られている。
［ピットの深さ］　１―27cm　２―13cm　３―20cm　４―18cm　５―34cm　６―９cm　７―７cm　８―15cm　９―17cm　10―18cm　11―９cm　12―24cm
［周溝］　住居の東側外に外溝がめぐらされている。新旧関係ははっきりしないが増改築をしたらしく、住居内に東西南北に溝がめぐらされている。
［炉・カマド・煙道］　住居東側南東コーナーよりの住居外溝との間（第１カマド）と、住居南壁西より（第２カマド）の２個が確認された。第１カマドは煙道部、煙出部が確認されているが、焚口部は周溝によって切られている。遺物は出土していない。第２カマドは焚口部しか確認されていないが焼石を出土している。



第13号住居跡

第12号住居跡

C区　第12号住居　東西セクション（A－A′）

層位	土色	土性	備考
第1層	褐色(10YR4/4)	シルト	表土
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	褐色の砂質シルト・炭化物を含む。
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土・炭化物を含む。
5	褐色(10YR4/4)	シルト	黄褐色の砂質シルトをブロック状に含む。
6	黄褐色(10YR5/8)	ファイサンド	灰状のファイサンドの層
7	暗褐色(10YR4/4)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む。
8	赤褐色(2.5YR3/3)	粗砂	風化凝灰質細礫岩を含む。
9	黒褐色(10YR3/3)	シルト	粘性強い炭化物を少量含む。縄文包含層
10	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山

※2～8層　12住堆積土　　3～5層　12住貯蔵穴状ピット堆積土　　6～8層　12住カマド堆積土

C区　第13号住居　東西セクション（B－B′）

層位	土色	土性	備考
第1層	暗褐色(10YR3/4)	シルト	凝灰質の細粒を含む。
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土粒・炭化粒を少量含む。
3	褐色(10YR4/4)	シルト	黄褐色(10YR5/8)の地山をブロック状に含む。
4	褐色(10YR4/4)	シルト	赤褐色(25YR4/6)の焼土をブロック状に含む。
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土粒を少量含む。
6	褐色(10YR4/4)	シルト	
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	黒色(10YR2/1)のススを多量に含む。
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	黒色(10YR2/1)のススを少量含む。
9	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土粒を少量と黒色(10YR2/1)のススを多量に含む。
10	暗赤褐色(2.5YR3/3)	焼土	煙道底面が赤くなった層。
11	赤褐色(2.5YR4/6)	焼土	カマド底面が赤くなった層
12	暗褐色(10YR3/3)		黄褐色(10YR5/8)の地山をブロック状に多量に含む。貼床
13	暗褐色(10YR3/3)		黄褐色(10YR5/8)の地山をブロック状に少量含む。
14	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土粒を含む。
15	褐色(10YR4/4)	シルト	粒土粒を含む。 } 縄文の包含層

C区　第13号住居　カマドセクション（C－C′）

層位	土色	土性	備考
第1層	暗褐色(10YR3/3)	シルト	細礫・焼土粒黄褐色(10YR5/8)の粘土。
2	暗赤褐色(5YR3/6)	粘土質	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山土をブロック状に含む。
4	黄褐色(10YR3/2) 黄褐色(10YR5/8)		黒褐色土と黄褐色の粘土との互層。
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　第10ピットより土師器・甕（底部を欠く）が出土している。これは9世紀頃であろう。また床面から土師器・甕（口縁部を欠く）と須恵器・高台付坏が出土し、2層から土師器内黒坏が2個出土した。これらの土器は第10ピット出土の土師器より少し年代は下がるであろう。

C区　第15号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形］　南側が欠損しているが、残存部をみると東西3.6m×南北2.6m以上の方形を呈する。

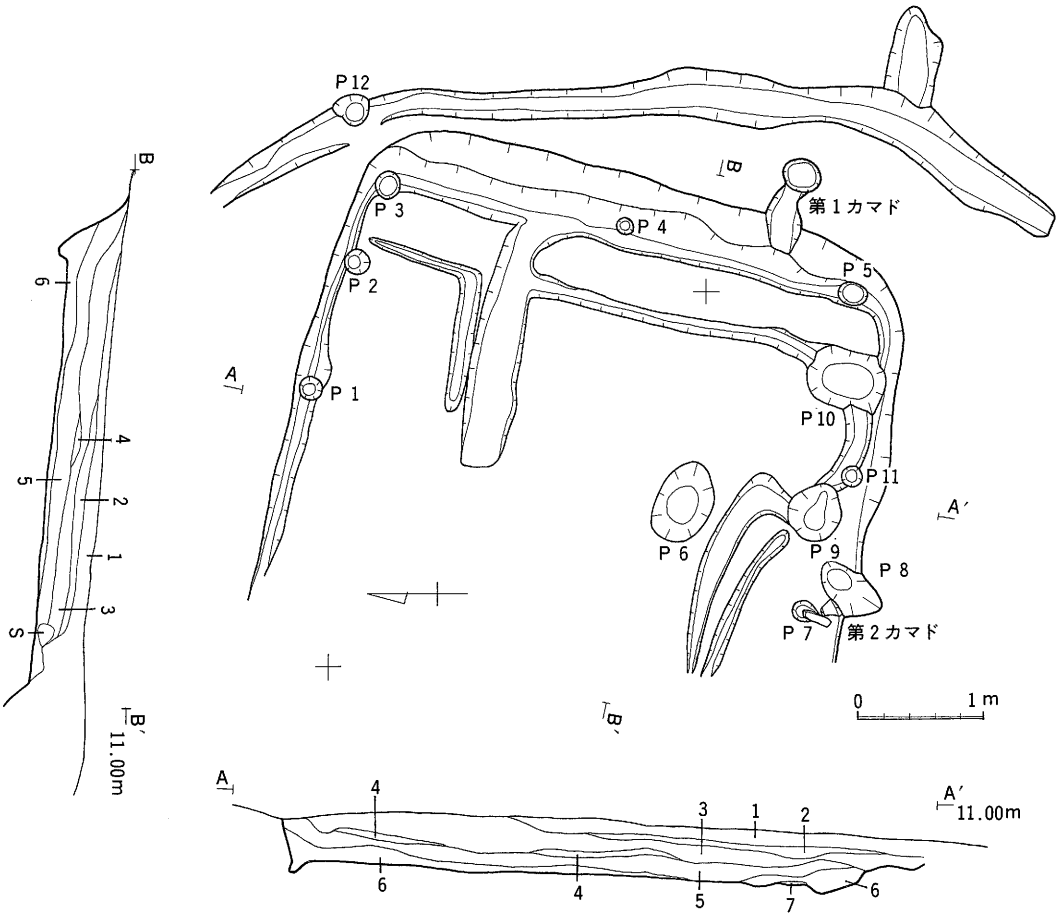
［竪穴層位］　住居内堆積は2層からなり、一部貼床していると思われる。

［壁の状況］　東西の壁の一部と北壁が残存しているが、壁面は凹凸があり壁高も最大で15cmしかない。

［床面］　トレンチベルトがあり、床面の保存状態が悪い。地山を掘り込んでおり、一部貼床とみられる。

［柱穴］　なし。

［周溝］　なし。



C区　第14号住居　東西・南北セクション（A－A′・B－B′）

層位	土色	土性	備考
第1層	暗褐色(10YR3/3)	シルト	表土
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	しまりあり。
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	凝灰質細粒をごくわずかに含む。
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	凝灰質細粒・炭化物を含む。しまり強し。
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む。しまり強し。
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土・炭化物をごくわずかに含む。しまり強し。
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)		よごれた地山

［炉・カマド・煙道］　東壁の北東コーナー近くにカマド焚口部があり焼土・焼石・炭化物がみられる。煙道・煙だしは確認されなかった。

［貯蔵穴］　なし。

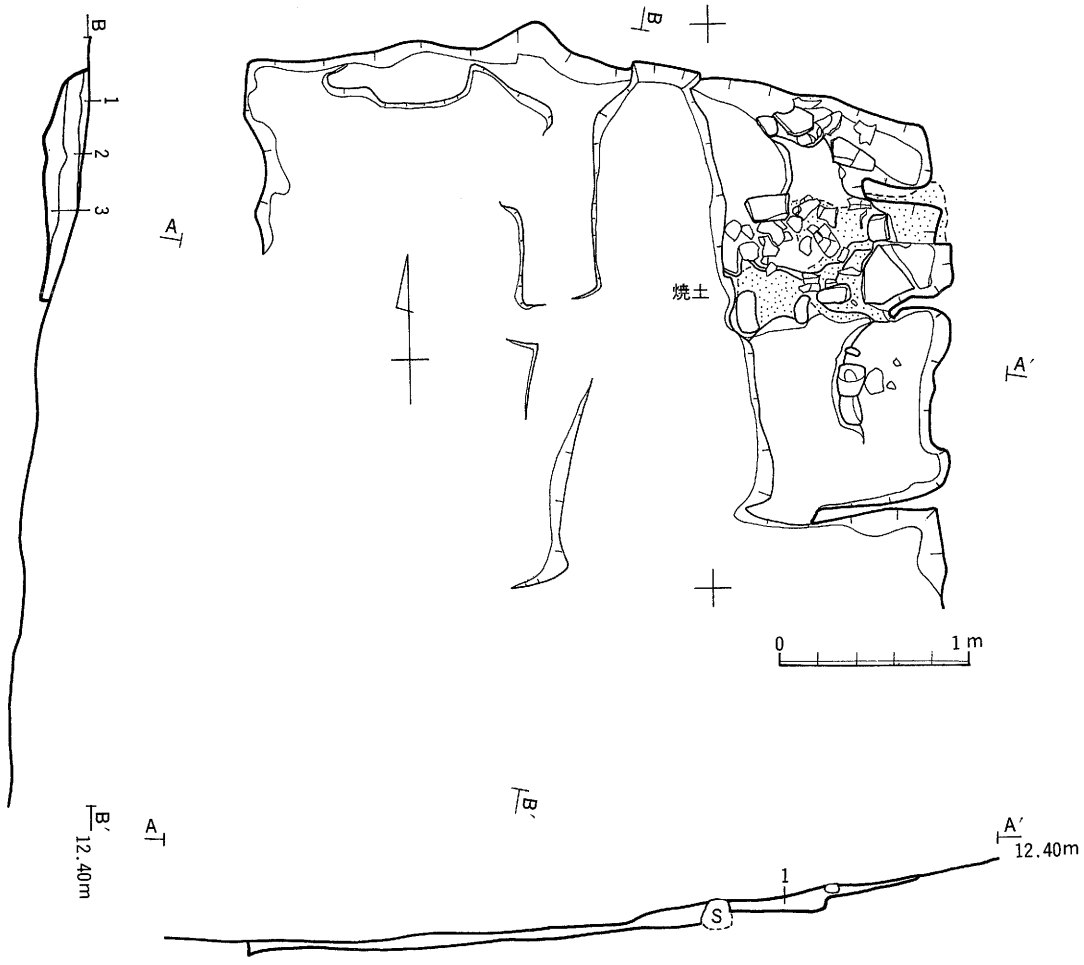
［年代決定］　不明。

［出入口・周囲状況］　なし。

C区　第16号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。



C区　第15号住居　東西・南北セクション（A－A′・B－B′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR2/3)	シ　ル　ト	粘性はない。1～2㎜の砂粒を地山（凝灰質）の細粒を5％程含む。
2	褐　色(10YR4/4)		地山（凝灰質）の礫を10%程と炭化物･焼土をわずかに含む。
3	暗　褐　色(10YR3/4)		地山（凝灰質）の礫を5％程と石英質の砂粒を少量含む。生活面。
4			地山

［平面形・方向］　住居の西側と北東コーナーが消滅しているが、残存するする住居の状況から方形と推察される。

［竪穴層位］　住居内堆積土は8層からなる。堆積状況からみて自然堆積土と考えられる。

［壁の状況］　地山を壁としている。全体に保存状況が悪く、壁高も最大で北壁の19cmである。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。住居北のカマド焚口部底面及びその西側にて焼土が検出されている。住居中央より石が3個まとまって出土した。住居内より土師器・甕片2個体分と、土師器・蓋片が出土している。

［柱穴］　ピットと認められるのは、住居内に13個（1～13）と住居外北側の2個の計15個である。また、住居内より土壙2個（D1、2）と、溝状遺構2個（M1、2）が確認されている。その中で柱穴と考えられるのは第7・8ピットである。第1ピットと第2土壙は共に焼土を含んでいる。

［ピットの深さ］　1－6cm　2－6cm　3－2cm　4－4cm　5－8cm　6－20cm　7－24cm　8－15cm　9－15cm　10－5cm　11－17cm　12－7cm　13－18cm　14－30cm　15－18cm　D1－10cm　D2－26cm　M1－14cm　M2－29cm

［周溝］　なし。

［炉・カマド・煙道］　住居北側中央部から煙出部、煙道部、焚口部、袖が確認されている。焚口部は底面が焼けている。また煙道に向かって右袖の突端から焼石が出土している。カマド床面から6個体分の土師器の甕片が出土した。

［貯蔵穴］　確認できなかった。

C区　第17号住居跡

［重複］　住居の性格がはっきりしないため、重複関係はわからない。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　残存するする住居の状況から、東西5m×南北4m以上の隅丸方形である。

［竪穴層位］　住居内堆積土は1層である。

［壁の状況］　地山を壁としており、北側壁の保存状況がよいが東西側の壁は南側に行くに従って残存しなくなる。壁高は保存のよい北側で最大54cm、最小43cmである。

［床面］　床面は、ところどころ段差がついている。

［柱穴］　なし。

［周溝］　なし。

［炉・カマド・煙道］　西側中央部に55×35cmの煙道部が確認されている。煙道部底部は焼けており、焼石も2個出土している。

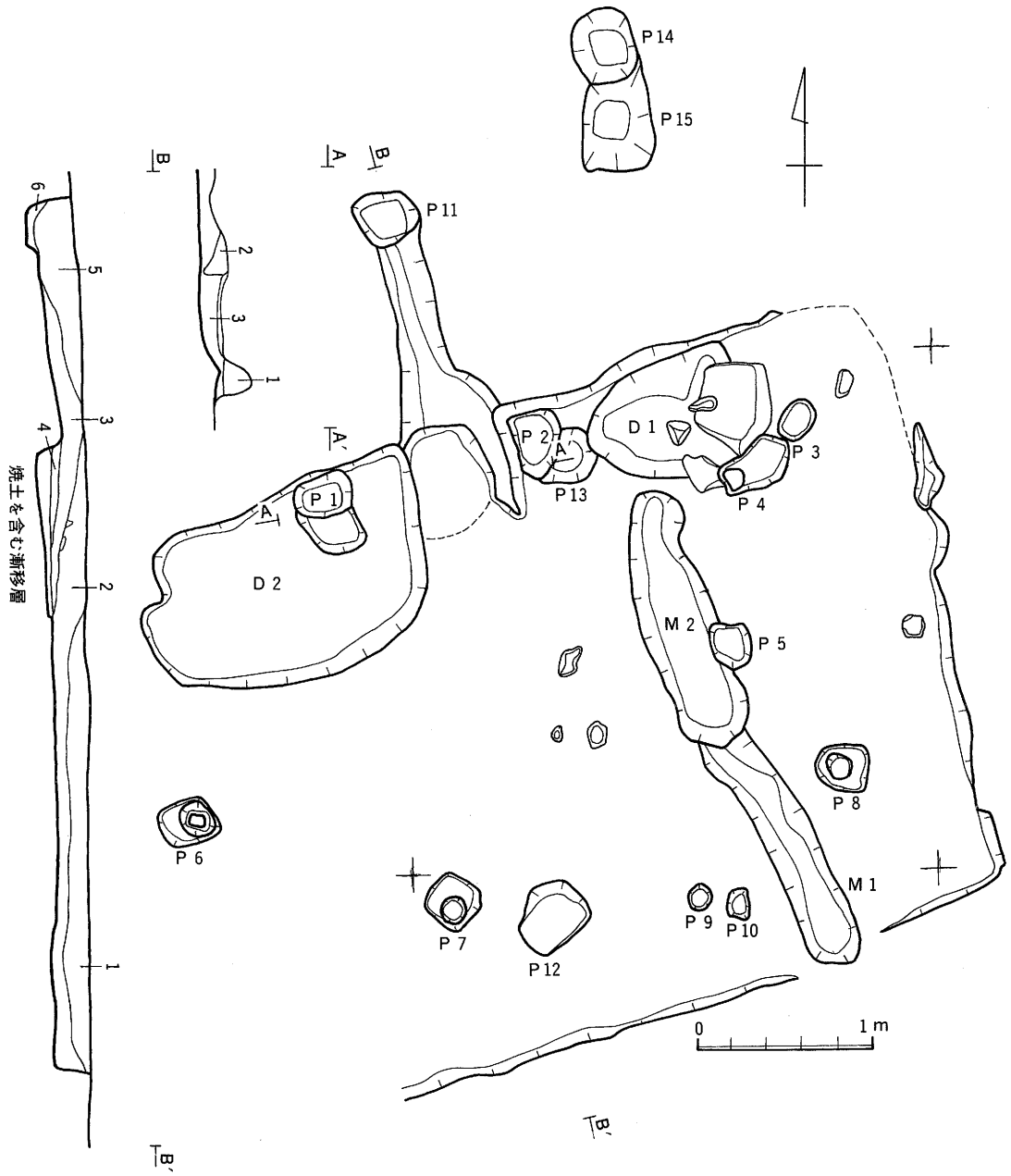
［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　遺物が出土していないため、不明である。

［出入口・周囲状況］　なし。

C区　第18号住居跡

［重複］　なし。



C区　第16号住居　カマド東西セクション（A－A′）

層位	土色	土性	備考
第1層	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土・地山粒を多量に含む。
2	暗褐色(10YR3/3)	〃	焼土・地山粒を少量含む。
3	褐色(10YR4/4)	〃	凝灰質の細粒を多量に含む。

C区　第16号住居　事北セクション（B－B′）

層位	土色	土性	備考
第1層	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土・地山細粒を少量含む。（上記2層と同じ）
2	〃 (10YR2/2)	〃	焼土・地山細粒を1層より多く含む。（上記3層と同じ）
3	暗褐色(7.5YR3/3)	〃	細かい炭化物を少量と焼土粒を多量に含む。
4	〃 (7.5YR3/4)	〃	礫をごくわずかと焼土を多量に含む。
5	暗褐色(10YR3/3)	〃	ススと思われるものを含む。
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	ス粒を少量含む。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　残存する住居の状況から4.5m×4.5mの隅丸方形と思われる。

［竪穴層位］　堆積層は3層からなる。

［壁の状況］　地山を壁としている。南・北壁では深さ45cm。

［床面］　床面は平坦である。カマド焚口部及び床面下に焼土が見られた。

［柱穴］　ピットと認められるのは5個ある。住居跡に伴う柱穴と思われるものが竪穴外に3個確認された。

［ピットの深さ］　1－7cm　2－10cm　3－8cm　4－11cm　5－6cm　6－10cm　7－11cm　8－20cm

［周溝］　周溝は、斜めに掘り込まれている。

［炉・カマド・煙道］　北側にカマド及び煙道が確認された。カマド焚口部は、凝灰岩質の切石で構築されている。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　不明。

［出入口・周囲状況］　なし。

C区　第21号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　東西6.4m×南北2.4m（残存部）の隅丸方形である。

［竪穴層位］　住居内堆積土は5層からなる。堆積状況から推測して全て自然堆積土である。

［壁の状況］　地山を壁としている。壁は住居跡の北側で最も保存状態が良いが南側にいく程残りが悪く、北東コーナー、北西コーナーから約1m南で消滅してしまう。壁高は最も保存の良い北側で最大68mである。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。

［柱穴］　ピットは全部で17個認められる。

［周溝］　残存する壁に沿ってみられる。

［炉・カマド・煙道］　なし。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　不明。

［出入口・周囲状況］　なし。

C区　第22号住居

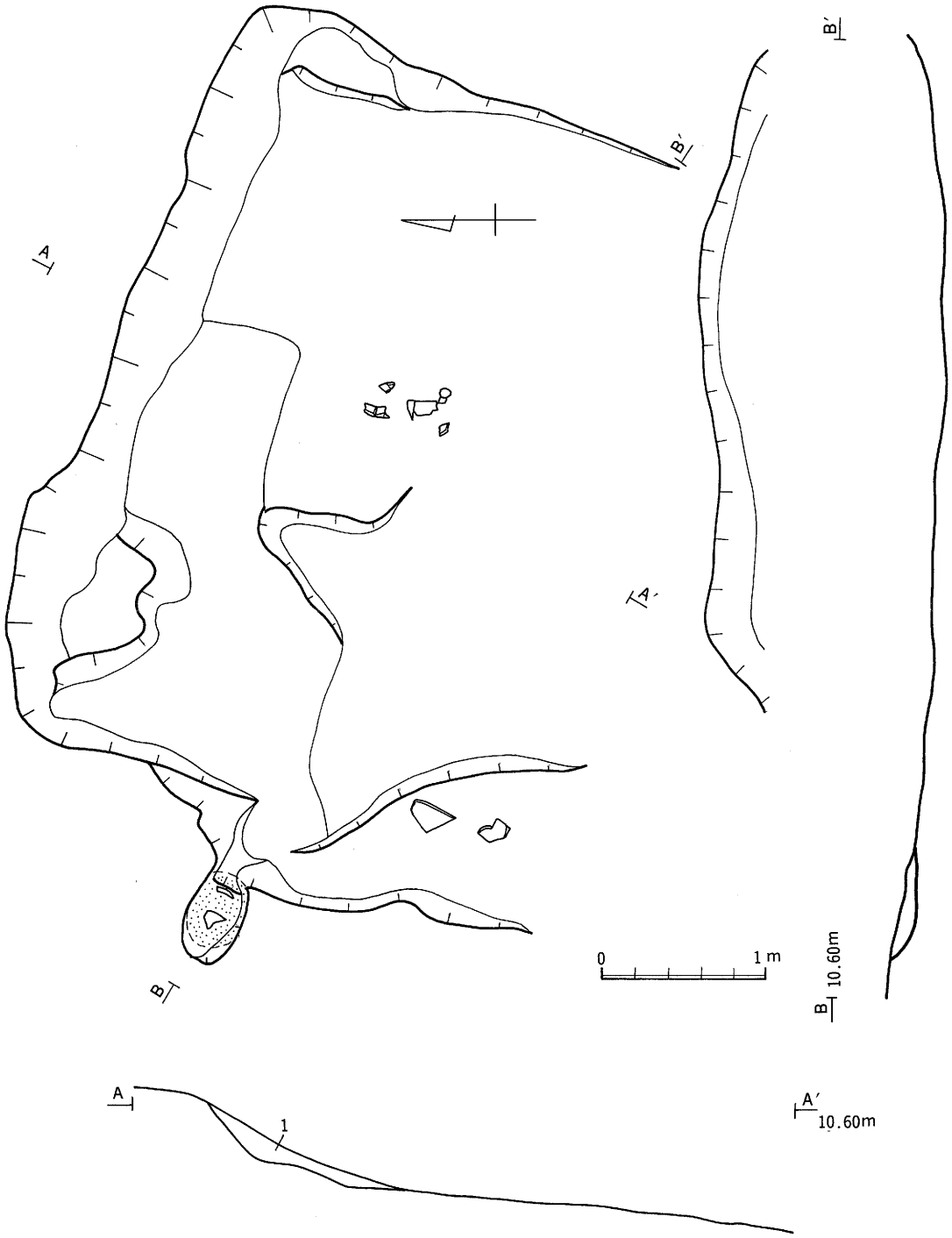
［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　残存する壁は北側のみである。一辺3.5mの隅丸方形と思われる。

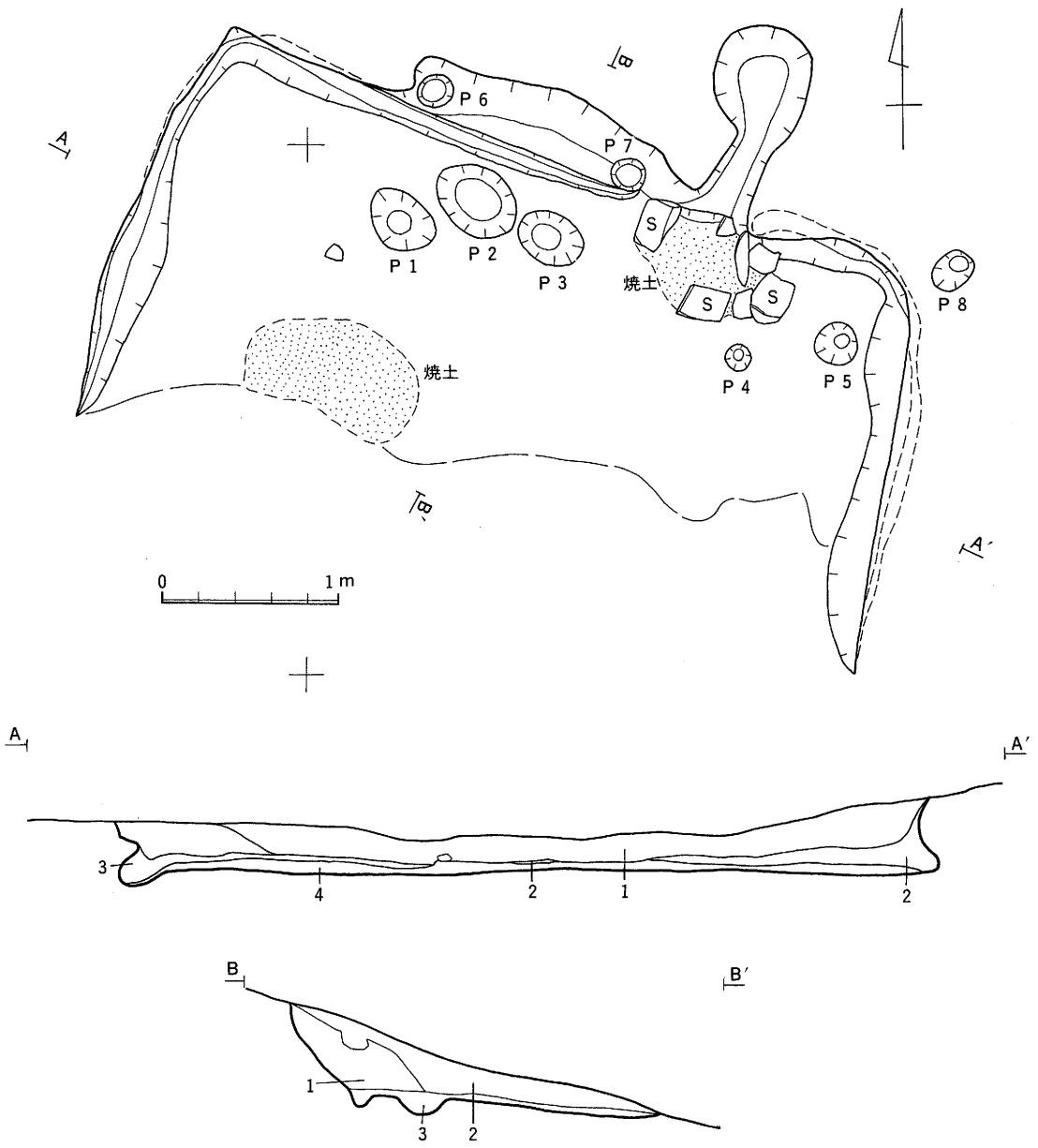
［竪穴層位］　堆積層は2層である。

［壁の状況］　地山を壁としている。



C区　第17号住居　東西・南北セクション（A－A′・B－B′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR3/2)	シ　ル　ト	凝灰質の細礫を7～10%程と細かい炭化物，地山粒をごくわずか含む。



C区　第18住居　東西・南北セクション（A－A′・B－B′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	褐　　色(10YR4/4)	シ　ル　ト	地山に混入している凝灰岩粒を10%程含むが第2層より粒子が大きい炭化物も含む。粘性なし。
2	黒　褐　色(10YR2/3)	シ　ル　ト	地山に混入している凝灰岩粒を10%程とわずかの岩化物を含む。
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)		東側間溝を埋える形で砂が入り込んでいる。
4			地山

［床面］　床面は平坦である。

［ピット］　竪穴床面にピットはみられない。

［周溝］　なし。

［炉・カマド・煙道］　カマド・煙道は確認されなかったが、東コーナー床面に焼土が認められた。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　不明。

［出入口・周囲状況］　なし。

D区　第14住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方形］　東西4.4m×南北3.4m（残存部）。カマドは東側についている。

［竪穴層位］　住居内堆積土は7層からなる。堆積状況から推測して自然堆積土である。

［壁の状況］　地山を壁としている。壁は住居の北東コーナーで最も保存が良く、南東コーナー付近と北東コーナー付近でそれぞれ消滅してしまう。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。

［柱穴］　ピットと認められるのは7個である。住居床面に5個（1～5）と住居壁に2個（6，7）である。そのうち柱穴と考えられるのは1個（3）あるが、確認はできない。

［ピットの深さ］　1—29cm　2—3cm　3—19cm　4—24cm　5—17cm　6—36cm　7—15cm

［周溝］　カマド焚口部中央付近より西に1.6m×0.1mの溝を確認することができる。溝の深さは最大で10cmである。

［炉・カマド・煙道］　住居東側中央部より、煙だし・煙道・焚口が確認されている。焚口部に土器片と石、焼石を多量に含む。煙道部と煙だし部は離れている（煙道部は途中で消滅している。）

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　カマド内から7個体分の土器片が出土している。内訳は須恵器長頸壺1点、土師器坏（内黒）2点、土師器高台付坏（内黒）1点である。器形から推測すると、年代は9世紀前半から10世紀初頭にかけてであろう。

［出入口・周囲状況］　出入り口は確認できなかった。幅80cm前後の溝が、住居外南東部に確認することができる。

D区　第17号住居跡

［重複］　なし。

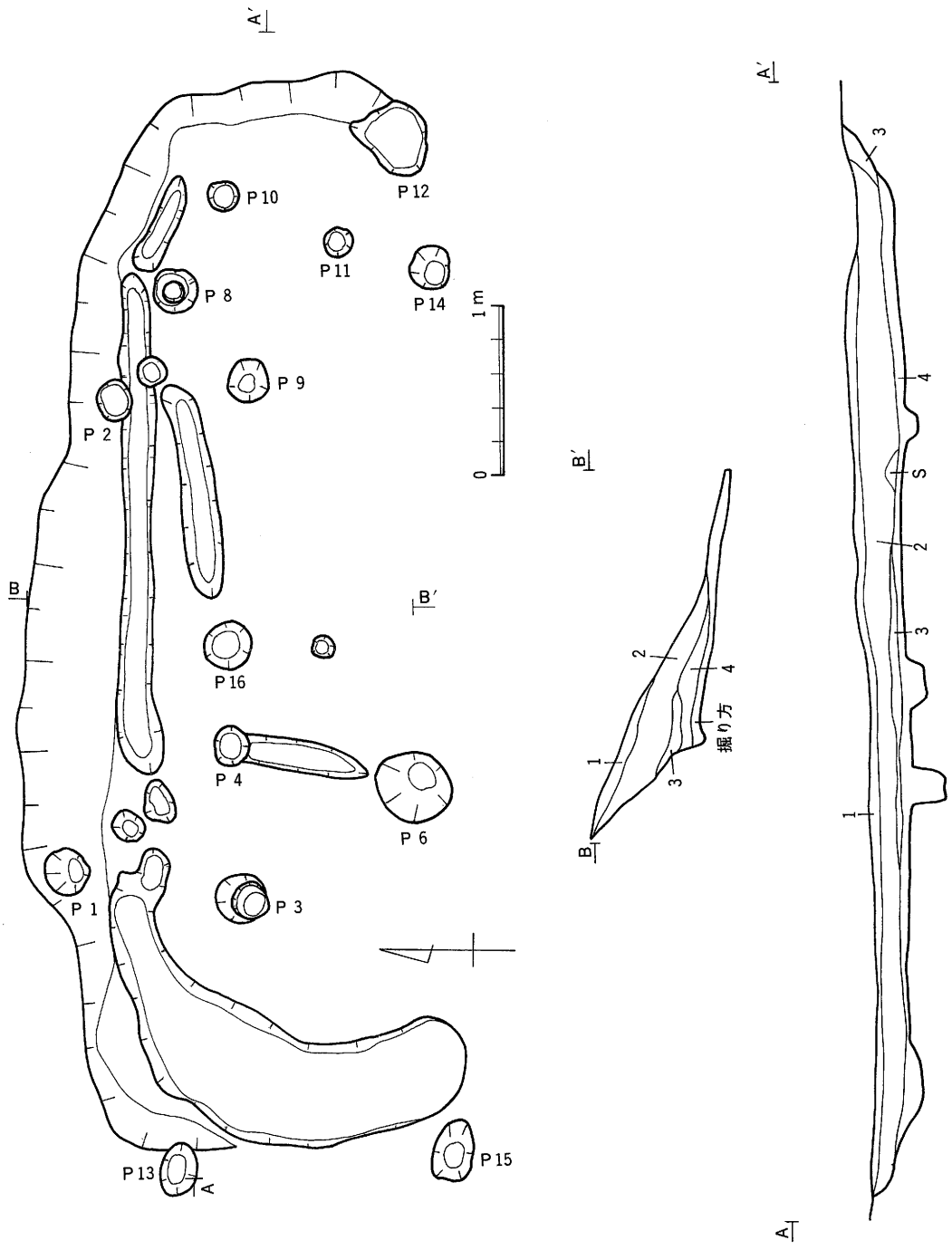
［増改築］　なし。

［平面形・方向］　2.55m×2.35mの隅丸方形である

［竪穴層位］　住居内堆積土は5層からなる。堆積状況からみて、全て自然堆積土である。

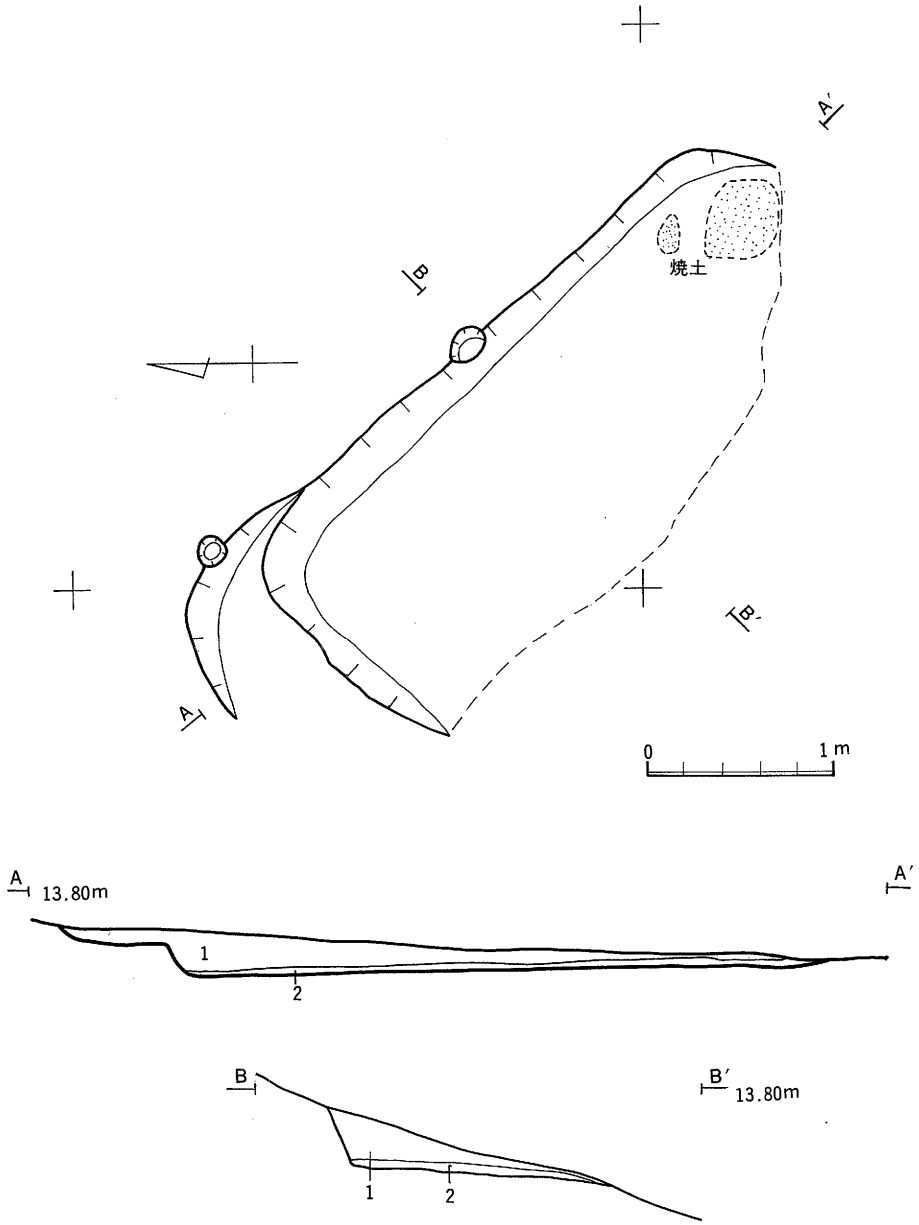
［壁の状況］　住居壁が完全に残っている。壁高は最大で48cm、最小で7cmである。

［床面］　床面は、ほぼ平坦である。住居南コーナー付近に25×30cmの炉跡と、そばに50×20cmの焼石が確認できた。



C区　第21号住居　東西・南北セクション（A—A′・B—B′）

層　位	土　　色	土　　性	備　　考
第1層	10YR(3/4)	シ　ル　ト	表土
2	10YR(2/3)	シ　ル　ト	凝灰質細粒を10%程含む。
3	10YR(4/4)	〃	地山土（にぶい黄橙色10YR6/4）をブロック状に含む。
4	10YR(2/3)	〃	炭化物をわずかに含む。
5	10YR(3/3)	シ　ル　ト	掘り方



C区　第22号住居　東西セクション（A－A′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR2/3)	シ　ル　ト	凝灰質の細粒を10%程とわずかの炭化物を含む。
2	暗　褐　色(10YR3/3)	〃	地山粒を多量に含む。

C区　第22号住居　南北セクション（B－B′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR2/3)	シ　ル　ト	凝灰質の細粒を10%程とわずかの炭化物を含む。
2	褐　色(10YR4/4)	〃	地山

［柱穴］　柱穴と考えられるのは、西コーナー付近の１個（１）だけで、あとは炉を囲むようにして２個のピットの計３個である。

［ピットの深さ］　１―24cm　２―18cm　３―５cm

［周溝］　周溝は北西壁の中央あたりからほく北壁をとおって東コーナーまでめぐらされている。周溝の幅は30～35cm、深さ20～50cmである。溝の断面形はU字状である。

［炉・カマド・煙道］　住居南コーナー付近に炉があり、炉の南北に（炉を囲むように）15×20と50×20cmの焼石を確認することができた。また南の石付近から東西にピット（３）がのび、それを炉の東のピット（２）によって切られている。（このピットは炉に何らかの形で関係しているかもしれない。）

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　住居床面より土師器の甕が出土したが年代を決定し得る遺物並びに出土状況ではなかった。

［出入口・周囲状況］　なし。

E区　第１号住居跡

［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　隅丸長方形。長い一辺の中央部からカマドが北東に延びている。4.5m×2.5mカマド部0.4m×1.0m東辺が高く西辺が低い。

［竪穴層位］　周溝を含め全部で31層を確認できた。堆積状況から見て自然堆積土と考えられる。

［壁の状況］　黒色および地山を壁としている。壁高は23～58cmである。南東隅付近の壁にピットが１個認められた。

［床面］　貼床の有無は不明。焚口部に一列に土師器片が散布している。

［柱穴］　柱穴と認められてるものは住居床面に７個（２、３、５、６、11、12、14）と壁際に１個（４）の計８個検出されている。その他６個のピットが検出されている。本住居跡に伴うと考えられるピットは確認できなかった。

［ピットの深さ］　１―15cm　２―15cm　３―17cm　４―11cm　５―25cm　６―23cm　７―７cm　８―13cm　９―５cm　10―18cm　11―11cm　12―９cm　13―11cm　14―８cm

［周溝］　壁の内側で北側と南東部付近に周溝がめぐっている。周溝はゆるやかに立ち上がる。

［炉・カマド・煙道］　カマドは煙道部、焚口部が確認されている。煙道部は最大巾54cm長さ１cmである。焚口部には約1.5cmにわたり土器が散在している。

E区　第２号住居跡

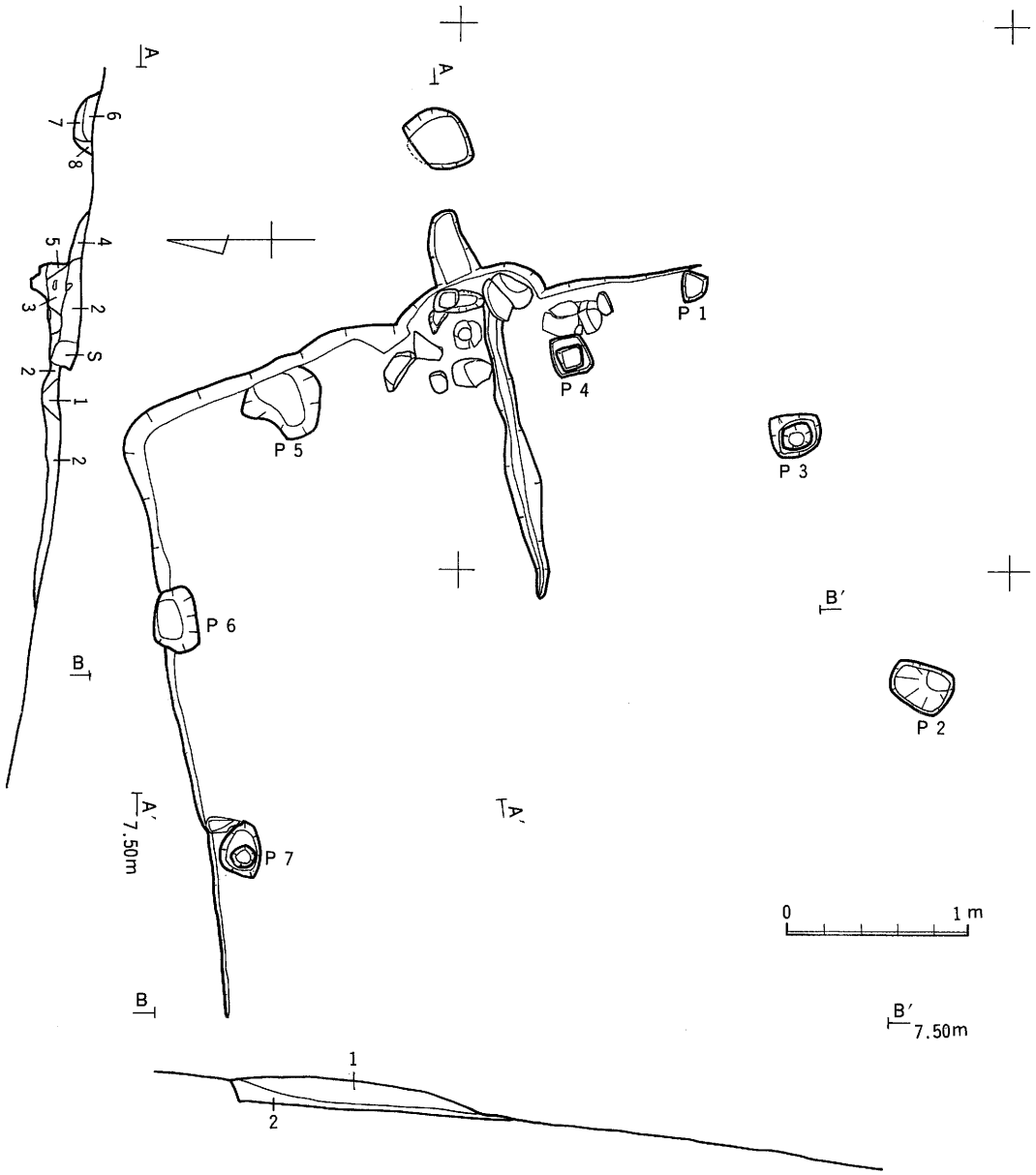
［重複］　なし。

［増改築］　なし。

［平面形・方向］　2.5m×2.0mの長方形である。

［竪穴層位］　周溝を含め16層が確認された。堆積状況は自然堆積である。

［壁の状況］　比較的保存状態がよく、地山を壁とし壁高は約40cmである。ほぼ垂直にたち上がる。



D区　第14号住居　東西セクション（A－A′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	黒　褐　色(10YR2/2)	シ　ル　ト	
2	暗　褐　色(10YR3/3)	〃	小礫粒を含む。
3	暗　褐　色(10YR3/4)	〃	焼土粒を含む。
4	暗　褐　色(10YR3/3)	〃	小礫粒を含む。
5	暗　褐　色(10YR3/4)	〃	3層にして小礫粒の混入多し。
6	暗　褐　色(10YR3/3)	〃	
7	褐　　色(10YR4/4)	〃	小礫を多く含む。
8	褐　　色(10YR4/6)	〃	〃・地山と同様の土を

D区　第14号住居　南北セクション（B－B′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	小硅粒・焼土粒を含む。
2	褐　　色(10YR4/4)	シ　ル　ト	小礫粒・炭化物を含む。1層に比して礫混入多し。

［床面］　床面は平坦である。壁ぎわに40cm大の石が３個みられるが性格は不明。

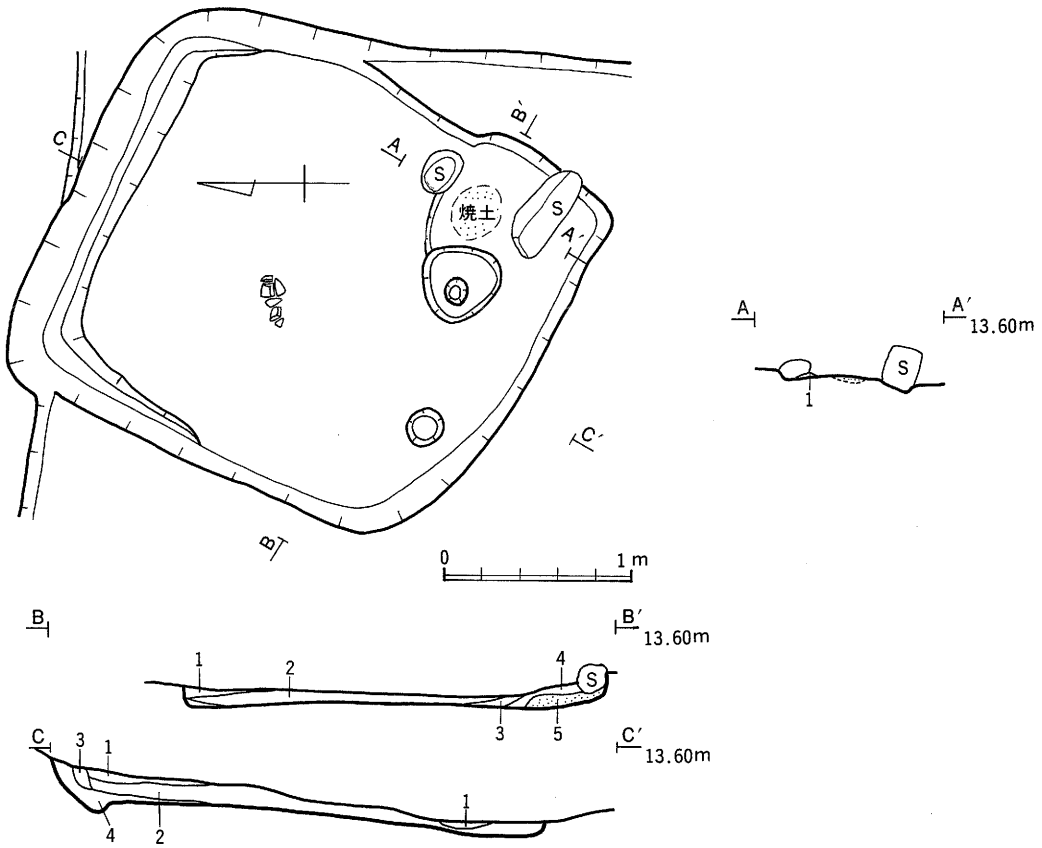
［柱穴］　住居跡に伴うと思われるピットは確認できなかった。

［周溝］　残存する壁沿いにめぐっている。

［炉・カマド・煙道］　カマドは東コーナーに構築されており、普通は壁に直交してみられる煙道が、コーナーから突出する形でみられる。焚口部分には整形された凝灰岩及び焼土が認められた。

［貯蔵穴］　なし。

［年代決定］　カマド焚口部から手持ヘラケズリの内黒土師器坏と甕が出土している。



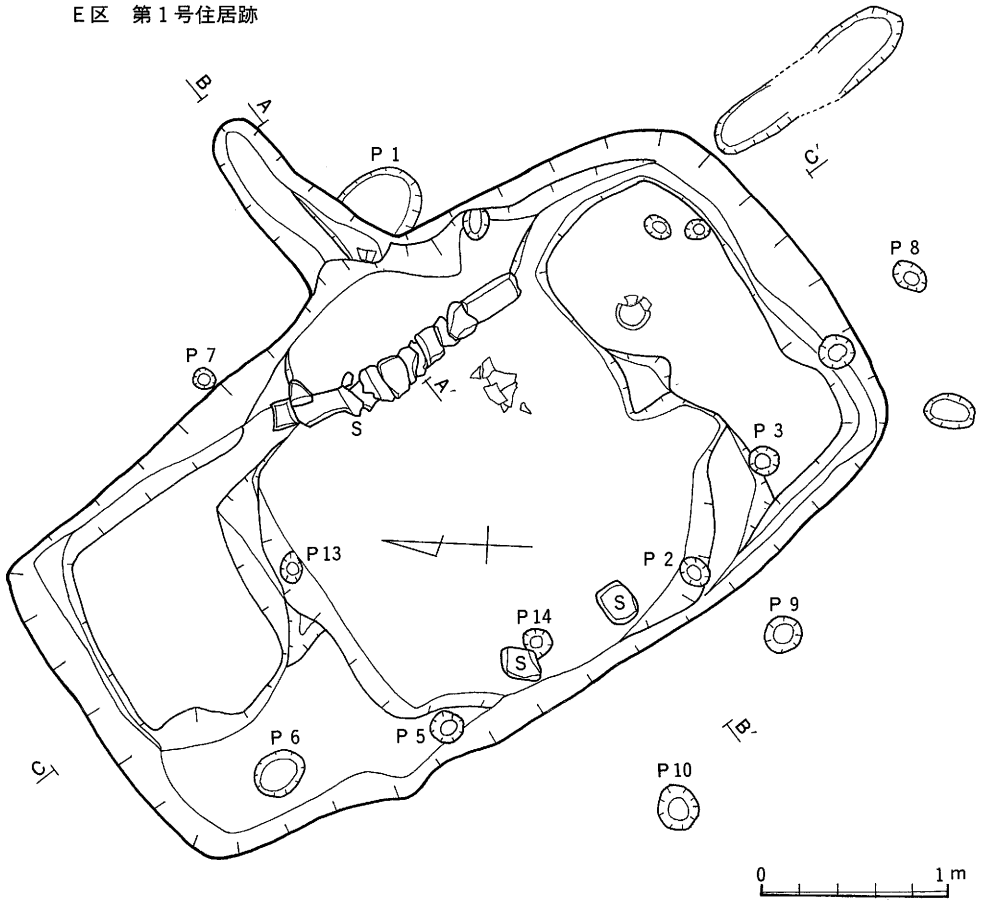
D区　第17号住居　カマドセクション（A－A′）

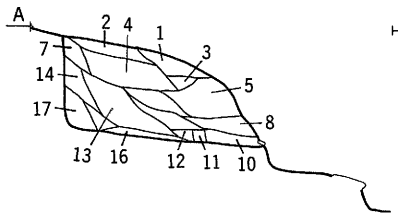
層　位	土　　色	土　性	備　　考
第１層	黒　褐　色秋10YR2/2）	シ　ル　ト	縄文包含層

D区　第17号住居東西・南北セクション（B－B′・C－C′）

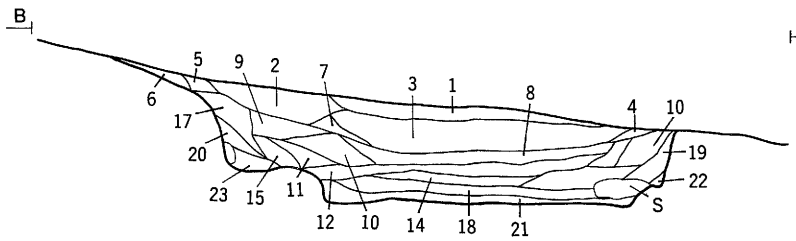
層　位	土　　色	土　性	備　　考
第１層	暗　褐　色(10YR3/3)	シ　ル　ト	住居に壁周辺に分布。
2	灰黄褐　色(10YR6/2)	シ　ル　ト	１～２㎜の灰のものを含む。サラサラしている。住居全体に分布。
3	黒　褐　色(10YR2/3)	シ　ル　ト	シディアム・サンドを含む住居壁際にのみ分布。粘性あり。
4	黒　褐　色(10YR3/2)	〃	わずかに焼土含む。サラサラしている。
5	明赤褐　色(５YR3/4)	〃	焼土・黒褐色(10YR3/2)シルト含む。サラサラしている。 } カマド内堆積土

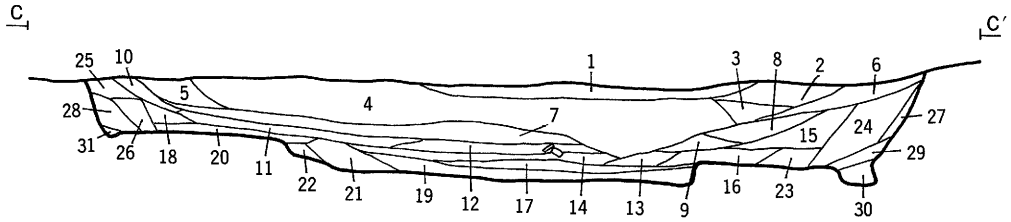
E区　第1号住居跡





A'
15.80m



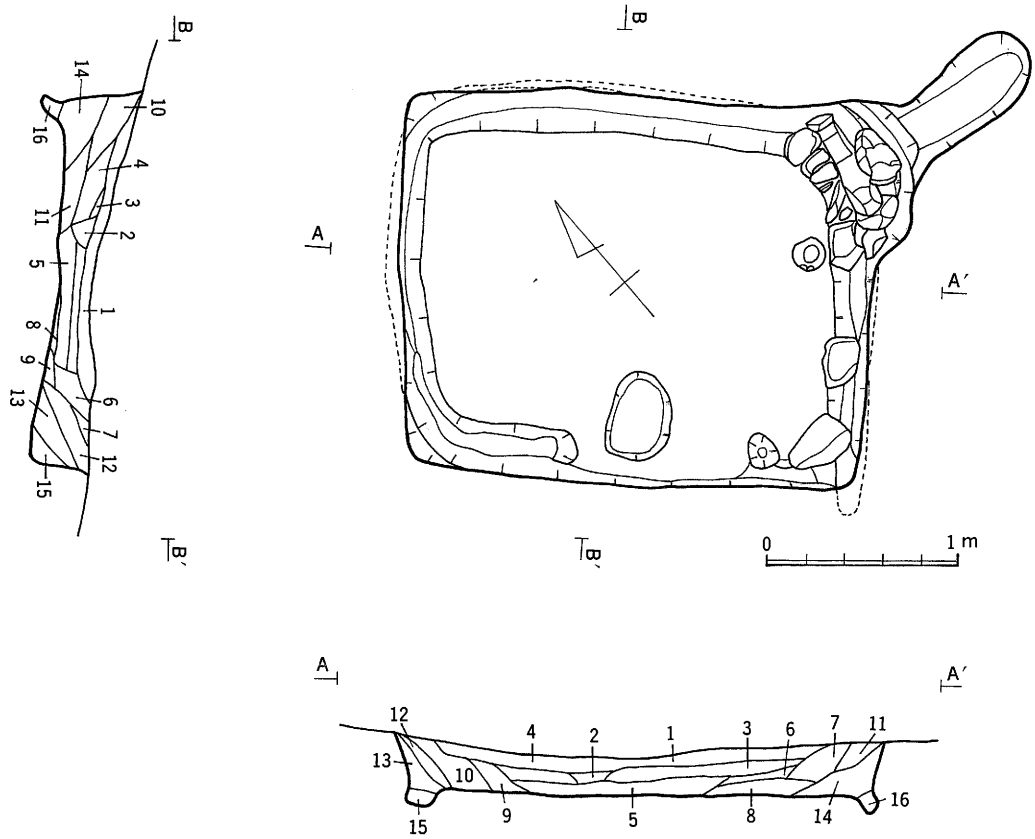


E区　第1号住居　南北セクション（A－A′）

層位	土色	土性	備考
第1層	暗褐色(10YR3/3)	シルト	若干土師器片を含む。粘性はやや強く，しまりは非常に弱い。
2	暗褐色(10YR3/3)	〃	第1層より明るい。粘性・しまり共第1層より強い。
3	黒褐色(10YR3/2)	〃	明黄褐色の火山灰をブロック状に含む。粘性・しまり共第2層よりやや弱い。
4	暗褐色(10YR3/3)	〃	
5	黄褐色(10YR4/3)	〃	礫を第4層と同じぐらい含む。粘性は第2層より強く，りまりは第4層より強い。
6	黒褐色(10YR3/2)	〃	第5層より少ない礫を含む。粘性・しまり共第5層よりやや弱い。
7	褐色(10YR4/4)	〃	粘性・しまり共第6層より弱い。
8	黄褐色(10YR4/3)	〃	粘性・しまり共第5層より強い。
9	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	第8層より暗い。粘性・しまり共第2層より強い。第4層より礫を多く含む。
10	極褐色(10YR4/3)	〃	第9層よりやや明るい。粘性・しまり共第9層よりやや強い。第9層より少なく礫を含む。
11	黄褐色(10YR5/4)	〃	粘性・しまり共第1層よりやや強い。
12	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	粘性・しまり共第10層よりやや強く礫を多少含む。
13	褐色(7.5YR4/3)	〃	第12層より粘性はやや強く，しまりはやや弱い。若干炭化物を含む。
14	黄褐色(10YR5/4)	〃	第13層より粘性はやや弱く，しまりは強い。
15	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	粘性は第13層と同じで，しまりは最も強い。
16	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	第14層よりしまりは弱く，粘性は強い。

E区　第1号住居　南北セクション（B－B′・C－C′）

層位	土色	土性	備考
第1層	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘性・しまり共に弱くもろい。
2	暗褐色(10YR3/3)	〃	粘性・しまり共に1層に同じ。
3	暗褐色(10YR3/3)	〃	粘性・しまり共に2層より強い。2層より明るい。
4	黒褐色(10YR2/2)	〃	粘性・しまり共に3層より強い。
5	黒褐色(10YR3/2)	〃	粘性・しまり共に4層より弱い。
6	褐色(10YR4/4)	〃	4層より粘性は弱く，しまりは強い。
7	暗褐色(10YR3/4)	〃	粘性・しまり共に4層より強い。火山灰？をブロック状に含む。
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	粘性・しまり共にやや弱い。火山灰？をブロック状に含む。
9	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	粘性・しまり共に強い。8層より暗い。礫を少量含む。
10	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	粘性・しまり共に8層よりやや弱い。
11	褐色(10YR4/4)	〃	7層より粘性はやや弱く，しまりは強い。土器片を含む。
12	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	粘性・しまり共に層より強い。土器片・炭化物を含む。
13	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	粘性・しまり共に12層より強い。礫を少量含む。
14	にぶい黄橙色(10YR6/4)	〃	12層より粘性は弱く，しまりは強い。礫を多量に含む。
15	褐色(10YR4/4)	〃	粘性・しまり共に13層よりやや弱い。礫を含む。
16	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	粘性・しまり共に15層より強い。礫を炭化物を少量含む。
17	明黄褐色(10YR6/6)	〃	粘性・しまり共に14層より強い。礫を少量含む。
18	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	10層より粘性は弱く，しまりは強い。
19	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	粘性・しまり共に17層より強い。土器片を含む。
20	褐色(10YR4/4)	〃	11層より粘性はやや弱く，しまりは同じ。
21	にぶい黄橙色(10YR6/4)	〃	粘性・しまり共に19層より強い。炭化物を少量含む。
22	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	21層より粘性は弱く，しまりは同じ。
23	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	16層より粘性はやや弱く，しまりは同じ。礫を少量含む。
24	黄褐色(10YR5/6)	〃	粘性・しまり共に23層より強い。礫を15層より多く含む。
25	にぶい黄褐色(10YR5/3)	〃	粘性・しまり共に10層よりやや強い。
26	にぶい黄橙色(10YR6/4)	〃	粘性・しまり共に25層より強い。礫を少量含む。
27	黄褐色(10YR5/6)	〃	粘性・しまり共に24層より弱い。礫を多量に含む。
28	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	26層と粘性は同じで，しまりは弱い。礫を少量含む。
29	にぶい黄橙色(10YR6/4)	〃	粘性・しまり共に27層よりやや弱い。礫を少量含む。
30	にぶい黄橙色(10YR6/4)	〃	粘性・しまり共に29層より強い。炭化物を少量含む。
31	黄褐色(10YR5/6)	〃	粘性・しまり共に28層より強い。



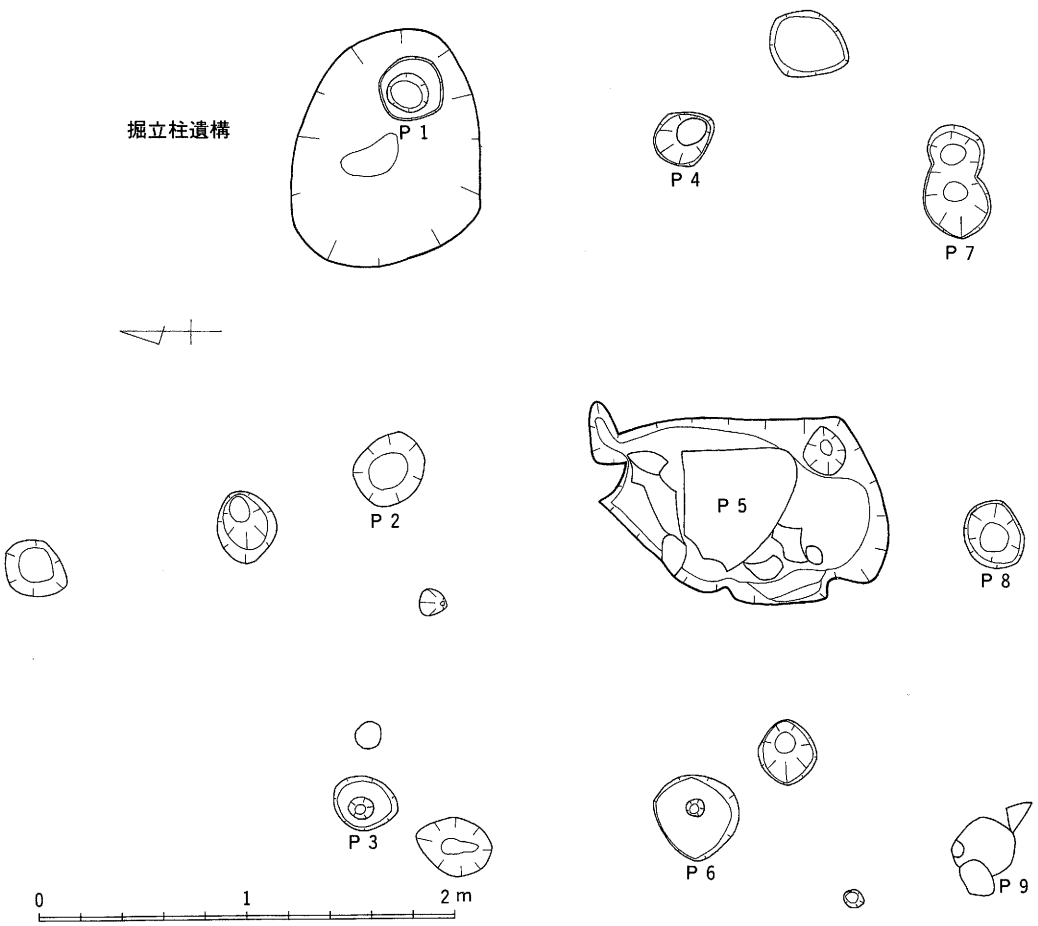
E区　第2号住居　カマドセクション（A—A′）

層　位	土　　色	土　性	備　　考
第1層	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	しまり・粘性共弱い。
2	褐　色(10YR4/6)	〃	しまりあり，粘性なし。わずかの炭化物を含む。
3	褐　色(10YR4/4)	〃	しまり・粘性共2層と同じ。
4	褐　色(10YR4/4)	〃	しまり・粘性共2層と同じ。炭化物と硅を少量含む。
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	しまり・粘性共2層と同じ。炭化物と硅をごくわずか含む。
6	にぶい黄褐色(10YR6/4)	粘土質シルト	しまりなく，粘性あり。炭化物をわずかに含む。
7	褐　色(10YR4/6)	シ　ル　ト	しまり・粘性共になし。
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	しまり・粘性共になし。炭化物をわずかに含む。
9	黄　褐　色(10YR5/6)	〃	しまり・粘性共になし。
10	褐　色(7.5YR4/4)	〃	しまり・粘性共になし。焼土招多量に含む。
11	明黄褐色(10YR6/6)	〃	しまり・粘性共になし。炭化物を細礫を多量に含む。
12	褐　色(10YR4/4)	〃	しまり・粘性共になし。大きめの炭化物を含む。
13	にぶい黄橙褐色(10YR6/3)	〃	しまり弱く，粘性なし。礫を多量に含む。
14	黄　褐　色(10YR5/6)	〃	しまりあり，粘性なし。礫を少量含む。
15	褐　色(7.5YR5/6)	〃	水分を含んでいるため粘性が強い。所々に焼土を含む。
16	暗　褐　色(10YR3/3)	〃	水分を含んでいるため粘性が強い。礫と炭化物をわずかに含む。
17	黄　褐　色(10YR5/6)	〃	水分を含むでいるため粘性が強い。風化凝灰礫・焼土を含む。

E区　第2号住居　東西セクション（B－B′）

層位	土色	土性	備考
第1層	暗褐色(10YR3/3)	シルト	粘性はやや弱く，しまりは非常に弱い。土師器を若干含む。
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	粘性・しまり共第1層と同じ。
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘だ・しまり共，第2層よりやや弱い明黄褐色の火山灰をブロック状に含む。
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	粘性・しまり，第3層より戦い。若干礫を含む。
5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	粘性は第2層より強く，しまりは第4層より強い。礫を第4層と同じぐらい含む。
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	粘性・しまり共第2層よりやや強い。
7	褐色(10YR4/4)	シルト	粘性・しまり共第6層より強い。
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	第7層より粘性はやや弱いが，しまりは強い。
9	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	第8層より明るい。粘性・しまり共第8層よりやや弱い。
10	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	粘性・しまり共第8層よりやや強い。
11	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	粘性・しまり共第10層と同じ。礫を多少含む。
12	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	粘性・しまり共第11層と同じ。第11層より多く礫を含む。
13	褐色(10YR4/4)	シルト	第10層より粘性はやや強く，しまりは弱い。礫と炭化物をやや含む。
14	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	第12層よりやや明るい。粘性・しまり共第12層より弱い。礫を少なく含む。
15	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	第13層より粘性はやや強く，しまりは弱い。

掘立柱遺構

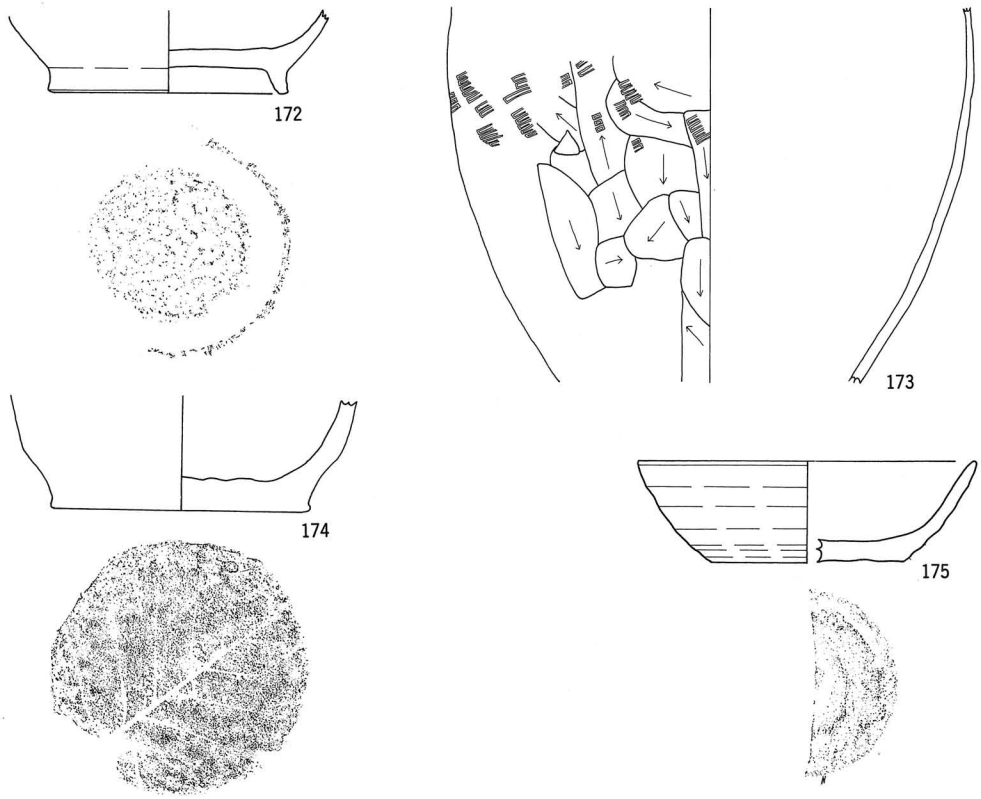


掘立柱遺構

A区で確認された。2間×2間の大きさで、各柱穴間の距離は約160cmである。各柱穴の掘り込み面は、削平のため不明だが地山まで掘り込まれている。伴出遺物がないため構築された時期は確認できない。

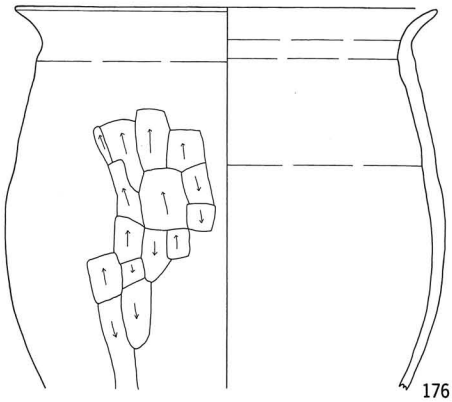
(2) 出土遺物

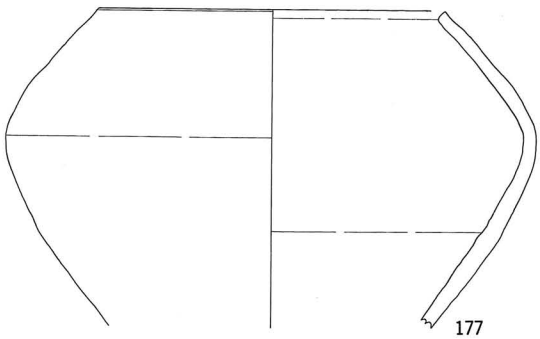
奈良・平安時代の出土した遺物で顕著にみられたのが、土師器の坏と甕で，これに次いで多いのが須恵器の坏である。出土地は竪穴住居跡内とH区の包含層からである。土器の他，紡錘車等が出土した。

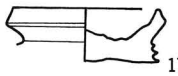


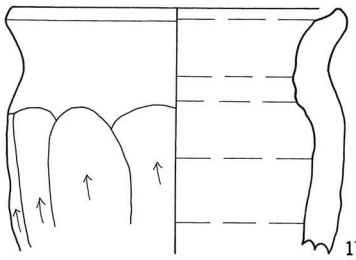
表一1　奈良～平安

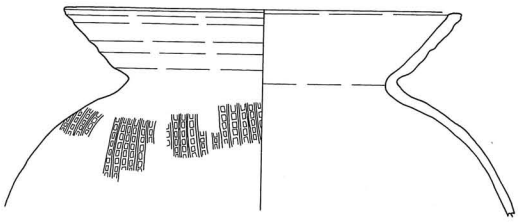
土器番号	出土地区 地区一層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
172	A区 3号住居Cコーナー2層	須恵器高台付坏	底部	—	—	9.6	0.4	ロクロナデ	体部ロクロ調整 底部静止ヘラ切リ	小石粒・石英粒を3～5%含む	1/3
173	A区 3号住居Dコーナー2層	土師器 甕	体部	—	—	—	0.5		タタキとケズリ 1：9の割合	石英粒・小石粒を2%程含む	1/4
174	A区 8住居 1層	製塩土器?	底部	—	—	10.3	0.7	指ナデ	櫛目が見られる	石英粒を7%程含む	1/3
175	A区 9号住居脇 表採	須恵器 坏	口縁～底部	4.0	13.4	7.7	0.5		底部静止ヘラ切り	小石粒・石英粒を3%程含む	1/3

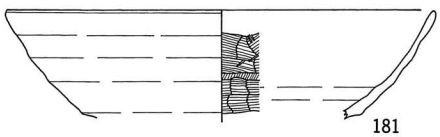

176

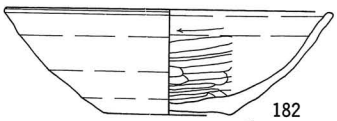

177

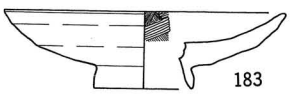

179

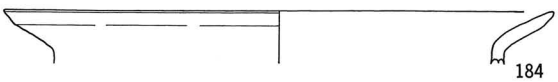

178

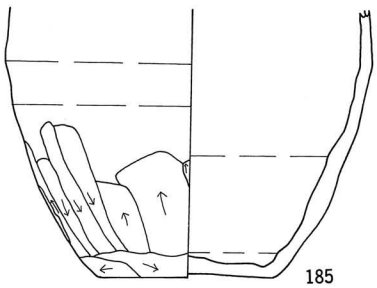

180

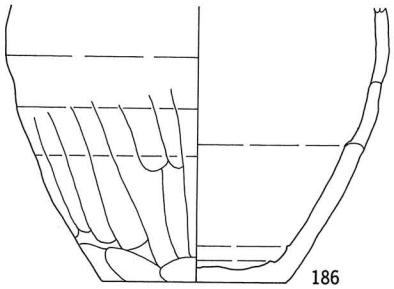

181


182


183

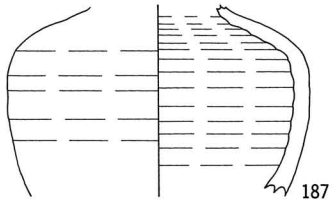

184

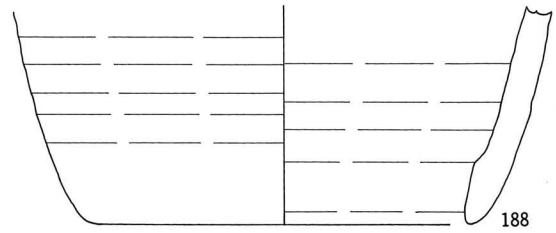

185

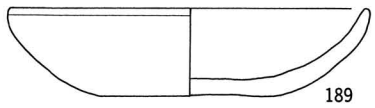

186

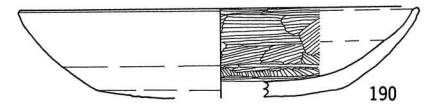
表－2

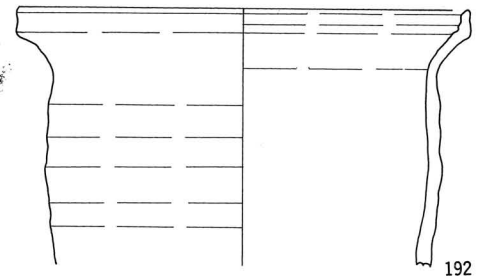
土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
176	A区 10号住居Bコーナー床面	土師器 甕	口縁～体部	－	22.0	－	0.6		縦位ケズリ	石英砂を含む	1/4
177	A区 10号住居Bコーナー床面	土師器 甕	口縁～体部	－	22.9	－	0.9	横位指ナデ		大粒の石英砂を含む	1/5
178	A区 11号住居カマド右脇	製塩土器	口縁～体部	－	12.7	－	1.2		体部ヘラケズリ	石英砂を含む	1/3
179	A区 12号住居Dコーナー1層	須恵器 蓋	ツマミ部	(1.4)	－	－	0.4		ロクロ調整	砂粒を含む	1/3
180	A区 12号住居東側壁付近	土師器 甕	口縁～体部	－	21.0	－	0.4			石英粒を5％程含む	1/4
181	A区 14号住居カマド	土師器 坏	口縁～体部	－	17.0	－	0.3	内黒 横位ミガキ	体部ロクロ調整 平行叩き目	小石・石英粒を含む	1/3
182	A区 14号住居カマド	土師器 坏	一部底部を欠く	4.2	12.8	4.8	0.25	内黒 横位ミガキ	体部回転ロクロ調整 底部手持ヘラケズリ	石英質砂粒を含む	1/3
183	A区 14号住居カマド	土師器高台付坏	一部底部を欠く	3.1	11.1	3.9	0.7	内黒 ミガキ		小石粒・石英粒を含む	1/3
184	A区 14号住居焚口部 2層	土師器 甕	口縁部	－	21.8	－	0.5			繊維を含む	1/3
185	A区 14号住居カマド	土師器 甕	体部～底部	－	－	7.0	0.4		体部ロクロ調整 手持ヘラケズリ	石英砂を含む	1/3
186	A区 14号住居カマド	土師器 甕	体部～底部	－	－	7.3	0.5		体部ロクロ調整後ケズリ 底部切り離し後ナデ		1/3

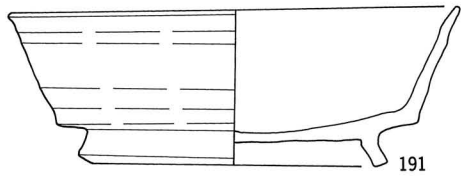


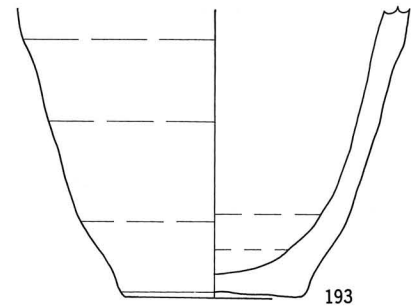


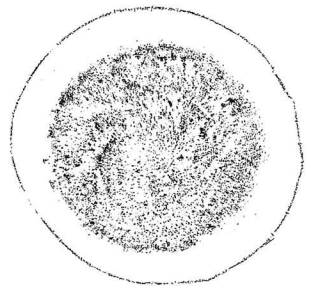






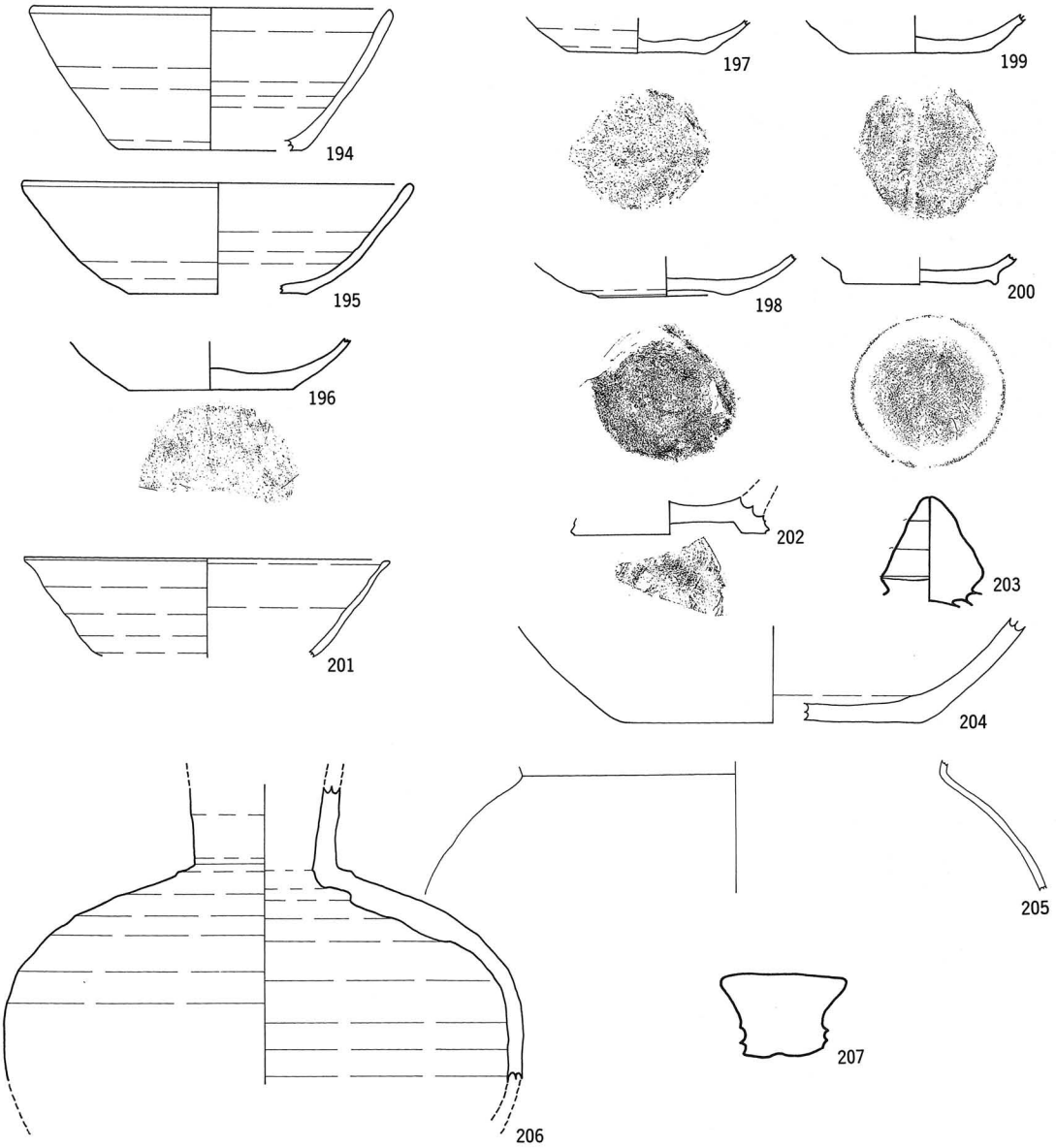






表－3

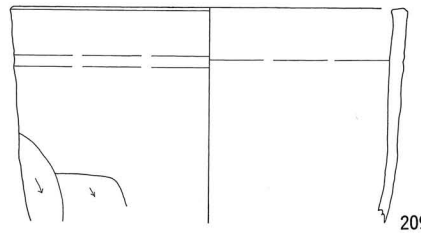
土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
187	A区 14号住居カマド	須恵器長頸壺	体部	—	—	—	0.7	ロクロナデ	ロクロ調整	砂粒を5％程含む	1/3
188	A区 14号住居カマド	須恵器 甕	体部～底部	—	—	14.6	1.1			石英粒・小石粒を含む	1/3
189	A区 15号住居Dコーナー2層	土師器 坏	一部底部を欠く	3.5	14.0	6.9	0.6	内黒	底部 手持ヘラケズリ？	小石粒・礫粒・石英粒・雲母の微粒を含む	1/3
190	A区 15号住居Dコーナー2層	土師器 坏	一部底部を欠く	—	16.0	9.8	0.5	内黒 ミガキ	体部ロクロ調整 底部回転ヘラ切り 回転ヘラケズリ	石英質砂粒を少し含む	1/3
191	A区 15号住居Aコーナー床面上	須恵器高台付坏	完形	6.2	17.8	11.2	0.5		底部回転ヘラ切り	小石粒・石英粒・礫粒を5％程含む	1/3
192	A区 15号住居10ビット	土師器 甕	口縁～体部	—	17.8	—	0.5			石英砂を含む	1/3
193	A区 15号住居Aコーナー床面	土師器 甕	体部～底部	—	—	7.0	0.8		底部木葉痕	小石粒・石英粒を多く含む	1/3

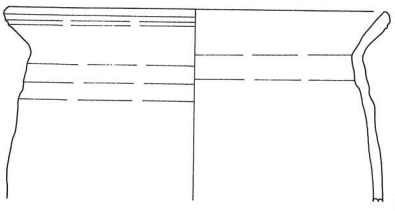


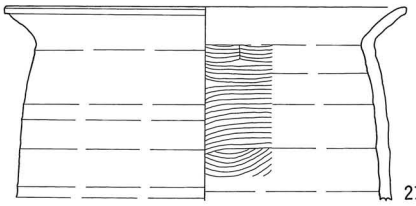
表一4

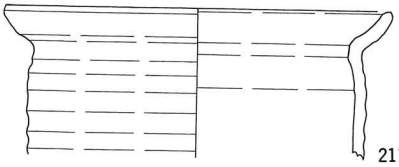
土器番号	出土地区 地区一層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
194	B区1号住居Cコーナー 2層	土師器 坏	一部底部を欠く	5.9	14.5	7.4	0.35		体部ロクロ調整 底部ヘラケズリ	小石粒・石英粒・礫粒を3%程含む 1/3
195	B区1号住居Eコーナー 2層	土師器 坏	一部底部を欠く	4.6	15.8	5.0	0.3		底部回転ヘラケズリ後手持ヘラケズリ	小石粒・石英粒・礫粒を3%程含む 1/3
196	B区1号住居Aコーナー 2層	土師器 坏	体部～底部	—	—	6.6	0.3		底部回転糸切り	石英粒・小石粒を含む 1/3
197	B区1号住居Bコーナー 2層	土師器 坏	底部	—	—	5.4	0.25		底部回転ヘラ切り	石英粒・小石粒を含む 1/3
198	B区1号住居Bコーナー 2層	土師器 坏	底部	—	—	6.0	0.2		底部回転糸切り	石英粒・礫粒・小石粒を10%程含む 1/3
199	B区1号住居BE間ベルト2層	土師器 坏	底部	—	—	5.6	0.3		底部回転糸切り	石英粒7%小石粒3%程含む 1/3
200	B区1号住居BE間ベルト2層	土師器高台付坏	底部	—	—	6.2	0.3		底部回転糸切り	石英粒・小石粒・礫粒を3%程含む 1/3
201	B区1号住居 地山直上	須恵器 坏	底部を欠く	—	15.0	—	0.3			小石粒・石英粒を含む 1/3
202	B区1号住居EF間ベルト2層	須恵器	高台付	—	—	7.8	0.6		回転糸切り後手持ヘラケズリ	石英粒・小石粒を1%程含む 1/3
203	B区1号住居Eコーナー 2層	須恵器 蓋	ツマミ部	(2.5)	—	—	—		ロクロ調整	砂粒を多く含む 1/2
204	B区1号住居コーナー 2層	須恵器 甕	体部～底部	—	—	16.0	0.9		底部叩き目	石英粒1%小石粒7%程含む 1/4
205	B区1号住居Cコーナー 2層	須恵器 甕	体部	—	—	—	0.4			石英粒・小石粒を含む 1/4
206	B区2号住居Cコーナー	須恵器長頸	体部	—	(6.2)	—	0.6		ロクロ調整	砂粒をわずかに含む 一部に釉が付着 1/3
207	B区2号住居 2・3層	須恵器 蓋	ツマミ部	—	—	—	—			石英粒を7%程含む 1/2

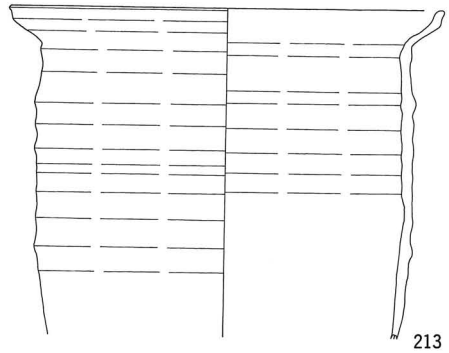
208

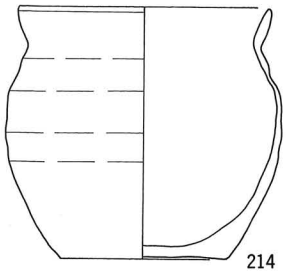

209

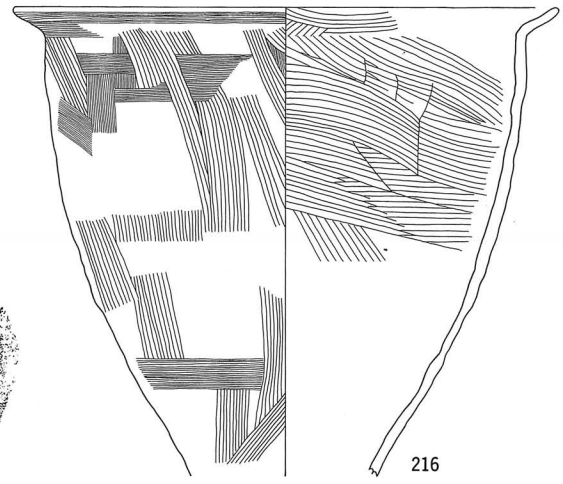

210

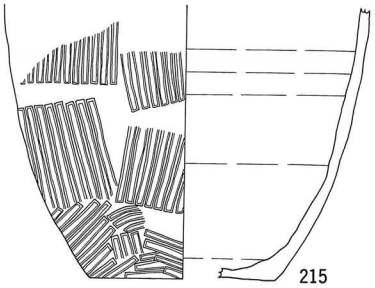

212


211


213

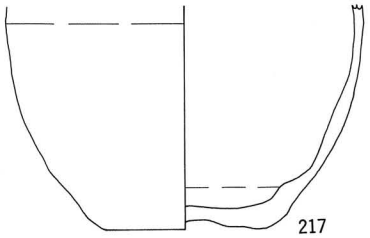

214

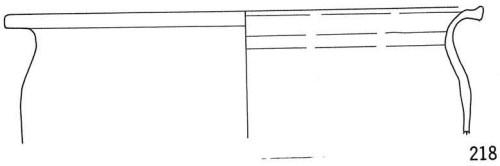

216

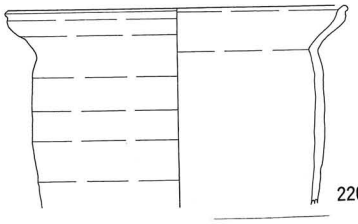

215

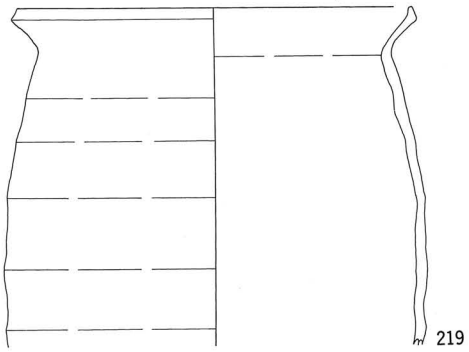
表－5

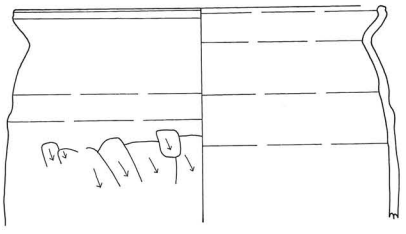
土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考
208	C区16号住居	土師器 蓋	ツマミ部を欠く	—	26.0	—	0.6		下から3～4cmの所でヘラケズリ	石英粒・小石粒を含む 1/4
209	C区16号住居	土師器 甕	口縁～体部	—	20.6	—	0.6		体部 ケズリ	石英砂を含む 1/4
210	C区16号住居カマド 床面	土師器 甕	口縁～体部	—	19.8	—	0.4		回転ロクロ調整	1/4
211	C区16号住居カマド 床面	土師器 甕	口縁～体部	—	20.2	—	0.6		回転ロクロ調整	石英砂を含む 1/4
212	C区16号住居カマド 床面	土師器 甕	口縁～体部	—	21.4	—	0.55	横位ナデ	縦位ナデ後横位ナデ	石英を含む 1/4
213	C区16号住居カマド 床面	土師器 甕	口縁～体部	—	22.8	—	0.5			石英粒を含む 1/4
214	C区16号住居	土師器 甕	完形	10.1	9.9	6.5	0.2		網代底	雲母粉・小石粒・石英粒を含む 1/3
215	C区16号住居 床面	土師器 甕	体部～底部	—	—	9.8	0.6	タタキ	体部平行叩き目 網代底	図面1/4 底部拓本1/3
216	C区16号住居 床面	土師器 甕	口縁～体部	—	28.4	—	0.6	横位ナデ	縦位・横位ナデ	石英を含む 1/4

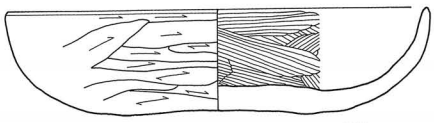


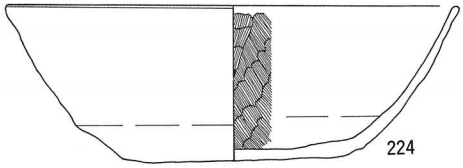


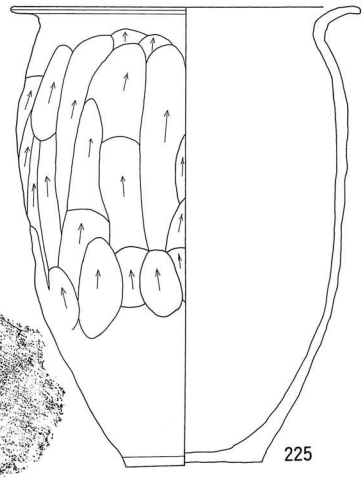


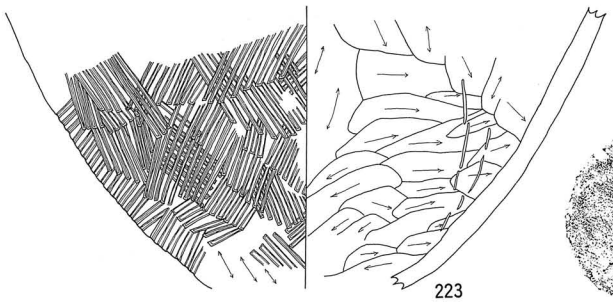


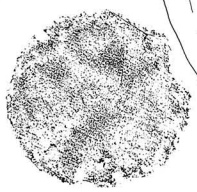






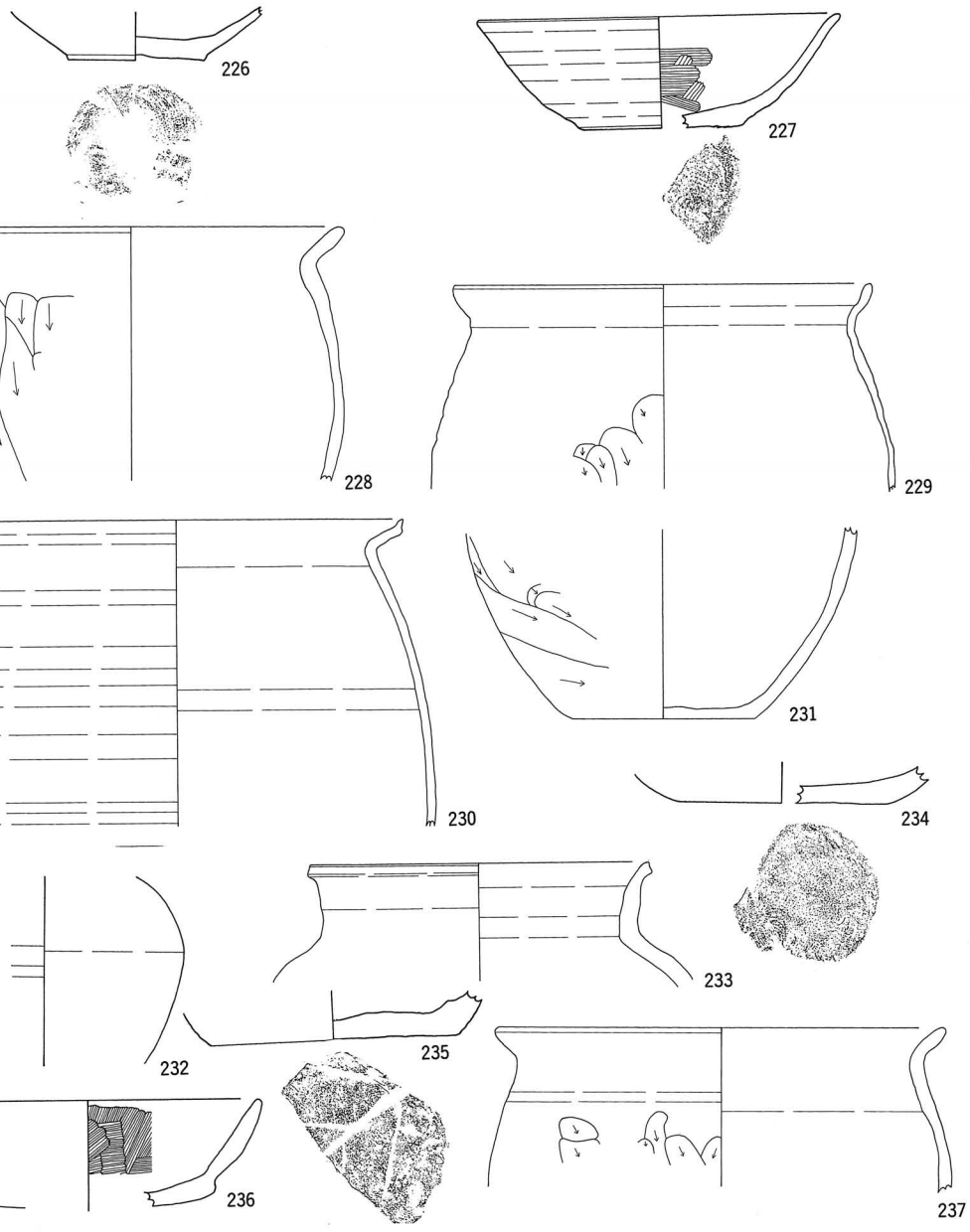






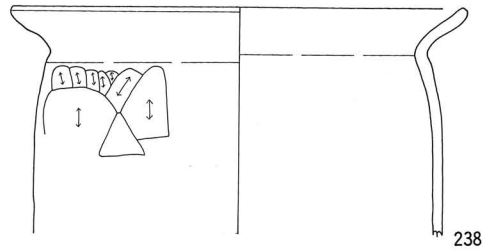
表－6

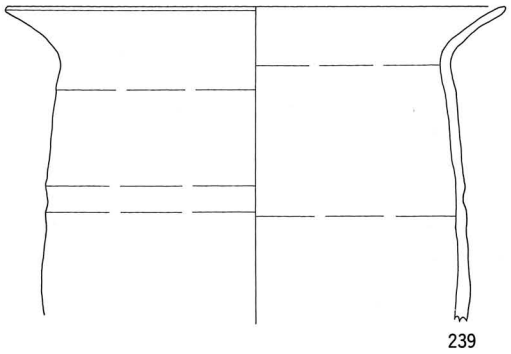
土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
217	C区18号Aコーナー 床面	土師器 甕	体部～底部	－	－	6.5	0.3			石英を含む	1/4
218	C区19号住居Dコーナー 2層	土師器 甕	口縁～体部	－	25.3	－	0.3	ロクロナデ	頸部より下ハケ	石英粒を多く含む	1/4
219	C区20号住居Bコーナー 床面	土師器 甕	口縁～体部	－	21.0	－	0.5			石英砂を多く含む	1/4
220	C区20号住居 床面	土師器 甕	口縁～体部	－	17.8	－	0.5	ロクロナデ	ロクロ調整	石英砂を多く含む	1/4
221	C区20号住居	土師器 甕	口縁～体部	－	19.2	－	0.45		ロクロ調整後にヘラケズリ	石英粒を少し含む	1/4
222	E区1号住居南北ベルト 2層	土師器 坏	一部底部を欠く	4.0	16.6	9.5	0.6	内黒 ミガキ	体部手持ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ後手持ヘラケズリ		1/3
223	E区1号住居Bコーナー 2層	須恵器 甕	体部	－	－	－	1.1	叩き後指ナデ	平行叩き目 底部付近ミガキ	砂粒を10%程含む	1/4
224	E区2号住居Aコーナー 床面	土師器 坏	完形	6.3	17.7	8.8	0.3	内黒 ミガキ	底部静止ヘラ切り	石英粒・小石粒を含む	1/3
225	E区2号住居カマド 1層	土師器 甕	完形	24.4	18.0	7.2	0.4		ケズリ 底部木葉痕	礫粒・石英粒・小石粒を3%程含む	1/4

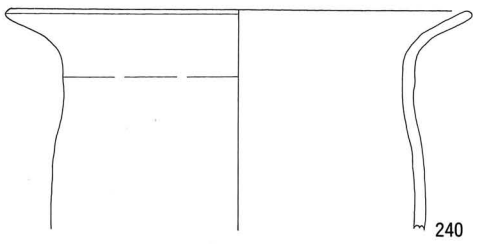


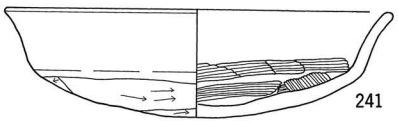
表－7

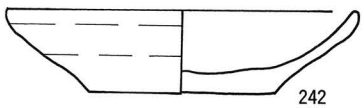
土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
226	焼土遺構	土師器	坏	底部	(2.1)	—	5.3	0.4	ロクロナデ	ロクロ調整 底部回転糸切り	礫・石英・小石粒を含む	1/3
227	焼土遺構	土師器	坏	完形	4.5	14.2	6.0	0.45	ミガキ 内黒	ロクロ調整 底部回転糸切りの後外周ナデ	礫・石英・小石粒を含む	1/3
228	H区 R－58.Q－59間 1層	土師器	甕	口縁～体部	(13.6)	22.2	—	0.6	ナデ	縦位ヘラケズリ	石英粒を含む	1/4
229	H区 R－58 1層	土師器	甕	口縁～体部	(11.2)	22.0	—	0.4	ナデ	ロクロ調整 縦位ヘラケズリ	石英粒を含む	1/4
230	H区 R－58 1層	土師器	甕	口縁～体部	(16.3)	24.2	—	0.4	ロクロナデ	ロクロ調整	小石粒・石英粒を含む	1/4
231	H区 R－58 1層	土師器	甕	体部～底部	(10.3)	—	9.6	0.7	ロクロナデ	ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り→手持ヘラケズリ	1㎜以下の礫を含む	1/4
232	H区 E－8 2層	土師器	壺	体部	(7.5)	—	—	0.45	ロクロナデ	ロクロ調整	石英粒を含む	1/3
233	H区 L 2層	須恵器	甕	口縁～肩部	(6.8)	18.0	—	0.8	ロクロナデ	ロクロ調整	砂粒を含む	1/4
234	H区 O－55 2層	土師器	坏	底部	—	—	8.2	—	内黒	底部手持ヘラケズリ	礫・石英・小石粒を含む	1/3
235	H区 P－59 2層	土師器	甕	底部	—	—	10.0	—		底部木葉痕	小石・石英粒を含む	1/3
236	H区 P－59 2層	土師器	坏	口縁～体部	(4.3)	13.5	—	0.7	ミガキ 内黒	体部下端に段をもつ	礫・石英・小石粒を含む	1/3
237	H区 R－59 2層	土師器	甕	口縁～体部	(8.9)	23.6	—	0.65	ロクロナデ	ロクロ調整 ヘラケズリ調整	礫・石英粒を含む	1/4

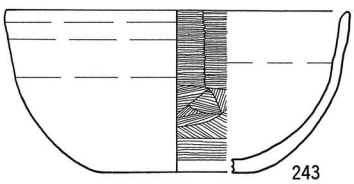


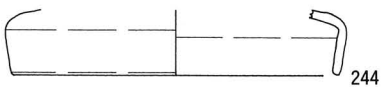


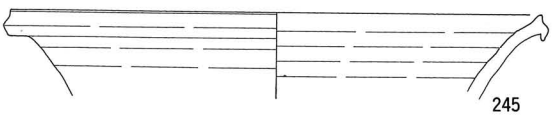


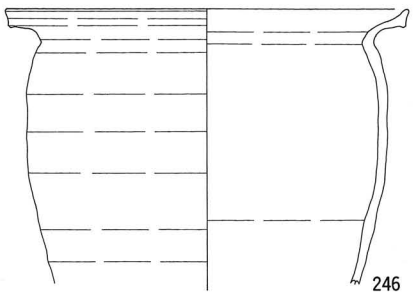


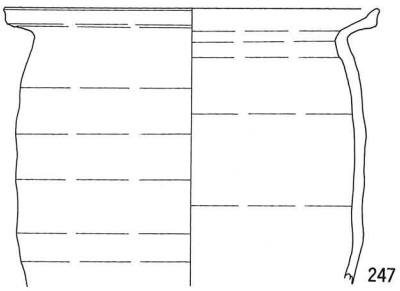






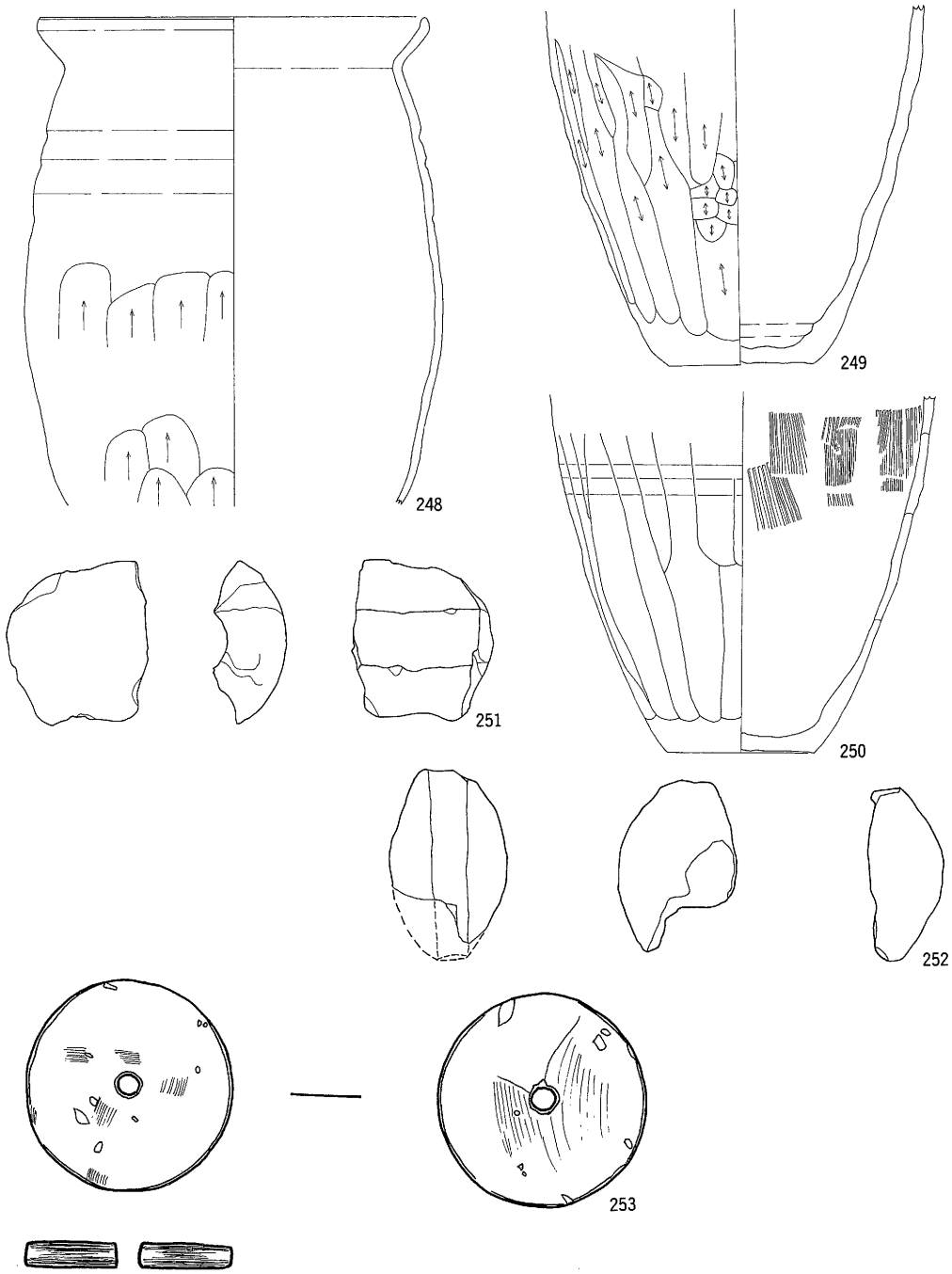






表—8

土器番号	出土地区 地区—層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
238	H区 H—10 4層	土師器	甕	口縁～体部	(12.2)	24.2	—	0.55	ナデ	ロクロ調整 ヘラケズリ	石英粒を含む	1/4
239	H区 M—55 4層	土師器	甕	口縁～体部	(16.7)	26.6	—	0.55	ナデ	ロクロ調整	石英粒を含む	1/4
240	H区 M—55 4層	土師器	甕	口縁～体部	(11.7)	24.6	—	0.6	ナデ	ロクロ調整	石英粒を含む	1/4
241	不明 住居 焚口部	土師器	坏	完形	4.3	15.5	—	0.5	ミガキ 内黒	ナデ 手持ヘラケズリ	石英粒を含む	1/3
242	不明	土師器	坏	完形	2.2	9.4	5.0	0.35	ロクロナデ	体部ロクロ 底部回転糸切り→手持ヘラケズリ		1/2
243	不明	土師器	坏	口縁～底部	6.5	13.6	6.2	0.35	ミガキ 内黒	体部ミガキ 底部手持ヘラケズリ	石英・小石粒を含む	1/3
244	A区 不明	須恵器	蓋	体部	(2.6)	13.0	—	0.3	ロクロナデ	ロクロ調整	石英・小石粒を含む	1/3
245	不明	須恵器	甕	口縁部	(4.6)	28.2	—	0.65	ロクロナデ	ロクロ調整	小石粒を含む	1/4
246	不明	土師器	甕	口縁～体部	(14.6)	21.4	—	0.5	ナデ	ロクロ調整	小石粒を含む	1/4
247	不明	土師器	甕	口縁～体部	(14.8)	20.0	—	0.6	ロクロナデ	ロクロ調整		1/4



表一 9

土器番号	出土地区 地区一層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	底径	器厚	文様調整 内面	外面	備考	
248	不明	土師器 甕	口縁～体部	(27.6)	21.8	—	0.5	ナデ	ロクロ調整 縦位ヘラケズリ		1/4
249	不明	土師器 甕	体部～底部	(20.3)	—	8.1	0.8	ロクロ ヘラナデ	縦位ヘラケズリ 底部手持ヘラケズリ	石英砂を含む	1/4
250	H区 H－2 不明	土師器 甕	体部～底部	(20.2)	—	8.2	0.5	ロクロ→刷目→ナデ	ロクロ調整 縦位ヘラケズリ 底部ケズリ→ナデ		1/4
251	E区 表採	石製品		(6.0)	外径 8.2	内径 3.0	2.0			外面に自然釉	1/3
252	不明 表採	土錘	一部欠損	7.3	外径 5.0	内径 1.5	1.8			小石・石英粒を含む	1/3
253	H区 K－58・59 4層	紡錘車	完形	—	外径 4.5	内径 0.5	0.55			両面に擦痕	2/3

V．ま と め

1．縄文時代の遺構遺物について

縄文時代の遺構としては、貝塚及び遺物包含層・竪穴住居跡が発見された。出土した縄文時代の遺物は、土器・石器及び自然遺物であるが、土器を見るかぎりにおいて川上名II並行と考えられる。いずれの土器も繊維を含む胎土で生成されており、縄文は器形全体に施されている。羽状縄文が主流となり、器形は、口縁部径の底部に対する比が極端に大きく、いわゆるアサガオ形を呈する深鉢である。底部には、ゆるい丸底のものと平底のものとの2型体に分類される。この底部の相違に関しては時代的差異（平底の深鉢土器よりも丸底のものが先行する。）があろうかと思われるが、今回の調査では貝層そのものが薄い事など、確定的な時期差をセクションから確認することができなかった。貝塚そのものも7m×20mと小規模のものであり、貝塚が形成された位置が傾斜面であること、また耕作などによる二次的要因もかさなり、包含層も含め保存状態が良かったとはいいがたい。竪穴式住居跡も保存があまりよくなく、径3m×3mの竪穴である。このように遺物及び遺構から、上川名IIに並行するものであり左道遺跡の貝塚は縄文時代早期末葉から前期初頭と考えられていたことがあらためて確認された。

また、この左道貝塚は西側の下方浦を挟んで大木囲貝塚と対峙する地理的環境にあり、時代的に貝塚が形成された左道の早期末から大木の前期・中期と連続しており、何らかの要因によって左道貝塚が破棄され、その後大木に移りすんだことも推察される。

2．奈良・平安時代の遺構・遺物について

一番多くみられたのが竪穴式住居跡で、今回の調査では全部で32棟である。斜面部に構築されたものはほとんどが二次的に破壊されており、丘陵平坦部及び丘陵上面部のものは比較的保存が良かった。竪穴のプランは平均すると約3.8m×3.8mほどの方形であった。カマドの構築には凝灰岩を加工しソデ部に利用している。これは内陸部におけるカマドの構築にはあまりみられぬ手法で福島県の浜通り地帯から浜づたいにみられるものである。このことは、この集落のつくられた性格を解くひとつの問題点となる可能性を示している。この時期、七ケ浜町内には製塩の営まれた跡が各地に点在するが、こうした製塩にたずさわった集団との係わりも考慮しなければならない。しかし、今回の調査では製塩に伴う土器片及び遺構等は確認されなかった。七ケ浜町内の製塩遺跡をみてみると、ほとんどが汀線近くのゆるやかな砂質入江に営まれている。太平洋（外海）に面した花渕浜地区の長須賀製塩遺跡など、これまでに何箇所か調査の手が加えられているが、製塩そのものに重点がおかれ、これをとりまく製塩集団の様相にはあまりふれられていない。左道の場合、塩釜湾（内海）に突出した丘陵部に集落が形成されているが、南側に対峙する丘陵とによって大きな入江が形成されている。現在は埋立によって、当時の様相をうかがい知ることも困難な状況にあるが、この入江で製塩の行われていた確証がつかめられれば、おのずから左道における集落の性格が明らかにされるであろう。また、第1次・第2次調査において調査団から丘陵頂部において、多賀城との連絡施設である「烽」跡の確認が報じられ、集落の性格も軍事的なものとの見解が出されていたが、その後の精査及び調査区域を拡張しても軍事的遺構や遺物は全く認めることはできなかった。

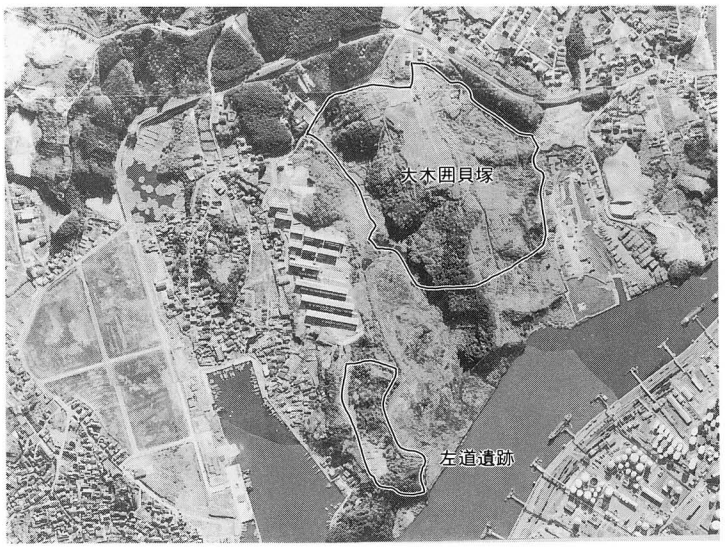


写真 1
遺跡航空写真

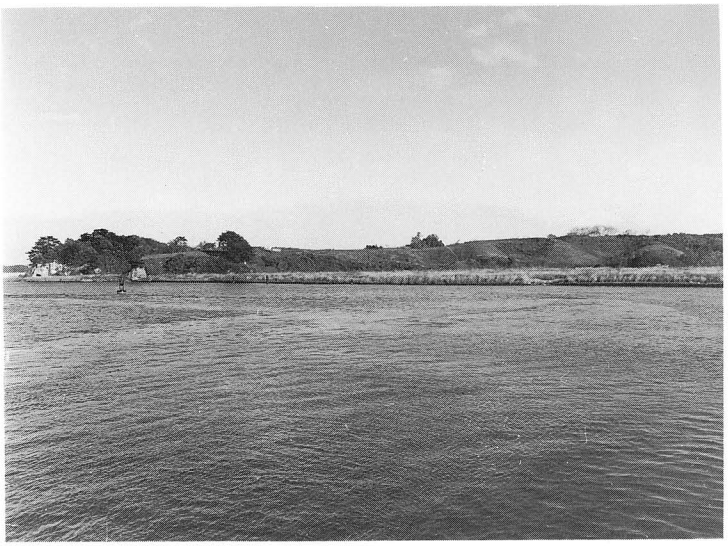


写真 2
遺跡遠景（⇦西北）

写真 3
貝層断面

写真 4
H区　発掘状況

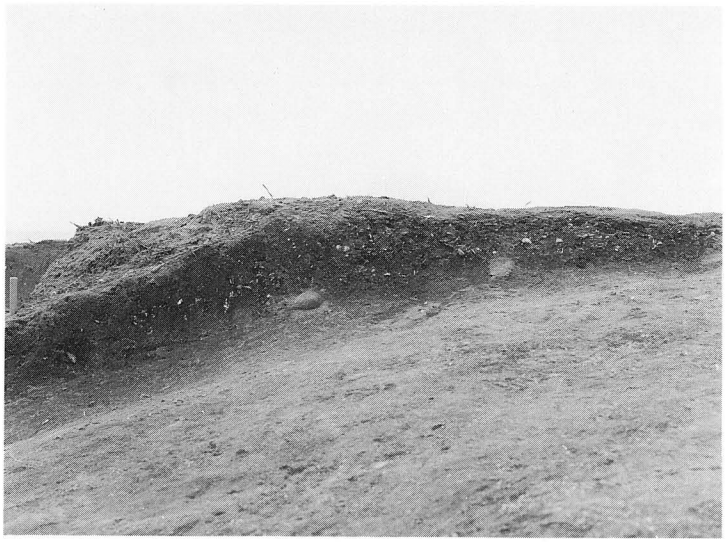


写真 5
H区　貝層断面

写真 6
A区第 1 号住居跡

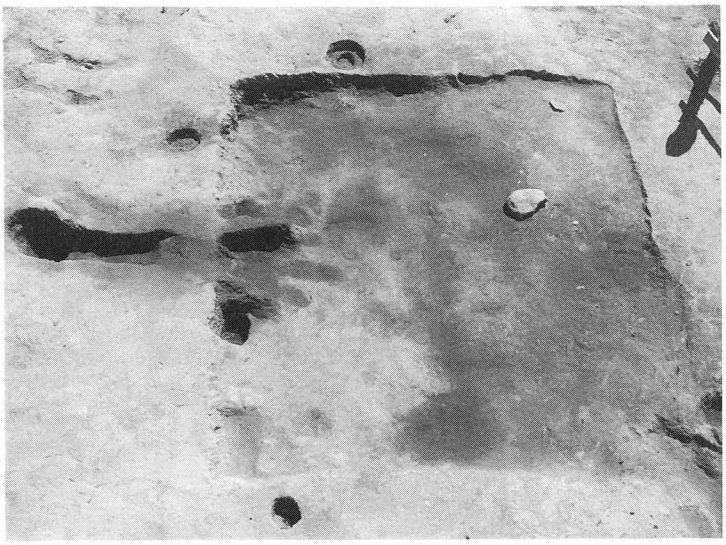


写真 7
A区第11号住居跡

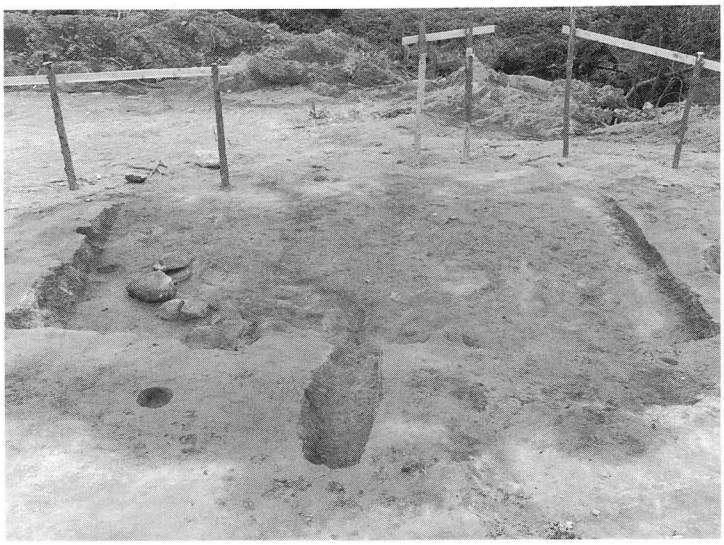


写真 8
A区第15号住居跡

写真 9
A区第16号住居跡

写真10
B区第8号住居跡

写真11
B区第21号住居跡

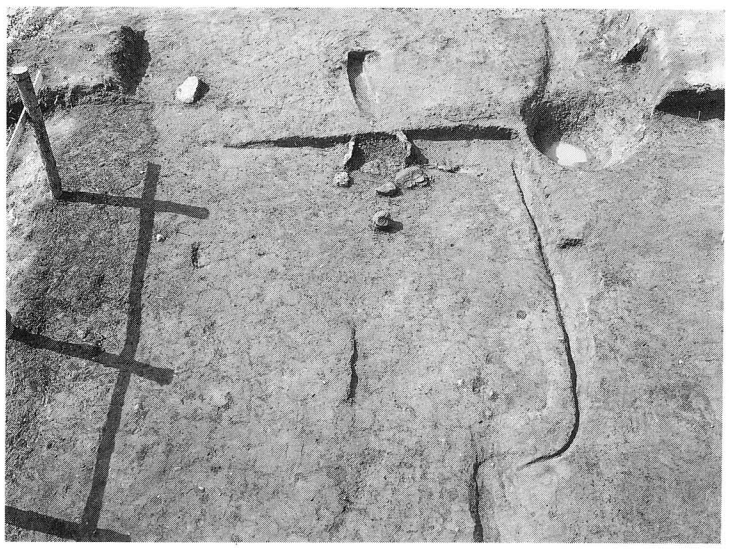


写真12
C区第9号住居跡

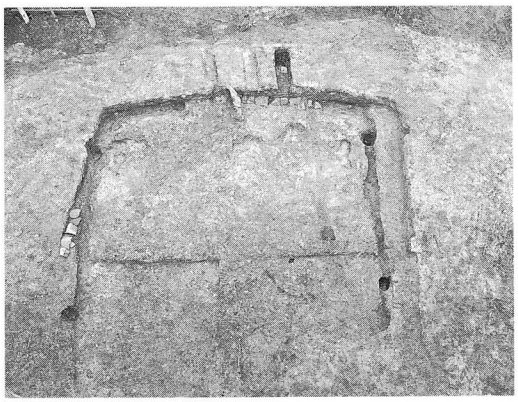


写真13
C区第10号住居跡

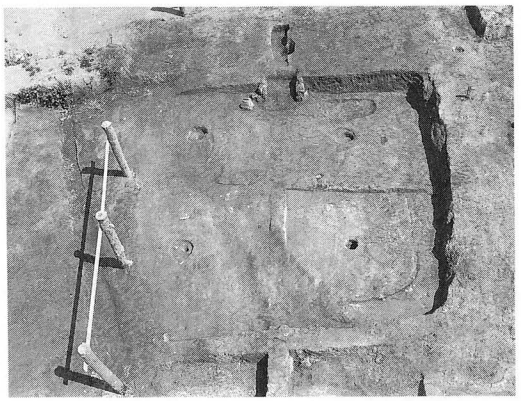


写真14
C区第11号住居跡

写真15
C区第12号住居跡

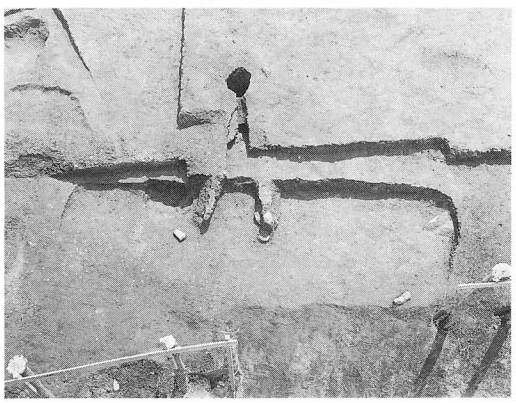


写真16
C区第13号住居跡

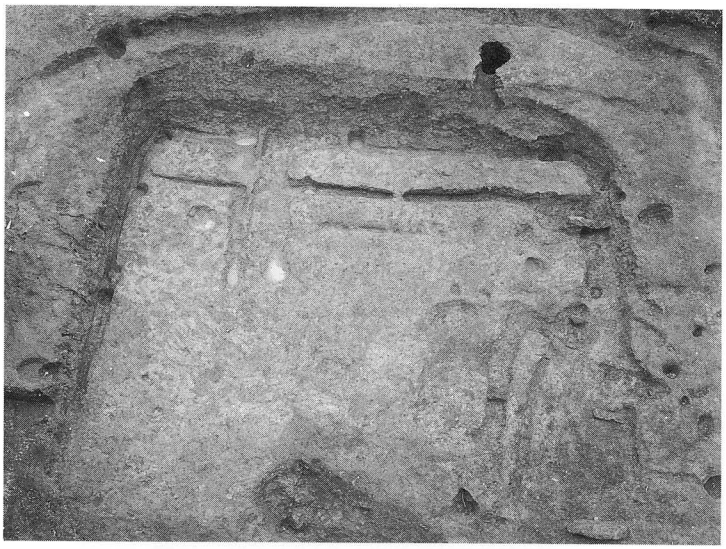


写真17
C区第14号住居跡

写真18
C区第15号住居跡

写真19
C区第16号住居跡

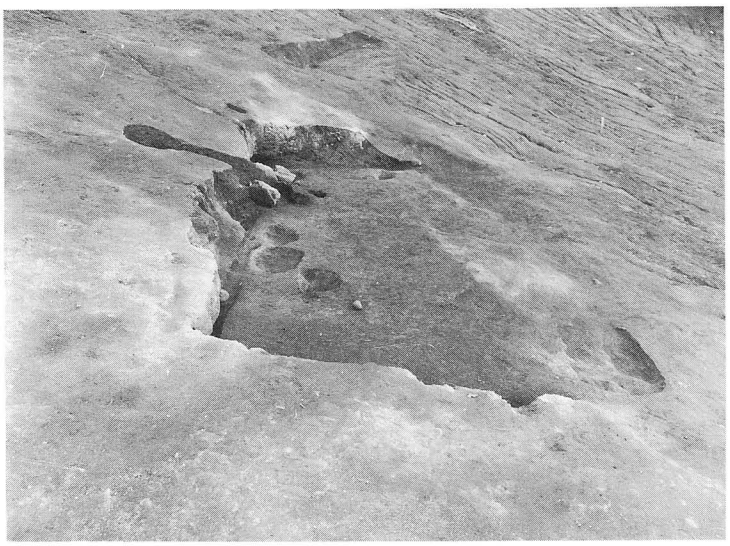


写真20
C区第18号住居跡

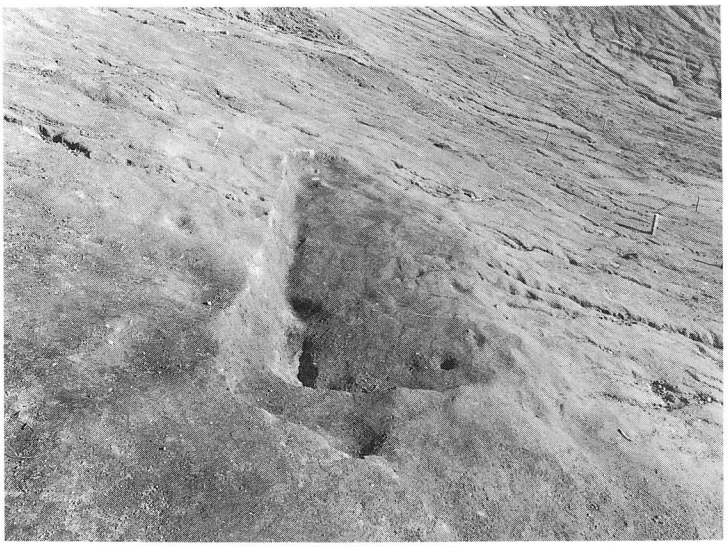


写真21
C区第22号住居跡

写真22
D区第14号住居跡

写真23
D区第17号住居跡

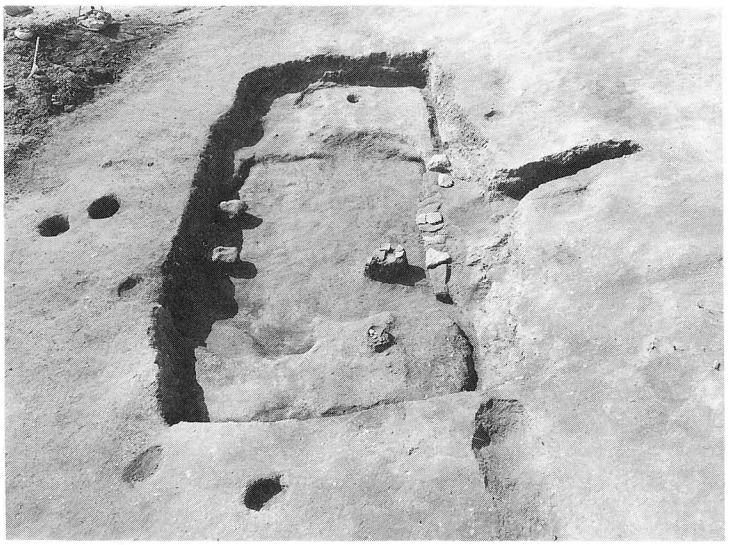


写真24
E区第1号住居跡

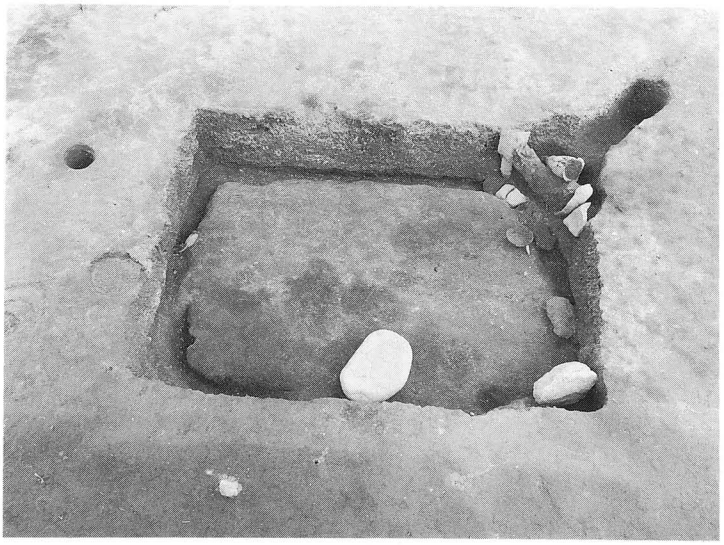
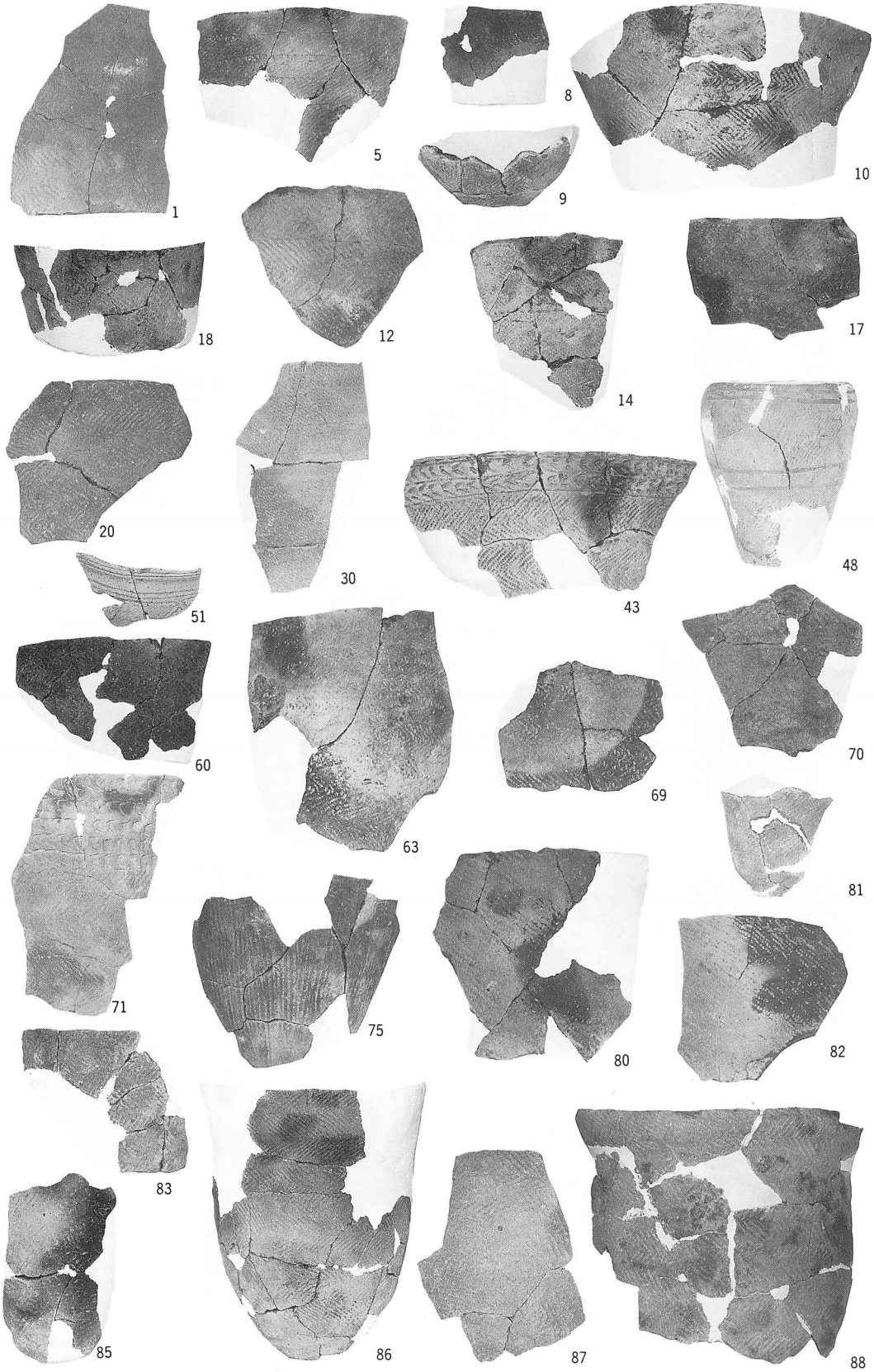
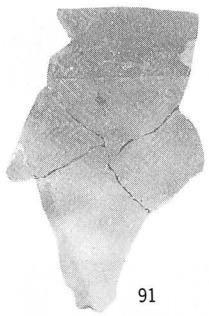
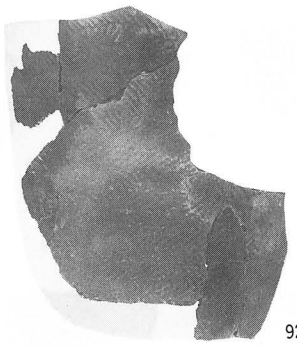


写真25
E区第2号住居跡

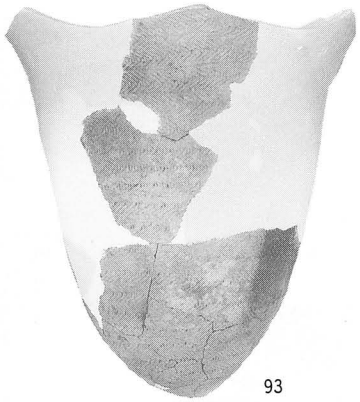

1
5
8
9
10
12
14
17
18
20
30
43
48
51
60
63
69
70
71
75
80
81
82
83
85
86
87
88



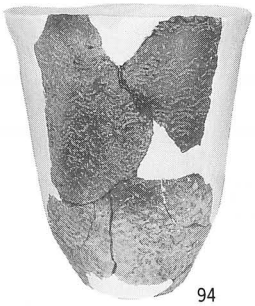
91



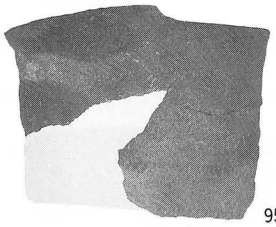
92



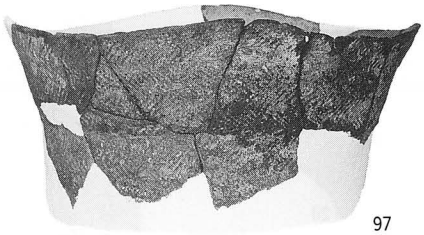
93



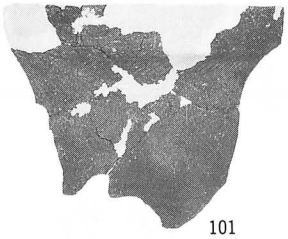
94



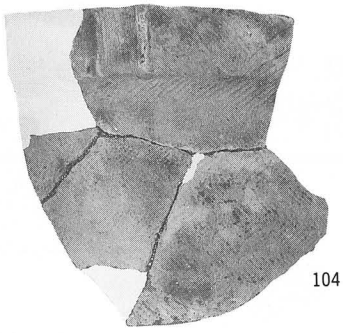
95



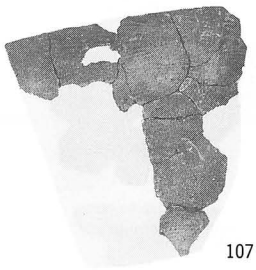
97



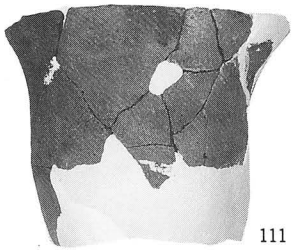
101



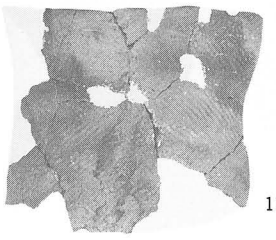
104



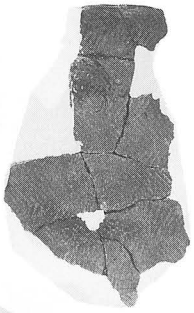
107



111

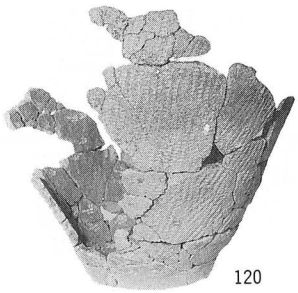


114

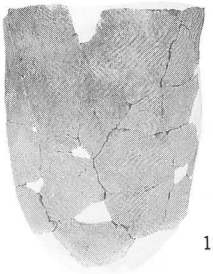


115

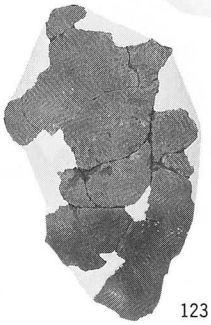
116



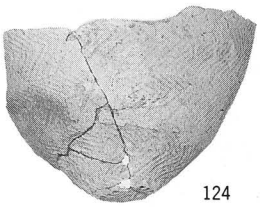
120



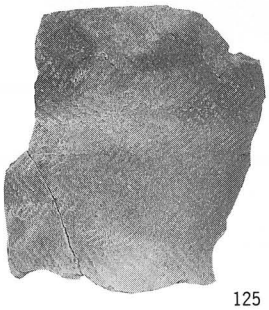
122



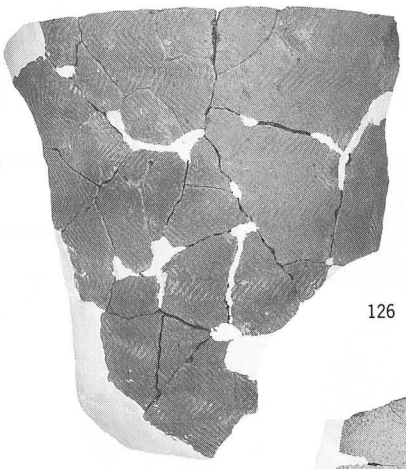
123



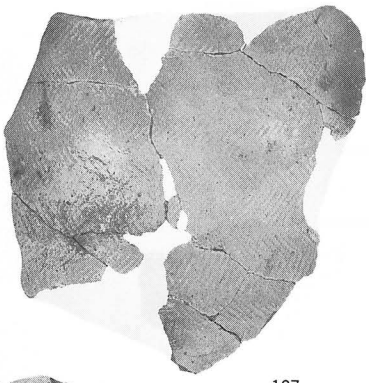
124



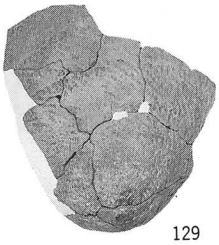
125



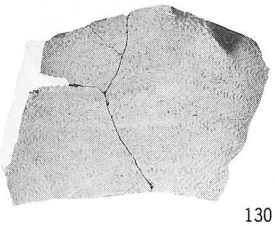
126



127

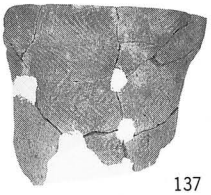


129

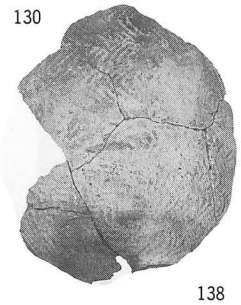


130

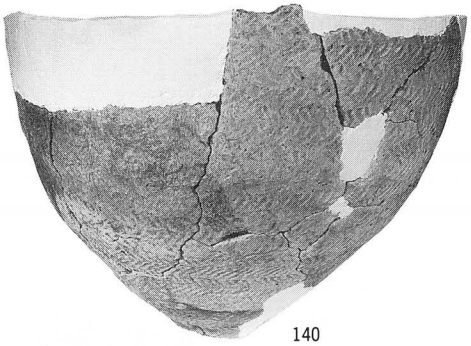
135



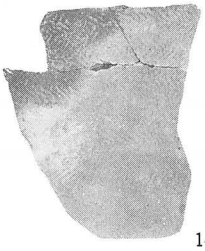
137



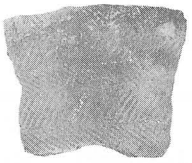
138



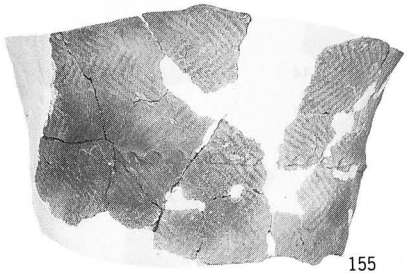
140



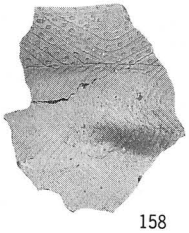
146



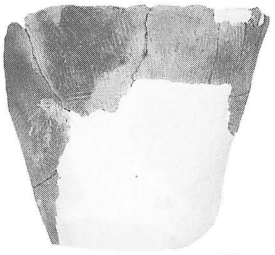
151



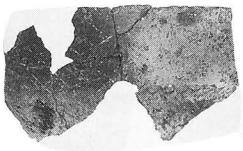
155



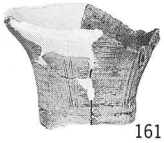
158



159

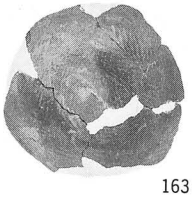


160

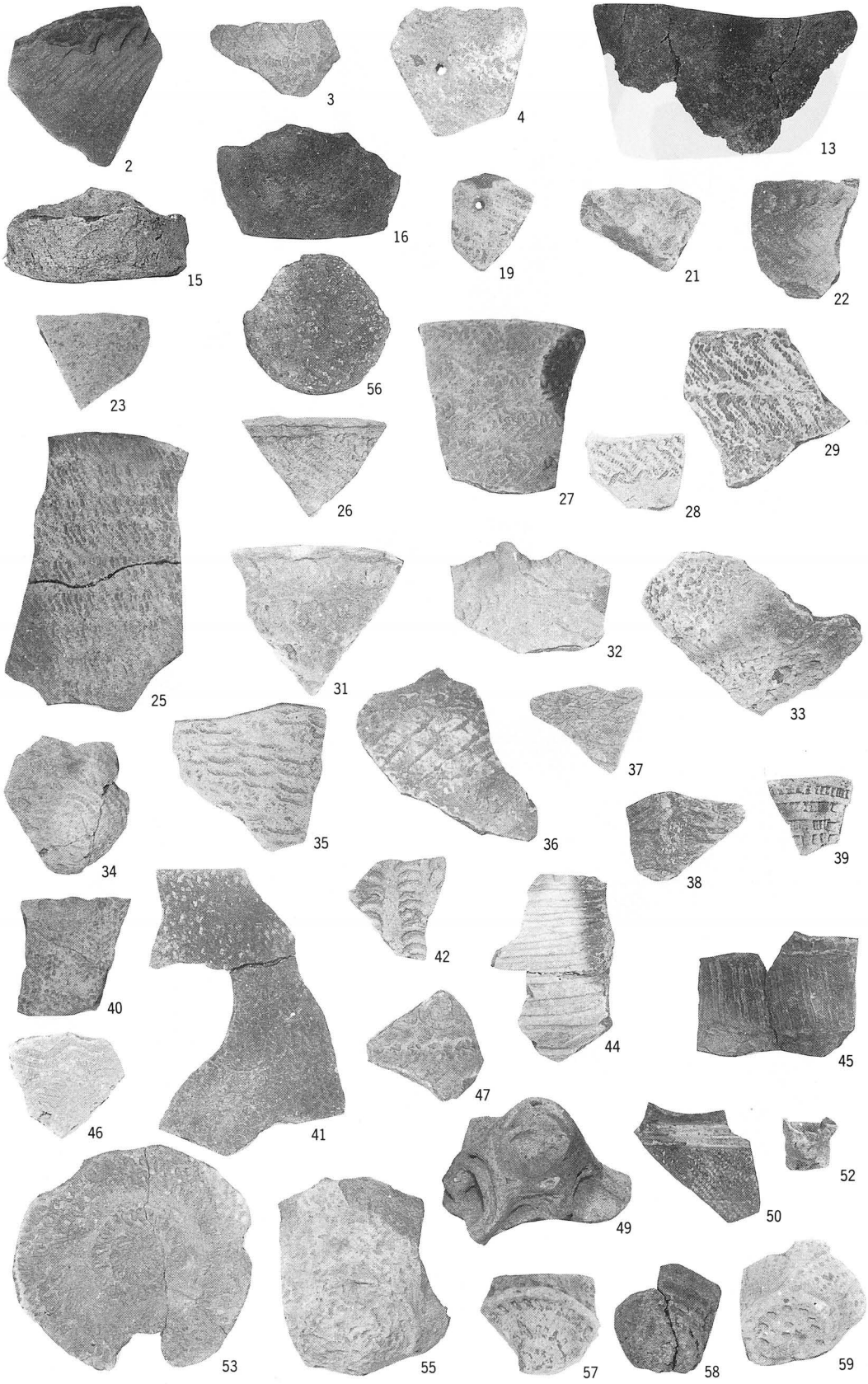


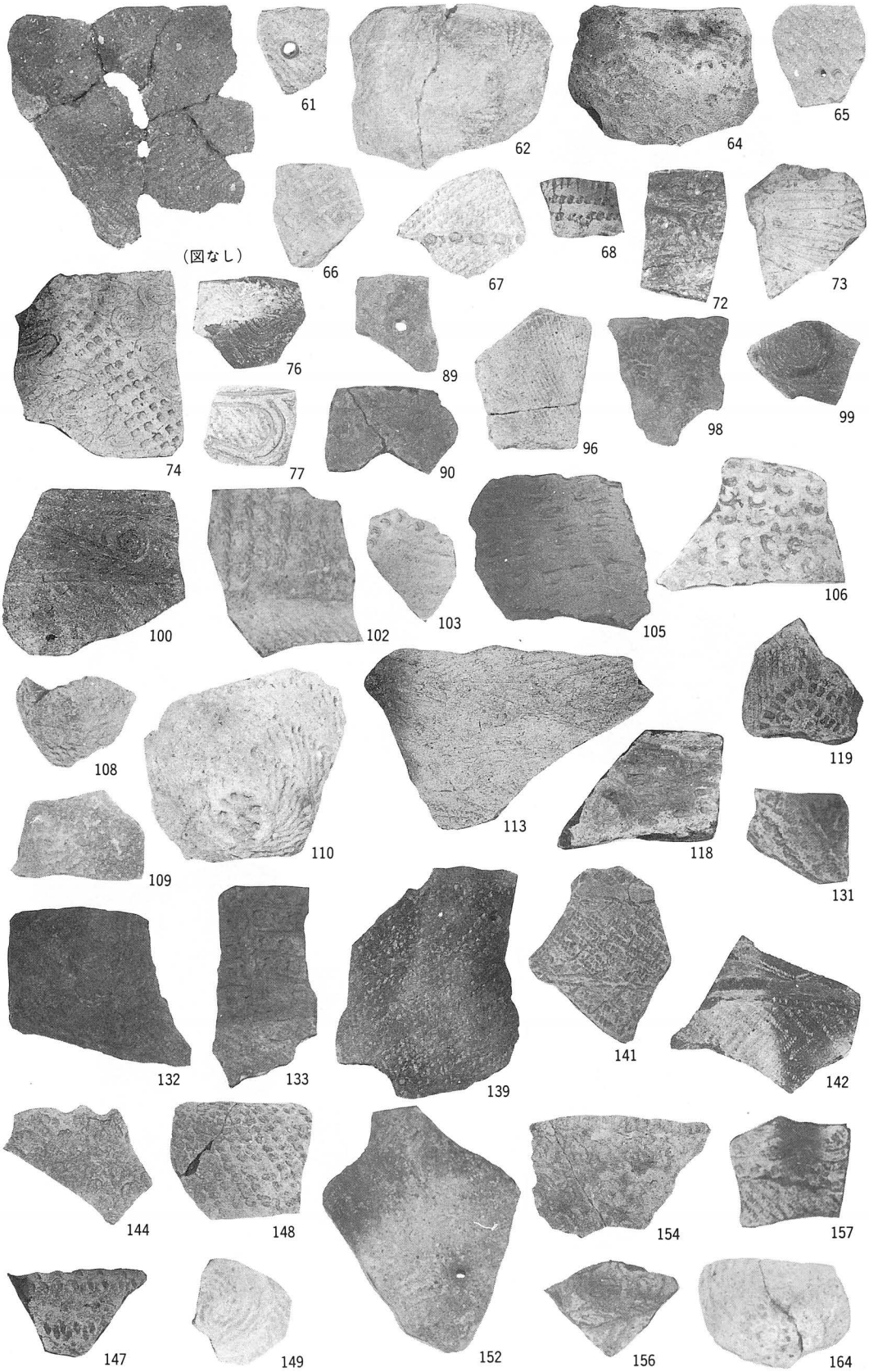
161

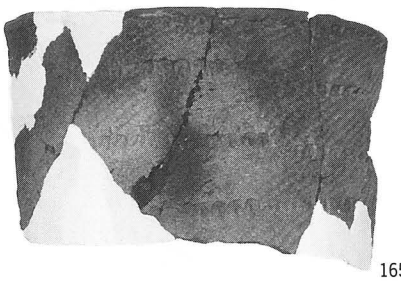
162



163


2
3
4
13
16
15
19
21
22
23
56
26
27
28
29
25
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
42
44
45
41
47
46
49
50
52
53
55
57
58
59

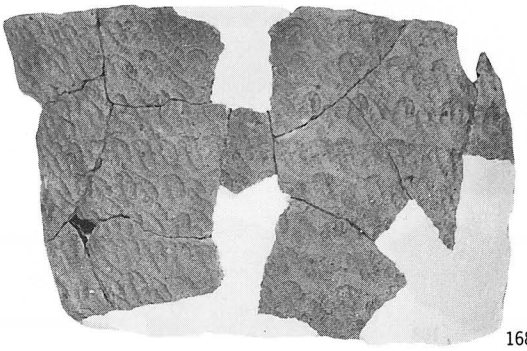

61
62
64
65
(図なし)
66
67
68
72
73
74
76
89
96
98
99
77
90
100
102
103
105
106
108
110
113
118
119
109
131
132
133
139
141
142
144
148
152
154
157
147
149
156
164



165

167

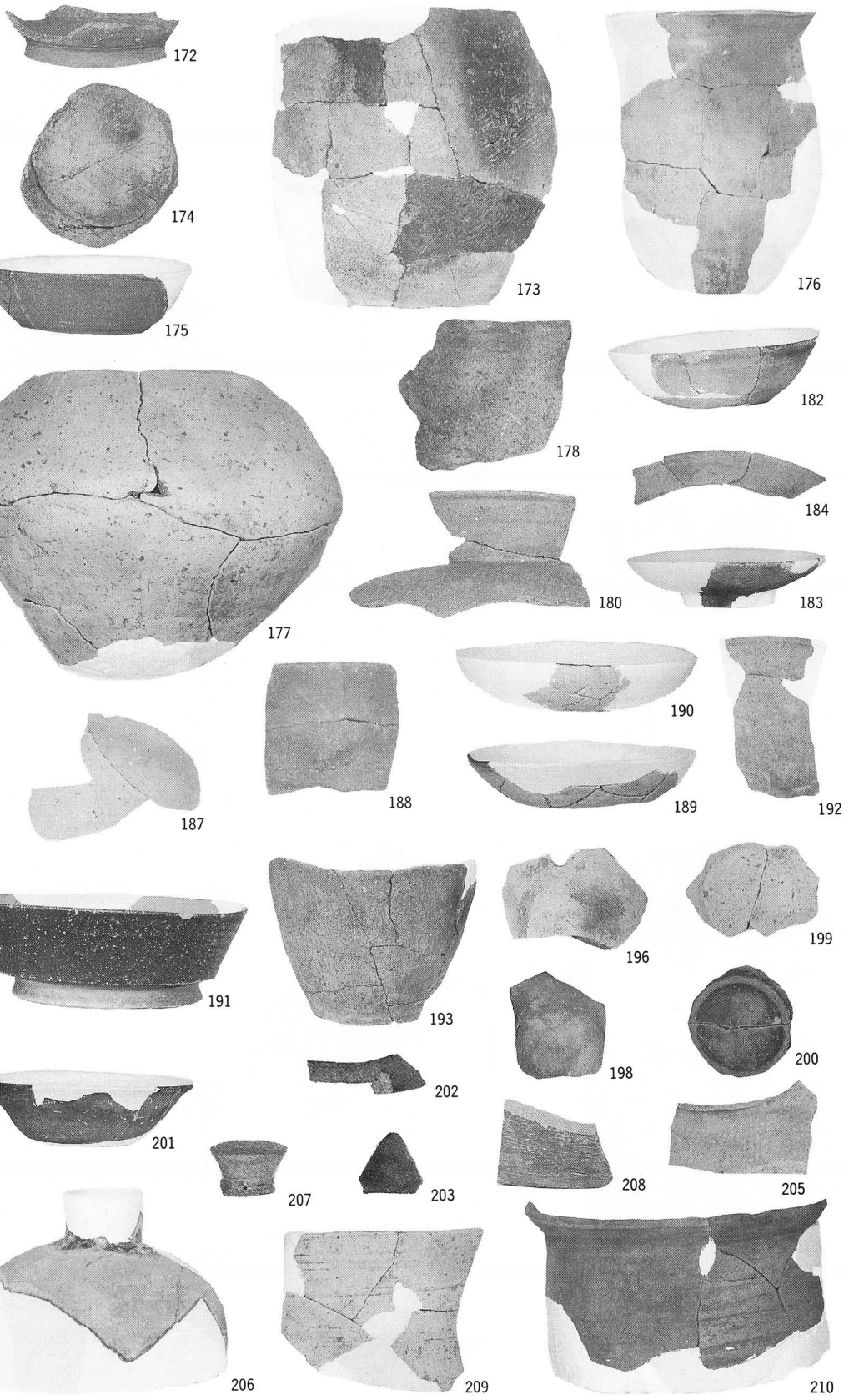
166



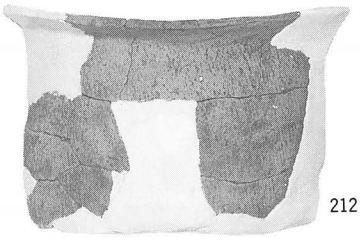
168

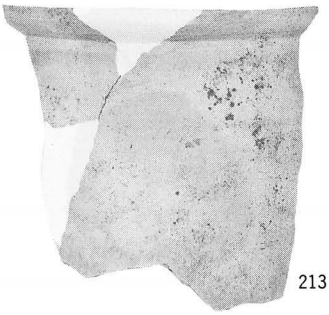
170

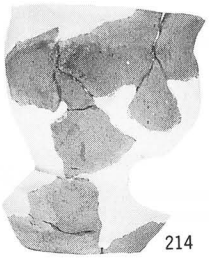
171

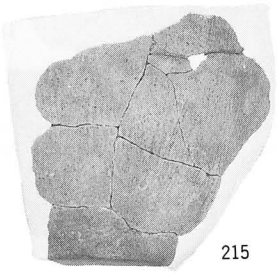

172
174
175
173
176
177
178
182
184
180
183
190
188
187
189
192
191
193
196
199
198
200
202
201
207
203
208
205
206
209
210

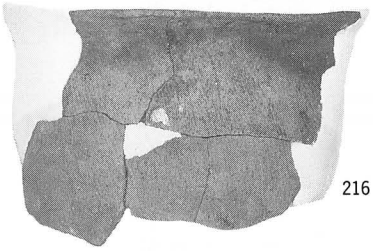
211


212

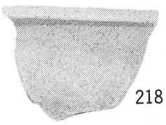

213

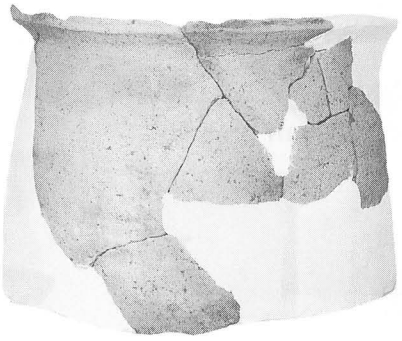

214

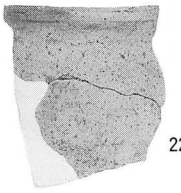

215

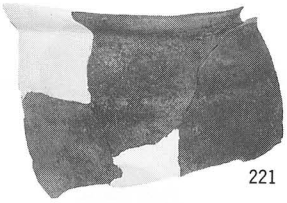

216

217

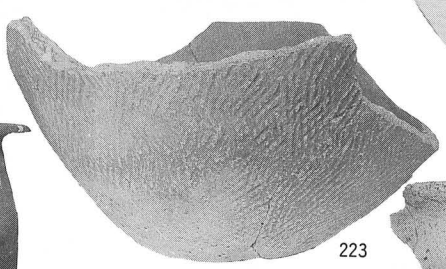

218

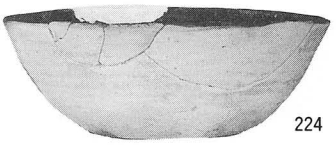

219


220

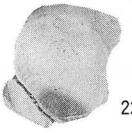

221

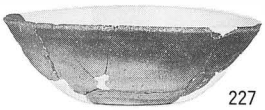
222

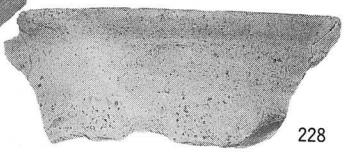

223

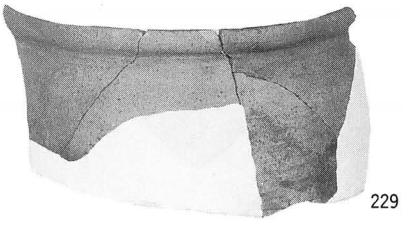

224

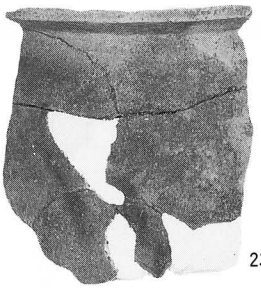
225


226


227


228

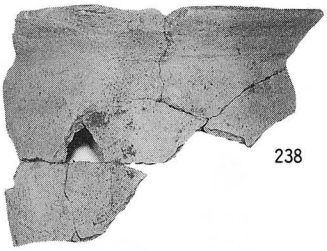

229

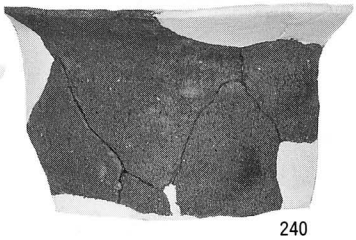

230

232

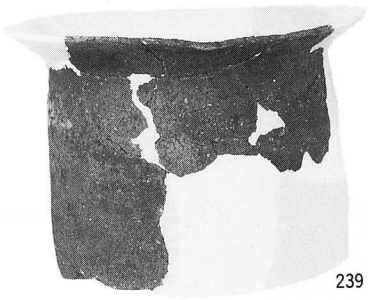
233

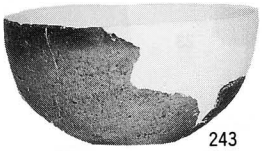
236


238


240

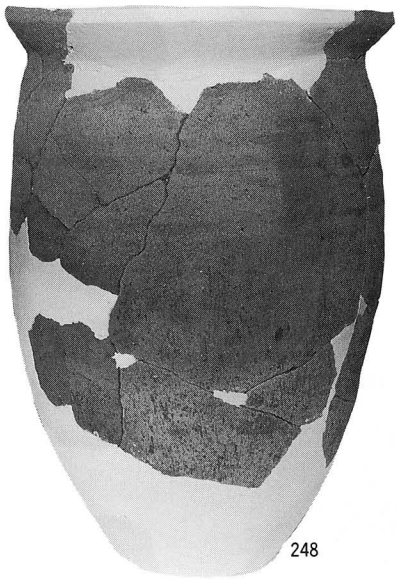
241

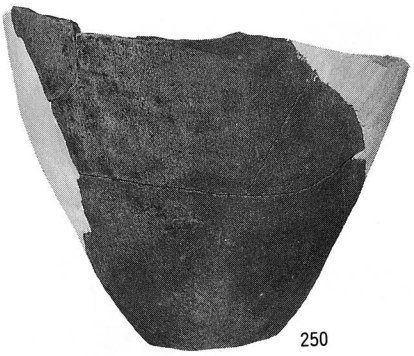

239


243

246

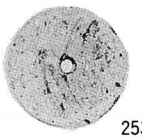
245

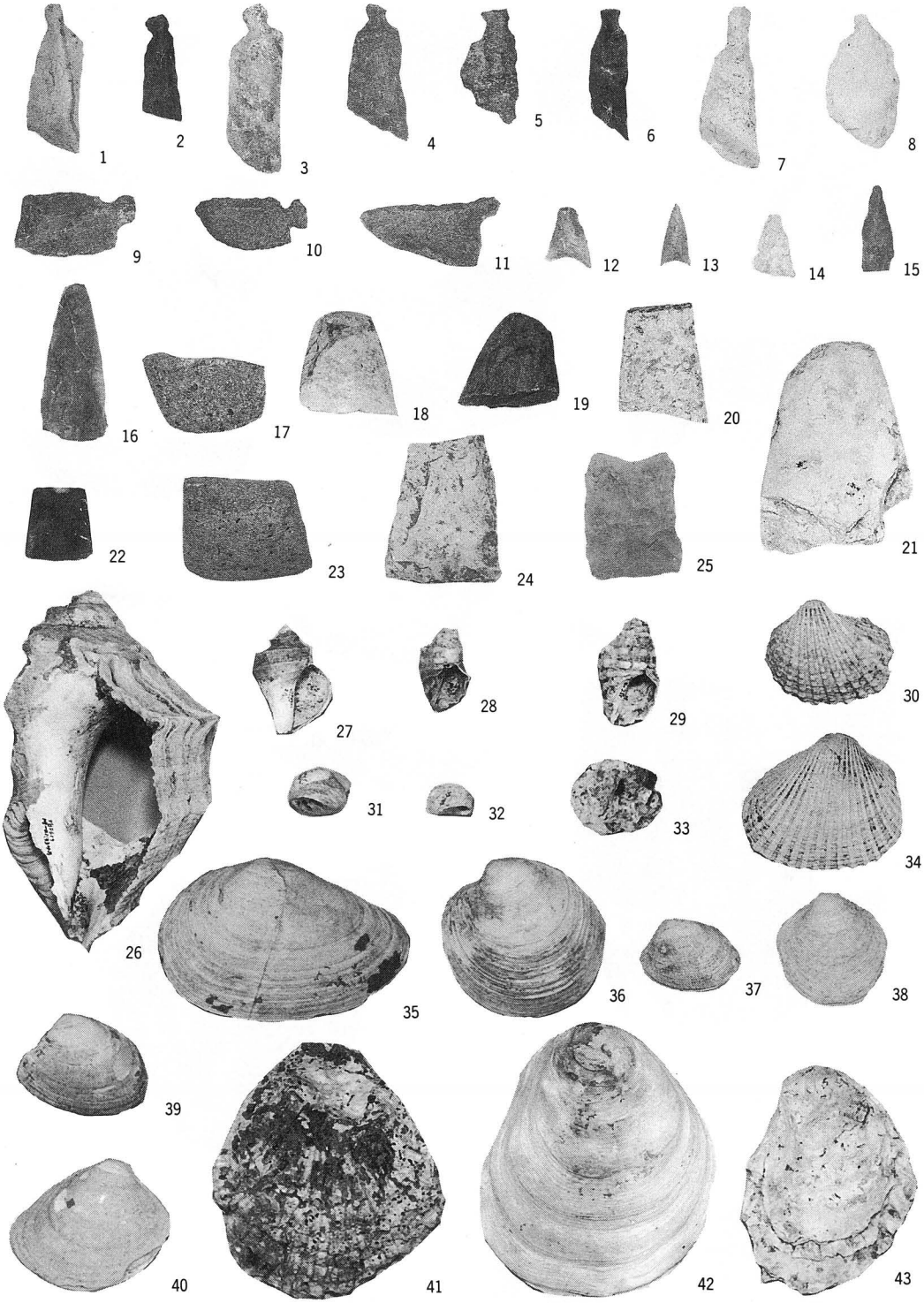

248


250

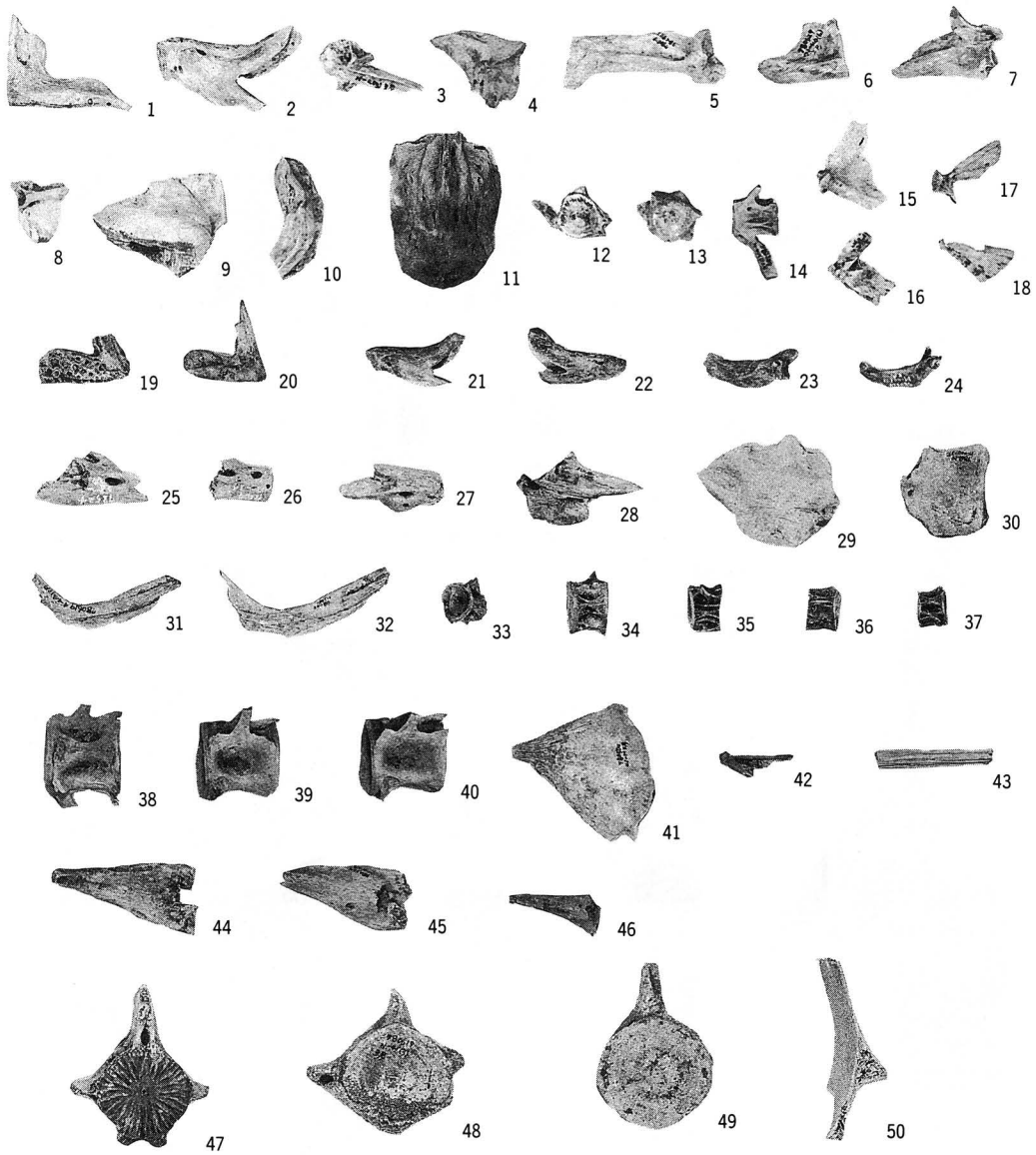
251

252


253

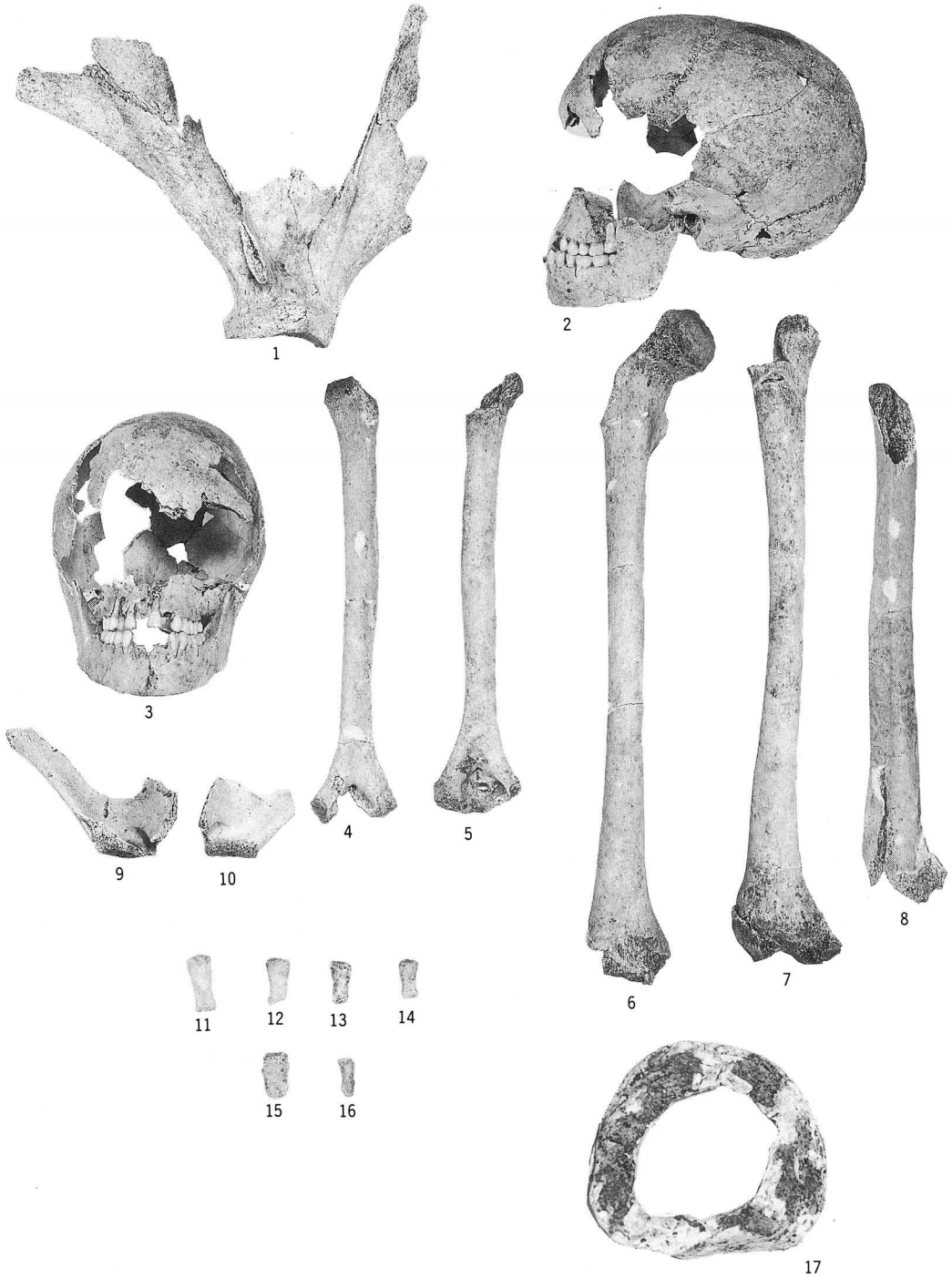


1～11 石匙　12～14 石鏃　15•16 石槍　17～23 石斧　24•25 石篦　26 アカニシ　27 アカニシ　28 イボニシ　29 レイシ　30 ハイガイ　31 クボガイ　32 スガイ　33 ヘビガイ　34 サルボウ　35 オオノガイ　36 カガミガイ　37 アサリ　38 オキシジミ　39 チョウセンハマグリ　40 ハマグリ　41 オオツタノハ　42 イタボガキ　43 カキ



マダイ　1 前上顎骨(L)　2 歯骨(L)　3 舌顎骨(R)　4 主鰓蓋骨(R)　5 上顎骨(R)　6 口蓋骨(R)　7 角骨(R)　8 主鰓蓋骨　9 上後頭骨　10 前鰓蓋骨(L)　11 額骨　12・13・14 椎骨　15・16 方骨　17・18 尾部棒状骨　クロダイ　19 前上顎骨(L)　20 前上顎骨(R)　21 歯骨(L)　22 歯骨(R)　23 上顎骨(R)　24 上顎骨(L)　スズキ　25・26 歯骨(L)　27 歯骨(R)　28 角骨(R)　29 主鰓蓋骨(R)　30 主鰓蓋骨(L)　31・32 鎖骨(L)　33～37 椎骨　マグロ　38～40 椎骨　41 ボラ 主鰓蓋骨(L)　42 ヒラメ方骨類似　43 エイ尾棘　44～46 種不明　海獣　47～50 イルカ椎骨

シカ　1 下顎骨(R)　2 大腿骨(L)　3 肩甲骨(L)　4 鹿角　5 中手骨(L)　6 脛骨(R)　7 踵骨(R)　8・9 距骨(R)　10 中節骨　11 末節骨　イノシシ　12 下顎骨(L)　13 寛骨(L)　14 尺骨(L)　15 踵骨(R)　16 肩甲骨(L)　17 脛骨　18•19 距骨(R)　20 膝蓋骨　21 基節骨　種不明　22 不明下顎骨　23 不明下顎骨　24～27鳥骨



1 種不明肩甲骨　2 左側頭面　3 前頭面　4・5 上腕骨　6・7 大腿骨　8 脛骨　9・10 不明　11～16 指骨
17 貝輪（イタボガキ）

七ヶ浜町文化財調査報告書　第7集

左　道　遺　跡

平成3年3月31日　発行

発　行　宮城県七ヶ浜町教育委員会
（〒985）宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字丑谷辺5－1
TEL　022（357）2111

印　刷　今　野　印　刷　㈱
（〒983）宮城県仙台市若林区六丁目西町4－5

1991